神は哀れな子羊に慈悲を与える

ハンバーグ派

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神は哀れな子羊に慈悲を与える

【Ｎコード】
Ｎ９３８７Ｗ

【作者名】
ハンバーグ派

【あらすじ】
「魔術士と忘れし伝説」、「とある涙の召使い」の主人公、シズマ＝ラインズ。
とある理由で神に仕える彼が、次に飛んだ世界は「ＧＳ美神　極楽大作戦！！」の世界だった。
彼の悲しみを救う為、シズマがその世界でなすべき事は一体……。

上記の2作品を読んでもらえれば、主人公情報はわかりますが、なければないで楽しめると思います。

主人公紹介を参照下さい。

駄文、週一位の投稿ペースになると思います。

第一章、昔々ある所に……。（前書き）

召喚士シズマ＝ラインズシリーズ第二段です。

投稿ペースはかなり遅くなりますが、よろしくお願いします。

第一章、昔々ある所に……。

無の空間。

必要なものは考えるだけで出現する、神の住居。

そんな所に、とある理由でここに住まう神の戦士となった僕、シズマ＝ラインズはコタツに入って神の読み終わった漫画を読んでいた。

「シズマ君、そこ、行ってみたい？」

「ブラフマー様、唐突ですね……悲劇はあったけど、これは僕が手を出していい問題じゃないんじゃないですか？」

先程まで、はるか遠く（距離の概念なんてないけど）でストラックアウトをしていた僕の仕える主、創造神ブラフマー様（見た目幼女）が僕を楽しそうに見ていた。

その世界、つまり僕のやるべき事は様々な世界に渡り、なすべき事をする事。

つまりは……僕の読んでいる漫画の世界に行く？　と聞いているのだ。

因みに今読んでいる漫画は……「ＧＳ美神　極楽大作戦！！」だ。

主人公「横島忠夫」が、様々な成長をしながら最愛の女性の願いの元、その女性の命と引き換えに世界を救う話だ。

まあ、それは兎も角……問題は。

僕に恐怖公、アシュタロスと戦えと言うんだろうか？

様々な世界を渡って来たけど、流石に無理がありますよ？

それに今まで僕は、干渉はしても歴史の中までは大きく変えてはいない。

もしやるとしたら、僕は魔族ルシオラの命を救う。

そんな物語の根本を変えかねない大問題を起こすだろう。

それを許容するって事かな？

「その後も彼の苦難は終わらないんだよ。そのヨコシマ君はその後、反デタント派に襲われて魔族因子が覚醒、最終戦争が起こるよ」

「……なんて夢のない話だ」

恋人を亡くしてまで世界を救ったのに……救われ無すぎる。

「その最終戦争でも一人生き残り……一寸違うね。再生を繰り返し、神魔の指導者と肩を並べる力を手に入れる。そして、彼は魔人皇と呼ばれるようになる。彼の世界に救いを与える為に……行ってみない？　シズマ君も行くなら、そうしたいでしょう？」

「珍しいですね。特定の個人に対しての干渉を、ブラフマー様が容認するなんて」

いつもなら、渡った先で設定されてるマスターや、僕が勝手に認めた人間の心の願望を叶えるものなのに。

「へへへ……わかる？　そうだよね、私らしくないよねぇ」

照れるな。

頬を掻くな。

僕の何十万倍も年上じゃないか。

「そこの二人から打診があったんだよね」

「二人？　サッちゃんとキーやんの事ですか？」

ブラフマー様が指差した先には、僕が丁度読んでいたページの、アシュタロスの乱の最後に現れた双界の最高指導者の姿がいた。

「なんて打診だったんですか？」

「えっとねぇ、「わいらは、よこっちに何も出来んかった。せめて、別の世界のよこっちには幸せになってほしんや」と「私達は彼に不幸しか与える事は出来ませんでした。今ある時間軸に干渉するには、私達だけでは足りません。父なる神の貴女にも、力を貸してもらえないでしょうか？」って言ってたんだよ」

「はぁ、やっぱり、ブラフマー様は凄いんですね」

事情はわかった。

世界を移り変わって、強くなるのが僕のやりたい事であり仕事だから、異論はないんだけど……問題が一つだけ。

「それで僕ですか……まあ、構いませんが。でも、僕に神魔族と戦

えるような力はありませんよ」
「大丈夫だよ！　シズマ君は強いし。あの世界は世界間の差が少ないから、メドーサクラスなら赤子の手を捻る位のものだよ」
そんなものなんだ……流石に、明らかに神魔族と戦闘になる世界には行った事ないな。
僕の世界や、Ｆａｔｅの世界の神魔族に類する存在は、未だ逆立ちしても勝てる気がしないし。

「わかりました……僕はどのタイミングに飛ぶんですか？」
「原作一話からだけど、シズマ君も希望がある？」
そうだなぁ。
彼にはまず、真っ当な生活をしてほしい。
あの無茶苦茶な食生活を改善させないと……。
と、なると、美神令子をなんとかしないとな。
でも、唐巣神父にも出来なかったしね。
美神令子の守銭奴をなんとか……！？
そうか、美神美智恵か！
「過去に、美神母娘がハーピーに襲われた時がいいです」
「へえ、なる程。美神令子の価値観を変えるんだね。でも、その後はどうするの？」

そうなんだよなぁ。

僕も年をとらないから、人界にいると困るんだよなぁ。

そうか、じゃあ、妙神山にいこうか？

「イベント時期まで、妙神山に行きますよ。そういえば、双界で僕の事を知ってる人、じゃないや、神はいるんでしょうか？」

「多分、サッちゃんとキーやんは知ってると思うけど、他はどうかなぁ。シズマ君には干渉してこないと思うよ」

邪魔されないならいいか。

要所要所は気合いでなんとかしよう。

「よし、じゃあ、シズマ君の希望に沿って、ハーピーに美神母娘が襲われた所に送るね。

そうだ、今回は、原作なんて全く気にしないでいいから、ヨコシマ君の為にシズマ君も楽しんで来てね」

楽しんでって……まあ、いつもの事って言えばそうだけど……。

それに、先の予測がたてられないし、そんなにひどく原作ブレイクする訳にはいかないよね。

そして、僕は英雄横島に救いある世界を与える為、彼等の世界に渡った。

意識が急速に覚醒してくる。　どうやら、僕は公園にあるベンチに座っているみたいだ。

立ち上がる。

周囲を見渡すが誰もいない。

「まずは、美神母娘を探さないとな……ん？」

なにやら、向こうからギャーギャー金切り声が聞こえる。

「待つじゃん！　お前等はあたいが仕留めるじゃん！」

「くっ！　なんとか、誘い込まないと……」

見に行こうと思ったけど、それには及ばず、目の前を翼を生やした魔族と、子供を抱いた栗色の髪の母娘が駆け抜けていった。

「ドップラー効果で子供の泣き声か……どんだけ早く走ってるのさ？　まあ、手間が省けるな。でも、飛んですぐその時じゃなくてもよくない？」

まあ、これもブラフマー様流の親切なんだろうな。

「やれやれ。さて、ハーピーは魔族としては下級。自分の力を試すいい相手だな」

僕は投影魔術で、正体がばれないようにピエロの仮面とＦａｔｅのアーチャーのつけていたマント、赤原外套を投影して身に付ける。

ダークも投影すると、僕も後を追った。

「――振り切れないわ。追いつかれるのは時間の問題。なら、せめてこの子だけでも……」

迫るハーピーに対して、逃亡を諦めて美神令子を未来に送ろうと決意する美神美智恵。

今は晴れてるけど……当然、天候も理解してるんだろうな、彼女は。

「追いついたじゃん！　人間にしては中々すばしっこかったじゃん！　フェザー・ブレッド！」

ハーピーの翼から放たれた羽の矢を、神通棍ではじく。

しかし、子供を抱いたままの姿勢ではバランスが取れず、体制を崩す。

続けて放たれるフェザー・ブレッド。

回避するしかない美神美智恵は、徐々に追い詰められる。

「後三十分、いえ、十五分あれば……でも令子、貴女だけは死んでも助けてみせる！」

「所詮人間は人間じゃん！　あたいのフェザー・ブレッドを弾いたのは大したものだけど、そこまでじゃん。サヨナラじゃん美神美智恵！！　フェザー・ブレッド！！」

放たれたハーピーのフェザー・ブレッド。

逃げ場なしと見て、徹底抗戦の構えの美神美智恵。

初めから泣きっぱなしの美神令子（幼児）。

どこまで持つかわからないけど、歴史的に考えると自分でなんとかするんだろうな。

でも、恩を売るにはこのタイミングだな。

僕はハーピーと美神美智恵の間に飛び出す。

そして、フェザー・ブレッドをダークで打ち返した。

「おわっ！　危ないじゃん！　自分の羽でダメージを負ったら、末代までの笑い物じゃん！」

「……仮面？　貴方は？」

ちっ、運のいい奴。笑い物になればいいのに。

「って、何者じゃん、お前は！」
「格好いい……」
「令子、下がってなさい！」

三者三様の反応を返してくれる。

ハーピーは悪役然と、美神令子は戦隊物のヒーローを見たかのように泣きやみ、美神美智恵は僕も第三の敵対勢力と言う風な感じ。

「魔族ハーピー。今すぐ消えれば、見逃してあげるよ」
「人間如きがあたいのフェザー・ブレッドを、偶然弾いた位で何を調子付いてるじゃん！　まぐれ当たりなら、そこの美神美智恵もあったじゃん！　誰だか知らないけど、お前もまとめて消えるじゃんよ！　フェザー・ブレッド！」

まあ、実力を試す意味もあるから、素直に撤退されても困るんだけどね。

じゃあ、ハーピーには後悔してもらおうかな？

「きっと、十分後には、死んだ方がよかったと思うくらいに涙する事になるよ……さて、美神美智恵だね。正直足手まといだから、脇で震えててくれ」
「ーーなっ！」

わざと美神美智恵を挑発してから、ハーピーのフェザー・ブレッドを先程と同じように打ち返す。

「危ないじゃん！！　お前、プロの選手かじゃん！　反射の狙いが

正確すぎるじゃんよ！」
「……それも悪くないね」
「……令子、良い子だから一寸ここで待っててくれる？」
「うん、わかった。ママは？」
美神令子を下ろすと、神通棍を握り直す美神美智恵。
「あんなわけのわからない格好の変なのに貸しを作ったとあったら、美神の女が廃るってものよ」
「ママも戦うのね、頑張ってね」
「ええ、ママ、頑張るわ」
そんな人情ドラマを繰り広げてから、美神美智恵はこちらに向かってきた。
まあ、仮面を付けたちっさいアーチャーな訳だから、変なの扱いもわかるけど……って！
「誰がちっさいのだ！」
「おわっ！　なんじゃん！？　急に叫びだして……病院行った方がいいじゃん」
「余計なお世話だよ。君に最上の後悔を与える方が先だから」
「ねぇ、貴方。あれを引きずり下ろせる？」

美神美智恵が僕の隣に来て、そう聞いてきたのは、馬鹿の一つ覚えのようにフェザー・ブレッドを放ち続けるハーピーに飽きてきた頃だった。

やっと来たか。

僕としては、一寸遅いかなと思った位だった。

美神美智恵が来るまで、僕が何をしてたかと言うと……。

ハーピーがフェザー・ブレッドを撃つ。
僕がフェザー・ブレッドを打ち返す。
ハーピーがそれを回避する。

繰り返されるその一連の動作に、ハーピーの苛つきは最高潮。

ハーピーは黙々とフェザー・ブレッドを放ち続ける機械と化していた。
と、つまりはハーピーで遊んでいた訳だ。

想像より強くないな。
もっとフェザーブレッドは鋭くて、ハーピー自身も素早い動きで撹乱したりするかと思ったんだけど。

確かハーピーは特化型の魔族。

その飛行性とフェザーブレッドの威力、射程距離、隠密性から美神美智恵を抹殺する為に人界に来た筈。

やり方が駄目だったのか、美神美智恵が優秀だったのか……まあ、

両方かな？

でも、相対しているって事は、その時点で危険性は半減してると言える。

僕が魔族と戦える証明にはならないな、これは。

「出来るよ……貴女こそ、仕留められるの？　美神美智恵」

「私を知ってるなら、霊能者としての美神も知ってるでしょう？」

「……いいでしょう。じゃあ、見せてもらうよ」

二人でハーピーに対する位置取りをして、各々の武器を構える。

「美神美智恵！！　馬鹿な奴じゃん、こいつに任せて逃げれば、逃げ切れたものを……死ぬじゃん！　フェザー・ブレッド！」

放たれるフェザー・ブレッド。

二本位まとめて撃てば、まだ戦略の幅が広がるのに……才能の無駄遣いだよな。

「じゃあ、行くよ……」

ダークに魔力を込めて、また打ち返す。

「馬鹿の一つ覚えじゃん！　そんなのに当たる訳……ぎゃん！？」

回避行動後に、悪態をついていたハーピーが悲鳴をあげて落ちてくる！

視線だけで美神美智恵を促すと、準備万端とばかりに、恐らくは

渾身の力を込めた神通棍を叩きつけた。
「ぎゃあああああ！！」
「消えなさい！　魔族ハーピー！　美神美智恵が極楽に行かせてあげるわ！」
力量は充分。
これならハーピーを魔界に戻す事が出来るだろう。
でも、それだけじゃあ面白くない。
「はい、美神美智恵。そこまで」
「きゃっ！　あ、貴方、何するの！？」
「ママ、可愛い……」
ハーピーを消される前に、美神美智恵の首筋に手刀を入れて一時的に麻痺させる。
「お前、どういう事じゃん。あたいを助けて何を企んでるじゃん？」
「……わかる？」
「くっ、令子、逃げなさい！　このままじゃあ、貴女が……」
「ーーママ？」
不思議そうな顔をしたハーピーは、僕の笑顔を見て恐怖に顔をひきつらせながら逃げようとする。
「折角、現界を許したのに、逃がす訳ないでしょ？　発動、フェザー・ブレッド」

先程から、僕の撃ち返していた全てのフェザー・ブレッドが羽ばたこうとしていたハーピーを取り囲む。

「な、なんなんじゃん！？　なんであたいのフェザー・ブレッドが！？　どうなってるじゃん！？」

「まさか！　撃ち返したハーピーのフェザー・ブレッドに霊力を込めて、所有権を奪い取ったと言うの！？」

魔族は威力は高いけど、扱いが雑だから干渉するのは別に難しくないけど。

実際、ハーピーを落としたみたいに、回避直後に軌道を変えて直撃させる事が出来るし。

「さて、ハーピー？」

びくりと震えるハーピー。

「な、なんじゃん？　もう魔界に返してほしいじゃん」

「まあまあ、君、僕の召喚獣にならないかい？」

半泣きでへこんでるハーピーよりも、身動きの取れない美神美智恵の方が状況を把握出来てるみたいだった。

「魔族を使い魔にしようっていうの！？　本気なの！？」

「あたいを好きにしようっていうじゃん！？」

「選ばせてあげるよ。僕と契約を交わすか、魔界に送還されるか。僕といれば強くなれるよ」

「決まってるじゃん！　そんなの魔界に「魔界に送還される場合は、

封印を施した上に自らの羽で串刺しになるけど」……卑怯じゃん！
そんなの、選択の余地がないじゃん！」

まあ、僕が勝者な訳だから当然だよね。

でも、それだけじゃあ可哀想だし、一方的な契約は僕はしない主義だから……。

「僕と来れば、戻れるよ……昔の君に」
「……本当じゃん？　あの姿に戻れるんじゃん？」
「僕は絶対に約束を違えない。君を戻すと誓うよ」

じゃないと、妙神山に行けないし。

「……わかったじゃん。契約するじゃん」
「ん、ハーピー。君の判断は楽しいよ」

僕はハーピーの周囲からフェザー・ブレッドを消す。

出されたスキルを無理矢理取り入れていただけだから、消した時点でフェザー・ブレッドを僕は使えなくなった。

わざわざ言わないけど。

「さて、美神美智恵……」
「貴方、何者なの……魔族の技を奪い、契約を了承させ、堕天したハーピーを戻すと言う……人間じゃないの？」

探るような目で僕を見る美神美智恵。

でも、体はまだ動かないみたいだ。

確かに僕は人間ではないけど。

この世界じゃ、どうなんだろう？

「僕は亡霊の旅人（ゴーストリィトラベラー）。貴女が真理に辿り着いた時、僕の事がわかるよ」

「無茶苦茶じゃん。こんなのについていっていいのか迷うじゃん」

ハーピーを引き連れて、二人から離れようとしたけど、美神美智恵にちゃんと美神令子を教育するように伝えないと。

何の為に来たのかわからなくなる。

確かこの時期から亡くなった事にして、美神令子の前から消えたんだよね。

そして、寂しさから美神令子は守銭奴に変わってしまった。

「――美神美智恵。貴女がこの後何をしようとするか、僕は知っている。でも、それはおすすめしないよ。美神令子の精神に、多大な影響をもたらすからね」

「貴方、まさか私と同じ……」

一寸違う。僕は先に起こるイベントを知ってるけど、未来人でも時間跳躍者でもないよ。

でも、僕が実は異世界の住民だから……なんて、流石にそこまでは考えつくまい。

特に返答しないまま、ハーピーを引き連れてその場を後にした。

第零章、主人公紹介（前書き）

わかりにくい、技や武具の説明はその時に入れていきます。

第零章、主人公紹介

氏名、静馬篠宮

真名、シズマ＝ラインズ

マスター、創造神ブラフマー
（とある事情により神の戦士となり、人から竜種に転身した）
様々な世界を渡り、経験、スキルを体得している。

所有武器

吉備津天地刀
（タイプ、剣、所有者、桃太郎／シズマ＝ラインズ）

カリバーン
（タイプ、剣、所有者、アーサー／シズマ＝ラインズ）

ヒヒイロカネ
（タイプ、手甲、所有者、シズマ＝ラインズ）

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔投影魔術〕
（タイプ、銃、所有者、シズマ＝ラインズ）

天術、早風

（タイプ、剣、所有者、シズマ＝ラインズ）

所持スキル

格闘術
他武器を使った技術
召喚術
投影魔術
固有結界
空想具現化
天術

宝具

打ち砕くもの（ミョルニル）

天術、柔剛相交
（ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン）

約束された勝利の剣
（吉備津天地刀）

勝利すべき黄金の剣
（カリバーン）

超電磁砲
（レールガン）

真・超電磁砲
（ハイ・レールガン）

固有結界
（ーーーー）

他、Ｆａｔｅに関する宝具。

王の財宝
（ゲートオブファンタズム）
〔投影した武器を展開する為〕

天の鎖
（エルキドゥ）

壊れた幻想
（ブロークンファンタズム）

赤原猟犬
（フルンディング）

第二章、山へ行こうよ（そのいち）（前書き）

話は全く進みません。

第二章、山へ行こうよ（そのいち）

「――告げる、
汝の身は我の下に、
我が命運は汝の剣に！
聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら――」

契約の文言。

元はＦａｔｅのサーヴァントの文言だけどね。

僕の力ある言葉は、対象である魔族ハーピーに働きかける。

「――我に従え！　ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！」
「わかったじゃん、魔族ハーピー、その名に懸け誓いを受けるじゃん！
貴方を我が主として認めるじゃんよ、シズマ＝ラインズ」

誓いは交わされた。が、ハーピーの姿は変わらない。

「シズマ！　話が違うじゃんよ！　召喚獣になれば、あたいはハルピュイアに戻れるって言ってたじゃんよ！」
「ちゃんと話を思い出して。そんな言い方は全くしてないから。僕は召喚獣になれば戻してあげるよって言ったんだよ」

期待し過ぎたせいか、どうも召喚獣になった時点で風の精霊ハルピュイアに戻れると思っていたみたいだ。

怒るハーピーを適当にあしらいながら、僕等は神族の人界での中

継地点である妙神山に向かっていた。

「ずるいじゃん……あたいの純情な心をシズマは傷つけたじゃん……ずるいじゃん……あたいの純情な……」

急ぐ旅でもないので、人型を取らせて徒歩でゆっくりと妙神山に向かうが、繰り返し独り言のように僕への不平を洩らす。

流石に期待に応えないと可哀想かなぁ。

まあ出来なくは無いんだけど、場所が悪いんだよね。

人界は基本的に、双界に監視されている。

そんな場で軽々しく力を使う訳にはいかない。

世界から僕は注視されていないなら、尚の事目立つ訳にはいかないから。

最も、このハーピーも面白いから敢えて説明はしないけど。

「召喚士とはそう言うものだよ。もうハーピー、君は僕には逆らえないんだからね」

「ウキー！　なし！　なしじゃん！　あたいはもう魔界に帰るじゃん！！」

「そんな大声だしたらＧＳに退治されるよ、虚弱体質のハーピーちゃん？」

「ムキー！　仮面取ってもサディスト振りは変わってないじゃんよ

ぉおおおお」

僕はどこ吹く風で、ハーピーの叫びだけが辺りにこだました。

そして僕等は、とある結界で覆われた森の奥深くに来ていた。

そう、人狼達の隠れ里だ。

道のり的には妙神山の途中みたいなものだし。

「ここ、何があるじゃん？　あたいは妙神山には入れないけど、はっ、ここに捨てて行ってくれるじゃん？　魔界に帰れるじゃん？」

「希望的観測おつ。そんな訳無いでしょ。全く……君の為に来たのに、妙神山に直行するよ？　マジで」

訳がわからないだろうな。

僕が知ってる中で、神魔族に組みしていない勢力の中で最も強固な結界を築いているのは、この人狼族だ。

だから、ハーピーを元に戻すのに最も場所的に優れている。

問題があるとしたら、今ここにいるのが明らかに姿を隠した魔族と、それを率いている人外の存在と言う事なんだけど……。

山に入る時点で気配を絶っておけば良かったな。

まあ、一応呼び掛けてみるか。

「ハーピー、魔気を抑えろ。ここは人狼の隠れ里だよ。あまり、刺激しないように。誇り高き人狼よ、僕は召喚士、シズマ＝ラインズ。貴方方の助力を得たい。対話の場を設けてはくれないだろうか？」

語りかけている間に、ハーピーを促して買ってきたドッグフードの封を開けさせて、中まで匂いが届くようにする。

原作ではこれで、道は開けたけど状況が違うからな。

しかも、僕が一方的にお願いをするんだから無理矢理なんて出来ないしな。

「それにしてもシズマ。一体何をするつもりなんじゃん？」

「……時間かかりそうだな。ハーピー、君をハルピュイアに戻すのさ、この中で」

長期戦になりそうだと判断して、ビバークの準備をしながらハーピーに僕の考えを説明する。

「ちゃんとあたいの事考えてくれてたじゃんね……感激じゃん。シズマ、良い人間だったじゃんね」

大袈裟だな。一寸いじめすぎたか？

なんか調教されたみたいになってるし。

それにしても、魔族のハーピーの鼻を持ってしても、僕が竜人だという事はわからないか。

ハーピー。契約して、魔力や情報が流れ込んでるんだから、そこ

に魔力と神通力、神力がある事に気付こうよ……ある程度の記憶だって共有出来るんだから。

「冗談はともかく、ハーピー、君も僕の仲間だからね。当然、君が充実する為に尽力するさ」

「……惚れそうじゃん……ん？　でも、シズマはあたい等魔族も神族にも、見つからないようにしないといけないのかじゃん？　じゃあ、なんで妙神山に？」

おっ、生徒のハーピー君が鋭い所を突いたよ。

頭を撫でてあげよう。

「僕は普通の人間じゃないからね。注目される訳にはいかないのさ」

「訳ありマスターじゃんね。人間界も中々楽しい事になりそうじゃんね」

いやいや、僕は、極一部の例外だからね。

「開かないな」

「……じゃん」

村の結界の入口でビバークしているが、依然結界は解かれない。

時間はまだまだ余裕だけど、このままじゃつまらないな。

何か手早く、北風と太陽的な解決策はないかなぁ。

「どう思う、ハーピー？」

「あたいは馬鹿だからわからないじゃん。誰かに説得してもらえば

いいんじゃん？」

説得ねぇ……僕にはそんな友好的な知り合いいないしなぁ。

よしんばそれだけの力を持つ誰かに頼めても、世界を飛んだばかりの僕を信用してくれないしなぁ。

何処かにいないかなぁ、そんな、漫画みたいな、川沿いの土手で殴り合った後、親友になるような存在……。

「ー！？　それだ！」

「おわぁ！　ビックリしたじゃん！　やっぱりシズマは病院に行った方が……」

「いる！　いるよ、そんな存在！」

一人だけ思い浮かんだ。

頼るならあの人しかいない！

ナイスアイデアを出したハーピーを褒め称えながら、僕等は足早にその彼の所へ行く事にした。

第二章、山へ行こうよ（そのに）

「一体なんなんじゃん……」
「なる程……こういう風に、世界は収束するのか」

今、僕の目の前ではまさに死闘が繰り広げられていた。

相手は妖怪の医者と言われていた天狗と、主要人物の一人である犬塚シロの父親。

ならば今は、シロの発熱での膏薬を取りに来た所か。

でも、どうしようかな？

ここの結果、彼は片目の視力を失う。

それがなければ、犬飼ポチの妖刀八房の持ち出しも防げるかもしれないし、その命も救えるかもしれない。

でもなぁ、そうするとシロが街に出る事がなくなる。
つまり、横島がシロと会う事がなくなる。

「まぁ、彼ならそっちの方を望むだろう」
「何を独り言を言ってるじゃん？　やっぱり病院じゃんじゃん？」

毎回毎回失礼な奴だな。
ほっぺたつねってやれ。

「ひ、ひたひ、ひたひじゃんほぉ」

「口は災いの元だよ」
犬塚はやはり強いな、でも、天狗には及ばないみたいだな。
あ、刀が弾かれた。
これは決まったな。
シロが治ってるのを見ると、ただでは負けない筈……つまり、目をやられるのは、ここか！
「発動、ハーピー、フェザー・ブレッド！」
「ん？　わかったじゃん」
放たれるフェザー・ブレッド、その羽は僕の狙い通りに天狗の拳を制止した。
「いるのはわかっていたが……無粋な」
「ーー何者！」
「すまないけど、勝敗は決していた。ならば、無駄に負傷するいわれはないよ」
「私は、娘の為に、どうしても天狗殿の軟膏を手に入れねばならない！」
勿論、シロには治癒してもらわなければ困る。
だから、代替案として……。
「変わりに僕が貴方と戦います、天狗殿。勝った暁には、人狼の彼に、彼の望む薬を差し上げてくれないか？」

「……魔族を連れた人間よ。お前も私に望みがあったのではないのか？」

天狗にも僕が人間にしか見えないか。

いい感じだね。

でも、それに関しては犬塚がここにいた時点で、半分叶っているようなものだし。

「……しかし、何故貴方が私の為に」

「別に貴方じゃなければ駄目って事はないよね？　これが出来たら人狼の貴方に手を貸してほしい事なあるんだ」

ハーピーは意味がわからない。と言った顔。

ハーピー一寸馬鹿すぎないか？

脊髄反射で反応のするの止めようよ。

天狗は別に誰が相手でもいいという感じ。

犬塚は正直立ってるのも辛かったみたいで、座り込んでしまう。

「人狼殿、天狗殿、それで構いませんか？」

「私に出来る事なら、なんでも……宜しくお願いします」

「魔族を手駒にする人間を信用しろと？」

犬塚は娘の為に盲目的になってるみたいだけど、天狗はそうでもないみたいだな。

「そんなものは拳を交わしてみればわかるだろう？」

「……それもそうだな」
ハーピーには手出し無用と伝え、犬塚をヒーリングするように指示を出す。
「なんであたいが、人狼のヒーリングなんて……」
「なんか言ったかい？　僕の召喚獣の魔族ハーピーちゃん？」
「なんでもないじゃん！　ヒーリングなんてあたいは得意じゃないのに……そら、人狼、傷口を出すじゃん！」
「あ、ああ……済みません……」
「本当に使役しているのだな、人間が魔族を……」
「意外だった？　魔族（彼等）の方が力には従順だからね……」
言外に魔族よりも強い力を持っている事を伝える。
「いや、面白い。私の所に来て、先客の願いを叶える為に戦うなどと言う存在。しかも魔族を使役して、その魔族よりも強いと言う。楽しみだよ」
「それはどうも、じゃあ、始めようか？」
そこからは言葉はいらなかった。

さて、僕の戦術としては霊力の有無はわからないから使えない。
魔力に関しても、この世界に魔術という存在がないみたいだから無闇に使う事が出来ない。

僕の戦術は殆どが魔力を使うんだけどなぁ。

1対1を渇望する天狗に対して、僕の十八番の召喚術を使う訳にもいかない。

つまりは……本当に拳でのぶつかり合いしかないって事だ。

こういった試合形式のぶつかり合いに対して、天狗は超一流だ。

全く……心躍るとはこの事だね。

先制は天狗だった。

素早い移動からの突き出しや、縦横無尽に動き回り攪乱してくる。

僕も、受け流しを主体とした構えで一つ一つ確実に流して隙を窺う。

「動きに隙がない。彼は本当に人間かい？」

「あたいのマスターだからね。この位当然さね」

無闇に威張るなハーピー。

確かに天狗の攻撃は、フェザー・ブレッドより早くはないけど。

「避けるだけか？　お前もやはり口だけの人間か？」

僕の隙を狙っているみたいだが、そんな隙は見せない。

軽いジャブ程度の攻撃を繰り返しながらも、精神的な疲労から肩で息をしながらで僕を挑発してくる天狗。

「呼吸が乱れすぎだよ。そんな挑発ないでしょ？」

「……まだだ、まだ負けと決まってはいない！　秘術、影分身の術！」

まだ一撃もくらう前から追いつめられた天狗は、早速秘術を使う。

影分身か……便利だな。

その姿を二体とした天狗が、揃って襲いかかる。

左右からのラッシュを腕一本づつで防ぐ。

ドラゴンボールの世界か！

「ーーもらったぞ！」

背後から、第三の天狗が飛び込んでくる。

いやいや、わかってたから……。

「考えが甘いよ、天狗殿……」

左の天狗にはラッシュ時のラグをついて、拳を叩きつける。

分身だったみたいで、煙を上げて姿を消す。

右の天狗はそれを見て一瞬姿動揺する。

その間に、服を掴んで背後の天狗に投げつける。

「んな！？」

「天狗殿、敗因は、僕を人間風情と侮った事だよ」

空中で正面衝突した天狗二体に、必殺の一撃を叩き込む。

「必殺！　ライダーアァアアアァアァキッィィイイィイク」

格好つけた、ただの跳び蹴りが直撃した天狗は、木々を薙ぎ倒しながら地面に叩きつけられた。

「ーー成敗！　ハーピー、ヒーリングだ」

「つ、強い……」

「なんで、こんな事ばっかり……」

勝負はついた。

早速ハーピーにヒーリングさせる。

やりすぎたかな？

見ると、天狗は全くの意識不明状態で頭をお星様が飛んでいた。

「まさか私が人間に完膚無きまでにやられるとは……」

「油断するからだよ」
「そんなレベルのものではなかろうよ、全く……ほら、人狼よ、約束の軟膏だ」
投げ渡された薬を犬塚は大切に受け取る。
「よいのですか？」
「構わぬ、それがこの人間との約束だからな。強き人間よ、お前の名を教えてくれ」
「シズマ……静馬篠宮。召喚士だよ」
どうやら天狗に惚れられたか？
誇り高き妖怪が名を覚えると言う事は、それだけで意味がある。
「私も自らの未熟を痛感させられる、楽しい時間であった。何時でも来るといい。私はここにいる、歓迎しよう」
認められる、仲間として扱われると言う事は、家族として扱われるという事だから……。
「天狗殿、では、私は……」
「早く娘の所へ行ってやれ」
一刻も早くシロの所へ戻りたい犬塚は、そわそわととんでもなく落ち着きがない。
僕等との約束については、移動しながらと話している為、僕等も準備をする。
「あたい達も行くじゃんよ」

「そうだね。天狗殿、やっぱり一つお願いが……」
「なんだ？　やはり、私に願いが……」
「いや、違う。さっき見せてもらった影分身の術、使わせてもらってもいい？」

天狗は目を見開くと、これは愉快とばかりに笑い出した。

「我が秘術を、一度見ただけで我が物としたか。ほんに規格外よな。好きにするといい」

許可も得たし、色々な使い方も考えてみよう。

例えば、あれで武器でも増やして見たら面白そうだな。

僕等は呆気に取られたハーピーと犬塚と一緒に、人狼の里に歩を進めた。

第二章、山へ行こうよ（そのさん）（前書き）

プライベートで余暇がとれない状況にあり、暫くアクセス出来ないと思います。

なので、書きためていた分を全て投稿させてもらいます。

楽しんでくれていた方には、本当にごめんなさいです。

今後は期間未定でいつか更新になると思います。

第二章、山へ行こうよ（そのさん）

「なんで、私と同じ速さで走れるんですか！？　人間でしょう！？」
「あたいのマスターだからじゃん！」
「威張るな、虚弱体質……端から見ると、魔族に人狼が襲われているようにしか見えないだろうな」

我先にと急ぐ犬塚と、空を飛んでついて行くハーピーと、併走する僕。

驚くのも無理ないだろうけどさ。

「早駆」と言う、僕のスキルの一つ。

もっと高レベルで使えば、超加速も可能である。

因みに犬塚には、僕等の願いは既に伝えてある。

村に入る為の口添えをしてもらおうと、天狗の所に行った事も。

神族への転化に土地を使いたい。と言うだけならば、多分大丈夫だろう、との事。

神族が生まれると言う事は、その土地が神聖な力で包まれると言う事。

むこう何十年の豊作や微弱ではあるが、村の守護する力もあるのだから。

「では、行ってきます。まずは娘のもとへ行かせてもらうので、少し待っていてください」
「うん、わかってる。物事の優先順位位はわかってるよ」
「ああ……楽しみじゃん、これであたいもハルピュイアに戻って、姉様達に会えるじゃんよぉ」

村に入っていった犬塚。
夢想するハーピー。

長年の夢が叶うんだ。そりゃあ、うっとりもするよなぁ。

ハーピー短いつき合いだったけど、君との契約は楽しかったよ。

さて、まあそれはともかく……待ってる間暇なので、ハーピーを強化してみる事にした。

一日目
「意識が行き渡らないから、羽の同時操作が出来ないんだよ」
「む、難しいじゃんよ」

二日目
「フェザー・ブレッドを撃ち出して終わっちゃ駄目だよ。その後も操作を継続して、複数回対象を狙うようにしないと」
「あ、頭が痛いじゃん……」

三日目
「込める魔力が足りないよ。この位の威力じゃ、一撃必殺の宝具にはなりえないよ。もっと唯一の羽には魔力を込めないと」
「あたいにそんな魔力ないじゃんよ……」

四日目

グロッキーになったハーピーを、初日に作ったハンモックに寝せてのんびりしていた。

「そろそろかな？」

「うう……嫌じゃん。あたいの羽にやられるのは、羽、羽は嫌……」

やりすぎたかな？

僕やハーピーは睡眠が必要ないから、72時間ぶっ通しで鍛錬したのが、随分堪えてるみたいだ。

「静馬殿、お待たせしました……って、これは！？」

ん？　なんか変かな？

見回してみて、犬塚が驚いている理由がわかった。

えぐれた地面、なぎ倒された木々。

そう言えば、隠れ里なのを忘れてたよ。

一寸暴れすぎたな。

「ああ、ゴメンね、ハーピーの鍛錬をしてたんだけど、やりすぎちゃった」

「は、はあ、そうですか。あの、長老が静馬殿をお待ちです」

やっと会えるか。

グロッキーのままのハーピーを引きずって、僕等は人狼の里に足を踏み入れた。

「契約獣、ハーピー、古の盟約に従い、その姿を己の望むものへと転化せよ」

「ま、魔力が溢れて……ち、力、あたいは、あたいはーー」

光に包まれたハーピーが次に姿を表した時、その姿は威厳ある風の精霊、ハルピュイアであった。

「わ、私、戻れたんですね……」

涙を流してその場に座り込むハルピュイア。

見ると観客に来ていた人狼達も、貰い泣きしていた。

散々ハルピュイアが堕天した理由を話したからな。

「ハーピー、いや、ハルピュイア。君は神族に戻る事が出来た。この後、どうする？　君が望むなら、神界への道を開こう……いや、妖精郷か？」

ハルピュイアも元に戻ったし、もう必要もなくなった為、契約を解除しようとする。

「お待ち下さい、マスター」
「どうしたの？　君を戻す為に契約しただけだから、もう契約なんて気にしないでいいよ？」
「こんな大恩を受けて、何も返さずのうのうと天界に帰る事等出来ません」

義理堅いなぁ、原作のハーピーとはえらい違いだ。

いや、まぁ僕と共にいたハーピーならもしかしたらとは思ってたけどさ。

「そんな事は気にしないでいいさ。僕は僕の目的の為に君を捕らえたんだから」
「……魔人皇の事ですか？」

何故それを！？

いや、彼女はまだ僕の召喚獣。

僕の記憶を読んだか？
しかし、ハーピーは……。

「ハルピュイア、君はどこまで知った？」
「流石マスターです。すぐに気付かれましたか……小さな主の事位です」

……最悪だ。

殆ど全てじゃないか。

これじゃあ、ただ解放する訳にはいかなくなったな。

「契約の持つ重みは理解しているつもりです」

つまり、今の自分は、僕の持つ記憶をほぼ全て有していると考えるべきだな。

周りの見物客（人狼）達は、流れについていけずポカーンとしてる。

……まだ泣いてるやつもいるな。

全く……空気嫁。

「じゃあ悪いが、ならば契約を破棄する時に、記憶を消させてもらう」

「マスター、まだわかりませんか。鈍感や察しが悪いとか言われませんか？」

……あるな。

何故それを知っている？

「私は、マスターについて行く、と言っているんです」

「しかし……それでは、君が望んでいた虹の女神との再開も……」

僕の召喚獣になると言う事は、世界を捨てると言う事。

つまり、仲間との永遠の別離だ。

ハーピーみたいに、種族が変わったから会えない、みたいなレベルのものじゃない。

待人がいるならば、尚更そんな事するべきじゃない。

「恩だけてはなく、貴方という人に触れて、私が決めた事です。どうかマスター、私に貴方の使い魔となる許可を……」

そこまでしてなんで、僕を気にしてくれているのかわからないけど……まだ選択の機会はある。

長い目で見て判断してもらうか。

「……わかった。この物語の終着点までは、まだかなりある。ならば、その最後の時に、改めて君の答えを聞かせてくれ。それが僕の最上級の譲歩だ」

「頭の固い……わかりました。ではマスター、私は旋風の精霊ハルピュイア、改めて今後ともよろしくお願い致します」

仕方ないだろう。

僕の為に、全てを捨てろなんて言えないし、なんなら最後の時に無理矢理契約解除するって手もある。

今、僕にいる契約獣はカラスのクロウだけなんだから……言葉を話せる召喚獣には、かなりそそられるさ。

意識を戻すと、周囲から聞こえてくる溢れんばかりの拍手。

それは人狼達のものだった。

「おめでとう、精霊様」
「幸せにな」
「今の時代は女性上位だ」

口々に今の契約について言ってる筈だけど……何かちがくない？

「有難う御座います。私、幸せになります」

なんか、こう、もっと、チャペル的なあれを思い浮かぶんだけど……。

「いやぁ、ワシも随分長く生きたが、人と精霊様の婚姻等初めてじゃわい」
「私もです。シロにも見せてやりたかった」
いや、違うよ、あなた方、間違ってるからね。

「おい、里の牧師様を呼んでこようぜ」
「そりゃあ、いい。誰か、赤飯を準備しろ」
「あらあら、皆様、有難う御座います」

僕は必死に誤解を解いていこうとするが、まるで聞き耳を持たない。

長老に会うや否や、二つ返事で転身の許可を出した時から疑問に思うべきだった。

人狼達は……お馬鹿さんだ！

「投影……開始（トレースオン）」

誰も僕の言葉に耳を傾けないのをいい事に、僕は投影魔術を使って、刃を潰したダークを二本投影する。

「マ、マスター。お祝いして下さってるのですから、落ち着いてください……」

「うるさい……もういやだ。強引で、話を聞かない人外はもう沢山だぁ！」

筆頭として主の幼女が浮かんだが、その全てを怒りに変えて、僕は暴れ出した。

村の男達を全員叩きのめした事をここに述べておく。

「長老、今回は僕等に村の貴重な場所を使わせてめらい、有難う御座いました」

「いやいや、ワシ等にとってもよい話じゃったからの……それに、いいものもみれたし」

人狼を叩き伏せてから、すぐに村をでようとしたが、長老や犬塚に止められ一泊する事になった。

夕食は大広間で、熱が下がったばかりというシロと、父親の犬塚だけが不参加で、他の全ての人狼が参加するというお祭り具合だった。

人狼は祭り好きか。

超回復すごいな。

二〜三日は動けないつもりで、はたいたのに。

なんか、里に入る前は不審者だったのに、帰る時は家族みたいだった。

天狗もだけど、妖怪はやはり情に厚い。

今の僕には眩しすぎるな。

「静馬殿、本当に有難う御座いました。シロが助かったのは、貴方のお陰です。精霊様がいなければ、シロを嫁にでも、と思ったのですが……」

「あら、有難う御座います」

まだ言うか。

僅かに目を細めると、それだけで伝わったのか、長老にぶん殴られる犬塚。

すぐに起き上がって、信じられない位に手を振る犬塚。

全くもう……。

「静馬殿、貴方も、精霊様も、ワシ等にとっては最早家族同然。いつでも訪ねていらしてください。歓迎します」

「有難う御座います。嬉しいです。では、これで失礼します」

シロの顔を見れなかったのは残念だけど、家族が出来たのは嬉しかった。

隣に歩くハルピュイアを見ながら、次の行き先、妙神山に向かって歩を進ませた。

第二章、山へ行こうよ（そのよん）

崖を越え、谷を越え、僕等の山にやって来た。

はい、こんにちわ。世界を渡る旅人、シズマ＝ラインズです。
今は世界観に合わせて、静馬篠宮と名乗っています。

ここは妙神山にある神界と人界の中継点、妙神山修行場です。

「この門をくぐる者、汝一切の望みを捨てよ……ですか」
「やる気のない人は帰れ、って事か……ここまで来てそんな人いるのかね？」

門に張り付いたオブジェに見える鬼門の顔。
左右に控えるその胴体。

（何も言わなければ、鬼門は話さないつもりなのかな？）
（いえ、一寸だけ、ぷるぷるしています。話しかけるタイミングをみているのではないでしょうか？）

人見知りか……！

「入る手段がないねぇ」
「そうですね、門を叩けばいいのでしょうか？」
「汝等……」
「ハルピュイア、フェザー・ブレッドって、まだ使えるの？」
「はい、勿論です。マスターの鍛錬で行った事は問題なく行えます」
「一寸……」
「それは凄いなぁ、ハルピュイア、苦労してたんだね」

ハルピュイアの手には、光り輝く羽が。

ハーピーの頃とは、込められたエネルギーは比べ物にならない。

それだけ、堕天によって弱体化してたって事だろうな。

「じゃあ、ノックのかわりに一撃当ててみようか？　門が開くかもしれない」

「わかりました。では……」

「「待てーー！！」」

鬼門の胴体が、門と自分の顔を守るように立ちふさがる。

「「お主等はこの妙神山修行場に来た修行者だろう！　問答無用で攻撃するやつがあるか！」」

「やっと動いたか、空気読めない鬼だ事」

「テンプレ的ですね」

やっぱり顔が門にくっついてるから、フェザー・ブレッドは怖いよね。

「「我らはこの門を守る鬼、許可なき者、我らをくぐることまかりならん！　この右の鬼門！　そしてこの左の鬼門あるかぎり、お主等のような非常識な者には決してこの門開きはせん」」

「ハルピュイア、ゴー！」

「はい、フェザー・ブレッド！」

「「グオアアアアア」」

「やっぱり、門毎吹き飛んだねぇ」

「一寸強すぎたでしょうか？」

これでも、ハルピュイア的には大分加減したんだろう。

鬼門にも大きなダメージはないみたいだし。

「く、貴様等……がくっ！」

「右の！　しっかりしろ！　右の――！」

なんか、向こうではドラマが繰り広げられてるなぁ。

「じゃあ、入ろうか？」

「よいのでしょうか？」

いいさ、鬼門の試しは終わったし。

「お前達、一体何を……二人共、これは一体何事です！？」

建物から出て来たのは、竜神族の証拠である角をはやした一昔前の服装をしている管理人、小竜姫だ。

修行場に足を踏み入れた僕等は見えてないみたいで、神剣を手にして鬼門達に事情を確認している。

「あの者達が急に……」

「いきなり我ら鬼門を破壊しようと……」

鬼門、へりくだり過ぎじゃない？

（この世界、鬼と竜にそんな位の違いがあるの？）

（そうですね、見たままだと思ってもらえれば……）

鬼も苦労してるんだなぁ。

「貴方方、この妙神山修行場には、修行でいらっしゃったんですか？」

「はい、鬼門の試しと言うものがあると聞いたので……門を壊してしまったのは申し訳なく思っています」

「まあ、彼等にも非はあった訳ですし、今回は多めに見ましょう。でも、使役する神族を使うのはギリギリですね」

やっぱり駄目か……。

（まあ、そうでしょうね。私はマスターの召喚獣ですが、マスターの自力ではありませんからね）

（はあ、ま、見逃してくれたからいいんじゃない？）

とりあえずという事で、やっと修行場に入る事が出来た。

さあ、これからどうなるかな？

「申し遅れました。私はこの妙神山修行場の管理人をしています、小竜姫と申します」

「これはご丁寧に、私は召喚術士静馬篠宮。彼女は僕の契約召喚獣の……」

「旋風の精霊、ハルピュイアと申します。以後、お見知りおきを」

やはり知っていたのか、小竜姫の驚きは大きい。
「ハルピュイアって……魔族ハーピーですか！？　何故、いつ彼女が神族に転化したのですか！？」
またもや神剣を取り出してハルピュイアに向けようとする。
浅慮が過ぎるだろう、小竜姫。
全く……。
「転化していたとしても、今は神族ですよ。自らの同士とも言う存在に手をあげるのですか？」
「ーーうっ！」
僕の言葉を受けて、自ら手を止める小竜姫。
「それとも、一度でも堕天した存在は既に仲間ではないと？」
「いえ、そんな事は……」
真っ直ぐ過ぎる気質の小竜姫は、僕の言葉に少しでも思い当たる部分がある為、かなり歯切れの悪い返答を返す。
「彼女は僕の召喚獣です。侮辱するというならば、僕にも考えがあります」
「マスター、何をするつもりですか？」
「うーん、そうだな……上司に言いつけようか？」

「申し訳ありませんでした！　妙神山修行場を預かる立場なのに、軽はずみな行動をとってしまいました！　ハルピュイアさん。すみませんでした！　どうか、平に平にご容赦を！」

いやいや、ゲーム猿を恐れすぎだろうよ。

どうせ、このやり取りも見てるんだろうから無駄なのに……そう言えば、この娘も結構ドジっ娘だしね。

なんか、ここに留まる為の話や修行はもう一寸後になりそうだった。

「すみません、取り乱してしまって……」
「お気になさらず。マスター、話を進めますよ」
「ん？　ふぁああ。わかったよ、すぐ行く……」

余りに長い間、ハルピュイアへの謝罪が続く為、横長の椅子に寝ていたのだ。

「……私のせいなんでしょうが、よく人間が、神族の管理する土地で寝てられますね」
「気にしない、気にしない。そんな些細な事で悩むと……はげるよ」
「はげません！　全く……それで、貴方はどんな修行をお望みですか？」

ふむ、なんて言ったものか……とりあえず目的は達したし、１０

年間は暇なんだよね。
でも外界にいると、１０年間年老いない人間なんて奇異の目で見られる。
だから、修行はついでいいからここに置いて欲しい。
そんなの、どう伝えようか？
（いずれ、ある程度は話すのです。多少は、マスターの情報を開示する必要があると思います）
（やっぱりそれしかないか……彼女は真っ直ぐ過ぎるから、気をつけないとな）
とりあえず、１０年もいれば一回位はゲーム猿と会う機会はあるだろうし……普通の修行者を装いましょうかね。
神族の鍛錬にも興味あるし。
「自身の限界まで強くなりたいのです」
「何故そんなに力を求めるのです？　過ぎた力は己を滅ぼしますよ」
ハルピュイアは、僕と小竜姫のやりとりを黙って見ている。
きっと、僕の目標もわかっているだろうな。
「絶対に救わなくてはならない相手がいるのです。この存在を賭けても。これは僕にしか出来ないんです」
「……そうですか。わかりました。人界も色々あるみたいですね。本来ならば、紹介状を持っていない方の修行はご遠慮頂くのです

が今回だけ特別ですよ」

紹介状か……忘れてたな。

（今から唐巣神父の名前とか出してみる？）

（いえ、それでは逆に怪しまれます。むしろ彼女の好意に甘える方がよいでしょう）

「それで、篠宮さん。貴方はここでどのような修行を望みますか？」

それだ！　その質問を待っていた！

今だ、トラップカード発動！

「とにかくきついやつを。判断は小竜姫様にお任せします。期間は大体１０年以内でお願いします」

「私も転化して時間が経っていない為、出来るだけ長い時間あった方がマスターの助けになれる為、助かります」

「また、難しい事を言われますね。それでは修行者と言うより、私の弟子ではないですか」

なるほど、それも悪くないな。

魔人皇となった横島に最後まで助力した神族は、彼女と天龍を中心とした竜神族だったしね。

今の内に引き入れておくか。

「神剣の使い手と音に聞こえた、小竜姫様の弟子ですか。素晴らしいですね。宜しければ僕を小竜姫様の弟子にしてはもらえませんか

？」
「えっ？　私、私に弟子ですか……愛弟子、可愛い、やりがいのある……でも、私は妙神山修行場の管理人と言う立場が……」

迷ってるな。

確か彼女に直の弟子はいない筈。
修行者は妙神山に来たのであって、今まで小竜姫に修行を請いに来た人間はいない筈。

「……と思って言って見たんだけどさ」
「はあ、私も多少は効果があるかと思って話に乗ってみたのですが……」

まさか、ねぇ……。

「「こうもトリップ（される）するとは……」」

結果としては、彼女の弟子になる事は出来た。
しかし、それは今、この時間から実に一時間以上も小竜姫が妄想に耽った後の話であった。

第二章、山へ行こうよ（そのご）

「じゃあ、まずはこの服に着替えてくださいね」

日本の銭湯みたいな作りの建物に入る際に渡された服に着替え、僕はその先の異空間の広がる土地に出る。

因みに着替えはハルピュイアは別である。

僕は別に構わなかったが、ハルピュイアと小竜姫様が反対したのだ。

なんか、二人に言われると肯定した僕が、飛んだ変態野郎みたいで嫌だな。

一応弟子入りしたので、様付けで呼ぶ事にした。

小竜姫様は、普通に名字呼びである。ぶっちゃけた所、偽名なので名字読みの方が違和感があるけど。

（マスター、この空間……）

（うん、一寸失敗したかもね）

目の前には、天下一武闘会よろしく、戦闘場と人一人入れる程度の魔法陣が設置されている。

（やっぱりこれって……あれだよなぁ）

美神令子が受けたデットオアアライブの修行だよね。

（ですね。しかも、マスターのシャドウは恐らく……）

（……確実にドラゴンだよなぁ）

一応、今までの異世界の旅で竜種に転化してるからなぁ。

（今バレるのは不味いよね？）

（それはもう……マスターは既にこの世界の竜神、小竜姫さんに弟子入りしていますから。最悪、行かず後家と言われる竜神に拘束され、この場でゲーム猿の名の下に祝言があげられ、幸せな、しかし確実に何かを失ってしまう選択肢と共に、人界に帰れなくなる羽目に陥るでしょう）

なんか、随分具体的だな。

（ハルピュイアってさ……小竜姫様の事、嫌い？）

（いえ、そんな事ないですよ。良くも悪くも神族ですしね）

ううむ？　ハルピュイアは神族じゃないのかな？

（私をその括りから解き放ったのは、どなたですか？）

（……すみません、僕です）

じゃあ、仕方ない。適当に誤魔化すか。

「じゃあ、篠宮さん。この方……「一寸待ってもらえますか？」……どうされました？」

不思議そうに首を傾げる小竜姫様。人を疑う事のない無邪気な表情だね。

「何をするかはわかりませんが、長期間の修行の予定です。よけれ

ば、まずは僕の力を知ってもらいたいのですが？」「それも一理ありますね。いいでしょう。じゃあ、特別に私が相手をします」

腰の神剣に手をかける小竜姫様。

（ちゃんと加減してくれるよね？　彼女？）

（……余裕もって回れれば、多分）

（それは無理って事？）

（マスターが加減はしないって事でしょう？）

（魔術、召喚術、天術、超能力全て使わないんだよ。技術位は真剣にやるさ）

やはり、スラリと神剣を抜き放つ小竜姫様。

「篠宮さんは獲物は何にしますか？　特別にそちらにある物は、何を使用されても構いませんよ」

見ると、そこには様々な武器防具が出現していた。

（中々の物ですねぇ）

（うん、結構ランクの高い武器ばっかりだ）

（流石愛弟子ですね）

そう言われるのも、なんか罪悪感が……。

いつか真実を話します。

そう心の中で謝罪して、とりあえずその中にあった真鍮の手甲と苦無を手にする。

「では、これ等をお借りします」
「……わかりました。いつでも構いませんよ。かかってきなさい」
さて、ブラフマー様の言葉が真実なら、この状態でも良い勝負が出来る筈。
ぶっちゃけ、これで勝ってしまったらもう仕方ない。
そう言う運命だったんだろう。
じゃあ、始めようか。
幾つかの苦無を忍ばせ、手甲を装着して小竜姫様と相対した。

さて、お兄さんは瀕死です。
小竜姫様との手合わせ、初めは順調だった。
太刀筋の分かり易い小竜姫様の剣は、確かに速さはあるけど対処出来ない程じゃない。
回避、受け流しをしながらカウンターを狙う僕の戦術は効果的だった。
まあ、近接戦闘のスペシャリストじゃない美神令子が凌げた位だ。

僕に出来ない筈がない。

問題はその後だった。

どうも劣勢を悟った小竜姫様が、即座に使ってきたのだ。

超加速を。

「――ぐはっ！」

「どうしました？　まだ、私に致命打は与えられてませんよ？」

背部に走る衝撃に耐えながら、体を起こす。

「一寸反則じゃないかな、これは？」

（やはり、こうなりましたね。マスター、如何なさいますか？）

姿を消すと同時に、襲う攻撃を直感のみで防御しながら攻撃の隙を探す。

（やられっぱなしもしゃくだね。せめて一矢報いたいけど……）

（マスターは一応召喚士なんですよ……と、もう聞いてませんね……）

韋駄天じゃない小竜姫様は、長時間の超加速は使えない筈。

その動きは無限じゃないし、必ず何処かで止まる。

そこを突くしかないな。

でも、そんな事は本人も理解してるだろうから……手は……。

「人間としては大したものですが、私の弟子になるにはまだまだこれから修行が必要ですね。じゃあ、今日はこれでお終いです！！」
入った！

「発動、苦無、影分身の術！」

僕は苦無を空に放ると、その数を増加させる。

僕の体を包める位の数を。

「なっ！？　これは！！」
「そこですね！！　拳技、短勁！」

僅かな抵抗と共に消えていく苦無。

それにぶつかり鋭さの鈍った神剣を右腕で受ける。

綺麗に切断された右腕に構わず、気功を込めた正拳突きを小竜姫様に叩きつけた。

「きゃあああああ」
「まだ！　発動、苦無影分身！　行け！」

消失して残ったオリジナルの苦無を、再度複数に増加させて小竜姫様に投擲した。

「ふう、止血しないとな……」
「マスター、私から一つ、貴方に言いたい事があるのですが……」

落ちた右腕をつけて、僕にヒーリングするハルピュイア。

心なしか頭に角が見える。

「聞きません」

「子供ですか！？」

「聞きません」

「このマスターは……とにかく、無茶な真似は止めてくださいね。無駄にハラハラさせないでください」

「……悪かったね。つい熱くなっちゃって」

「わかってますよ。そう言う人なのは……マスターの歴史を知ってるんですから。これはただの愚痴です」

耳が痛いなぁ。気をつけないと。

「うう……まさか私が負けるとは」

「小竜姫様、有り難う御座いました。お陰で自分の危うさと、未熟さを悟る事が出来ました。これからよろしくお願いします」

きょとんとする小竜姫様。

そりゃあそうだよね。

人間に負けたと思ったら、礼を言われてるんだから。

「私個人としては、もう少し手を抜いてくださると良かったのですが。まあ、武神ですものね。あまり手を抜かれると矜持にかかわりますしね。

マスターが不足を自覚出来たのです。これも試練にしてくださっていたのでしょう？　有り難う御座います」

ハルピュイアもすぐに、僕に便乗してくる。

「え、ええ……時間はまだまだ沢山あります。今日はこの辺にしておきましょう。ヒーリング……はハルピィアさんがいるから大丈夫そうですね。じゃあ、脱衣場の裏に温泉がありますから、そこで疲れを癒やして下さい。私はこの後の準備もあるので、先に戻りますね」

言うや否や、小竜姫様は先に戻ってしまった。

「悪い事したなぁ」

「流石に純粋な神族の小竜姫が相手だと、罪悪感がありますね」

ハルピュイアと顔を見合わせる。

「どうする？」

「マスターにお任せしますよ」

つまり、思いは一緒か。

なんか、ついてそうそうこんなイレギュラーな事ばっかりでいいのかなぁ？

長い付き合いになるんだし、フォローしとかないとな。

ハルピュイアの事を見ながら、人知れず溜め息をついた。

第三章、世界は僕に牙をむく（そのいち）

今日、信じられない事が起きた。
それは朝まで振り返る。

「動きが甘いですよ！　はぁ！」
「だぁぁ！　人外の動きなんて真似できるか！　拳技、短勁！」

それ、剣二本を同時に振ってるんじゃないの？　って位にほぼ同時に見える神速の剣戟を、拳に込めた気を爆発させる事で距離をとって回避する。

「その神族の剣を！　一太刀も浴びずに！　いなし続けるのは！　何処の人外認定ですか！」
「いや！　だって！　当たったら死んじゃうし！　だぁ！　だから無理だって！　物理的に篭手と神剣の鍔迫り合いとか有り得ないから！　脚技、スピンアタック！」

肩で息をしながら距離を取り、そろそろなんとかしないと命がダイイングだな、と悟り体内の気を高める。

「む、やる気になりましたね。ですが私も毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回やられてばかりじゃありませんよ！　目にもの見せてあげます！」
「小竜姫、日本語が不自由な人になってますよ。それに、前口上は結構ですが、まだマスターに一太刀も入れた事ありませんよね？」

僕の前で構える小竜姫様の神剣が、脱力したようにその切っ先を

落とす。

「ハルピュイアさん。それは言わないで下さい。武神としての誇りを取り戻す為、私はなんとしても篠宮さんを越えなくてはならないのです」

熱くなってるなぁ。

僕としては程々にしてほしいんだけど……。

「さぁ、行きますよ！　はぁぁぁぁぁ！」

「えっ！？　ちょっ！？　移り変わり早！　仕方ない、トラップカード発動！」

小竜姫様のテンションに突いていけなかった僕は、なんの工夫もなく突撃してくる小竜姫様に対して、事前に準備していたトラップカードを発動させるしかなかった。

「ひゃっ！　キャアアアアアア！」

「……落とし穴、ですか」

「いや、本当は鬼門でも埋めてみようかと思ったんだけど……」

ハルピュイアと穴を覗き込む。

見えないなぁ。鬼門用だから深く掘りすぎたな。

「コホン！　まあ、とりあえず、マスターの勝ちぃ」

「待って下さい！　異議あり！　です！」

「おわぁ！　お化け！」

「誰がお化けですか！」

穴から飛び出してきた小竜姫様は、不満ありありな様子だった。

「……面倒くさい。埋めればよかったか？」

「マスター、声に出てますよ」

小竜姫様はこれでなかなか負けず嫌いだ。

だから、試合で勝った後のこの説得にも骨が折れる。

「何が不満なんですか？」

「何って、こんな、落とし穴なんて卑怯です！」

「ふむ、じゃあ、小竜姫様は魔族や害悪となる敵が、正々堂々と正面から向かってくるとお思いですか？」

「いや、それは……」

「そうでしょう。小竜姫様はそのような卑怯な手段への免疫が無さ過ぎます。

格下ならば、その類い希なる剣技で相手を成敗出来るでしょう。

しかし、今みたいな技術が均衡、もしくは劣勢の場合は？　容易く不意を突かれるでしょうね」

「……」

「僕の勝ちです。いいですね」

「……はい。私、一寸休みますね」

とぼとぼと自室に歩いていく小竜姫様。

お昼を奮発しよう。そう思いながら、最早日常となった朝稽古を終える僕等だった。

初日に小竜姫様をのしてから、毎朝小竜姫様の手合わせにつきあわされている。

余程悔しかったんだろう。

常に神剣装備で、闘気全開で切りかかってくる為つい毎回打ち倒してしまう。

その後、落ち込んで昼まで姿を見せない小竜姫様を、食べ物の匂いで誘い出すのだ。

「まるで天の岩戸ですね」

「……まあね」

と、言う訳で今は昼食の仕込み中。

「次はどうやって断りましょうか？」

「そうだねぇ。腹痛、頭痛に体調不良と思いつく事は全部やったしなぁ」

これは小竜姫様が毎回誘ってくる、シャドウを出す方円の修行の事だ。

これを受けると、僕が竜種である事がバレてしまうからどうしてもやる訳にはいかないのだ。

「何かイベントでも起こりませんかねぇ」

「いいねぇ、妙神山全体が巻き込まれるようなのがいいねぇ」

ん？　これって何かのフラグ？

「ーー大変だぁ！」
「小竜姫様！！」

「うわぁ、鬼門の二人が障子を破壊しながら、小竜姫様を探してキッチンに飛び込んで来たぁ」
「マスター、説明口調にも程があります」

目が泳ぎながら、ドタバタとキッチンを駆け回る鬼門達をウルサいので黙らせる。

「「……静馬よ、痛いではないか」」
「誇りが立つ。小竜姫様はお部屋にこもってるよ。騒ぐならそっちに行ってくれ」
「いや、静馬でも構わん。来てくれ、緊急事態なのだ！」

僕の腕を左右から掴む鬼門達。

「一寸、何この宇宙人連行のポーズ」
「では、私は小竜姫さんを呼んできますね」
「ハルピュイア殿、頼みます」

それにしても鬼門がここまで慌てるなんて、何があったんだろうか。

道場破り？　魔族でもきた？

そして、鬼門（顔）に移動した前にいたのは、籠に入れられた赤ん坊の姿だった。

「静馬、我等はどうすればいい？」
「動転しすぎ。まずは小竜姫様の指示を仰ぐべきだろうね。まあ、ハルピュイアが小竜姫様を呼びに行ってるからそれまで……って、話は最後まで聞こうよ」

鬼門は僕の言葉を最後まで聞かずに二人揃っていなくなる。

困ったからって……門番しろよ。

「でも、鬼門が全く気付かなかった所を見ると、何処かから転移して来たんじゃないかと思うけど……」

眠り続ける赤子を見る。
抱き上げてみる。

泣き声一つあげずに眠り続ける。

「この子、この後はここ（妙神山）で暮らす事になるのかな？　いや、ヒャクメに時空間の測定をさせるか？」

原作内の妙神山修行場にその子はいなかった……映らなかったけど。

それにしても可愛いなぁ。

ドスンドスンと足音が近づいてくる。

鬼門とハルピュイアが小竜姫様を連れてきたか。
「かごの中に……ん？　底に何かあるな」
両手で赤子を抱き上げている為、手に取る事が出来ない。
僕の直感が騒ぐ。僕は必ずあれを手にしないといけない気がする。
「マスター、その子が鬼門さんが騒いでいた子供ですか？」
「静馬！　不用意に触ると爆発するかもしれんぞ！」
「しないよ……馬鹿か？　ハルピュイア、丁度いい所に来た。この子一寸抱いててくれる？」
僕はハルピュイアに抱いていた赤子を手渡す。
「あら、可愛い！　私にも抱かせて下さい」
「小竜姫様、その赤子……爆発しますよ」
ハルピュイアに手渡した赤子に、遅れてきた小竜姫様も虜になる。
「静馬よ、何をしているのだ？」
「ん。一寸気になる事があってね」
鬼門（どっちの鬼門かはわからないけど）が、ゆりかごに手を出す僕に声をかける。
そして僕が手にしたのは、赤く汚れた布だった。

「布？　随分汚れてるけど……」
「まるでバンダナですね」

バンダナ？　赤い……妙神山に現れた赤子……？

「男の子ですね。本当に可愛いですね。捨て子ならここ（妙神山）で育てましょうか？」
「小竜姫さんよくわかりますね。私には性別なんてわかりませんでした」

男？　バンダナをつけた……この世界で僕に干渉しうる……まさか！　横島忠夫か！

「マスター！　体が！」
「ー！　篠宮さん！！」

「なんだ！？　これは……体が、消える！？」

手にしたバンダナを中心に、原子分解を起こしたかのように粒子になる僕の体。

これは止める術が思いつかない。加速度的に進む崩壊に抑える手段は思いつかない。

きっかけはこの子、恐らくは横島忠夫のバンダナなんだろうが……でも、なんでこの時代に赤子の横島忠夫がいるんだ？

１０年前の世界に来た筈だから、横島忠夫は６～７歳の筈。
歴史が変わった？

何故？　いや、歴史は正常に流れている。
なら原因は僕だ。
何処が悪かった？　ハーピーを召喚獣とした事か？　シロと横島忠夫の接点を断った事か？　小竜姫様をへこませた事か？
わからない。考えれば考える程に全てが悪かったような気がしてくる。
わかるのは最早手のうちようが無い事だけ。
「くっ！！　ハルピュイア、後は任せた！」
そして僕はこの世界から消えた。

第三章、世界は僕に牙をむく（そのに）

その場所は妙神山。

そこには僕、静馬篠宮、それに僕の召喚獣、つむじ風の精霊ハルピュイア。妙神山修行場の管理人、竜神小竜姫、その門番鬼門。

そしてその場所には、先日妙神山修行場の門に捨てられた一人の赤子がいた。

「マスター、忠夫さんが泣いてます！」
「お腹空いたのか！　トイレか！　お風呂か！　わからーん！」
「わ、私はお乳は出ませんよ！　や、止めてください……ふわぁ……篠宮さん、助けてくださーい。ふえーん」
「神族が赤子の世話で泣くな！　鬼門！　忠夫ちゃんが泣くから部屋に来るなって言っただろう！　え？　修行者？　追い返せ！　小竜姫様がこんな状態で修行なんて出来るか！」
「しかし、小竜姫様の修行を希望する人間達だぞ」
「だからよく見ろ！　こんな小竜姫様を人前にだせるか！」
「ふえーん、止めてくださーい」
「……わかった。右の、行こう」
「……ああ……お痛ましや」

号泣の小竜姫様、基本僕に丸投げのハルピュイア、いるだけで泣かれる鬼門、姿を表さない猿。

そして、育児の経験もないのに、人間だからと言う理由で統括させられる僕。

小竜姫様に抱きつきながら泣きわめいている赤子、横島忠夫を見ながら、平穏を感じながらもため息が止まらなかった。

これは僕があの後に起こると思った理想の世界。

しかし、僕は消え、既に起こり得ないものとなっている。

「これは虚像だ……貴方は僕に何を見せようとしてる？」

僅かに感じる何者かの気配に対して問いかける。

場面は暗転する。

崩壊した妙神山。

傷だらけで倒れた小竜姫様を抱き上げる僕。

「小竜姫様！　しっかりして下さい！　小竜姫様！」

「し、篠宮さん……皆さんは……」

自らの体ではなく、奥の異空間に避難した仲間達の安否を気にする小竜姫様。

「皆、無事です。小竜姫様が時間を稼いでくれたお陰です」
「そうですか……それは良かったです。篠宮さんが来たんです。後は貴方に任せさせてもらってもいいですか？」
力無く笑いながら、私も力になれた。と呟く小竜姫様。
様々な妨害にあい、妙神山に来るのが遅れた事を後悔しながらただ是、と答える。
「じゃあ、安心ですね。私は少しだけ眠りますね……あ……とは……お願……い、します……」
掴んだ手から力が抜ける。そして、小竜姫様は静かに目を閉じる。
「待っていて下さいね。僕は貴女と同じ場所には行けないけれど、貴女に仇なす全ての愚者は僕が深い闇の底に叩き落としてみせますから」
静かに小竜姫様を寝かせると、僕は吉備津刀とカリバーンを手にすると魔族の大群に突撃した。

なんだ、これは……。
更に舞台は暗転する。
蠅の王、ベルゼブブ。

その大量の群体に僕はかかりきりで、フェンリルとなった犬飼を止める事は出来ない。

「皆、逃げるんだ！　儀式も失敗した君達に扱える相手じゃない！」
「俺達が逃げて、そしたら町の人達はどうなる？」
「……死ぬでしょうね」

僕の言葉を受けて、口に出した横島の言葉に美神令子が答える。

「こええけど、そんな状況で引ける訳ないだろう！」
「格好良すぎる！　何か変な物でも食べたのでは？」
「しかし、横島の言う通りじゃ！　今以上に理想的な人員を集めるのは不可能、やるしかないじゃろう！」

横島の言葉に驚くおキヌちゃんに、同意するカオス。

「……しかし！！」
「静馬君……私達にだって一流のプライドがある。横島君の言う通りにするのは癪だけど、ここは私達がやらなくちゃいけないでしょう」

気合いを入れる美神令子。

一致団結してフェンリルに挑む横島達一行。

結果は……駄目だった。

可能な限り早くベルゼブブを殲滅した僕が見た物は、魂までも引き裂かれて息のない仲間達の姿だった。

場面はいくつも変わる。

成功してしまったおキヌちゃんの横島殺害。

アシュタロスに力及ばす敗れる神・人の混成部隊。

ＧＳ試験の際に資格も取れずに敗北し、ＧＳになる事なくアシュタロス戦役に突入する横島忠夫。

どの未来も、決して横島忠夫は救われない。

ほんの少し、歴史の枝葉が変わっただけで、その未来は絶望に彩られたものとなる。

そして、その変わった未来は……。

「僕がその場にいた……それがこの結果か」

「そうだ。お前が干渉した未来は、その全てが今見たような世界を破壊する要因となる」

先程から感じていた気配が濃厚になる。

「……魔人皇ヨコシマ、ですね」

「そうだ。俺は横島であり横島ではない。全ての存在の先にあるもの」

御大自らお出ましとは……本格的に僕をこの世界から消すつもりか。

「それで、害悪となる存在である僕を貴方はどうするつもりか？」
「そこに言葉が必要か？　俺は横島忠夫と言う存在が、俺へと至らないようにする為、その要因を全て排除するだけだ」

闇が形を取り始める。
そして、額には赤いバンダナをつけた黒い外套につつまれた青年の姿があった。

僕では相手にならないだろう。
それに、これだけの結果を見せられては、自らの存在意義すら疑問に思ってしまう。

「俺が見た未来は全て絶望に彩られていたが、これからは違うかもしれん。
ひょっとしたら、たった一つの真理に辿りつけるかもしれん。
この絶妙なバランスで成り立っている、終わりかけた世界で力を示せば、お前と言う存在が世界に認められるかもしれん。
全ては俺の主観からお前を消そうとしているだけだ。
異界からの戦士よ。剣を取れ。ただ死ねとは言わん。最後まで抵抗してみせろ」

ヨコシマの言葉は全てその通りだ。
しかし、見た感じ世界に、神々に愛されたヨコシマという存在がいるの以上、僕と言う存在は必要無いんじゃないかと思う。

「でも、まあ、ここで終わるのは、神の戦士として一寸癪だよね。

この空間って、召喚術は使えるのかな？」
「勿論だ。ここは俺が作り出した無の空間だ。俺もお前も、１００％力を振るえる」
それは好都合。どうやら彼は、本当に僕に力を示させようとしているみたいだ。
契約の楔は、時空間の流れで切れたりしない。
ハルピュイアとカラスの召喚獣、クロウ。狼の召喚獣、ミリアを召喚する。
「マスター！　一体何が！？　と、これは……？」
喚ばれてすぐ、僕に突っかかってきたハルピュイアも、すぐに周囲の状況を確認し始める。
「召喚獣、行使、同期」
全ての召喚獣に僕の記憶を流す。
「これは……やるしかないでしょう。ねえ、先輩方？」
クロウとミリアに同意を求めるハルピュイア。
言葉にはせずに同意を示す二匹。
クロウとミリアは生前行使していた召喚獣。
創造神ブラフマー様との契約の際に、世界と一緒に切り離されてしまった。

だから、今、僕が呼び出せるのは、彼等の影のようなものだ。
その事が時々寂しいと思う事があるけど、自分が選んだ事。
後悔はしない。
「まあ、勝てないだろうけど、せめて一矢報いようと思ってね」
「わかりました。マスター、指示を……」
Ｆａｔｅのアーチャーの着用していたマント、赤原外套を投影する。
「作戦は一つ。全力全開！　全ての力を解放する！　持てる力を全て駆使して眼前の敵を殲滅せよ！」
僕もその手に愛刀、吉備津刀、カリバーンを呼び出す。
「準備出来たか？　最高神の認めるその力、見せてもらおうか？」
「後悔するよ？　僕は亡霊の旅人、神の戦士……さあ行くよ、世界に愛された人を越えて、神を越えし者よ。文殊のストックは充分か？」
僕は手にした吉備津刀を、魔人皇ヨコシマに向けた。
「ミリア、行使、早駈！　クロウ、行使、雷撃！」
召喚獣に指示を出して、僕は幻想で出来た王の財宝を解放する。

「発動、王の財宝（ゲートオブファンタズム）！」

僕の宝庫には、突き刺されたランクの高い武器がない。

ダークが主だった獲物だ。だけどそれでも、中級神魔に傷を与える事が出来る位の神聖はある。

多少の足止め位は出来るだろう。

「行きますよ……フェザーブレッド！」

僕のダークに紛れて、ハルピュイアのフェザーブレッドが的確にヨコシマに迫る。

「ふむ。様子見にしてもランクが低すぎるな。期待していたのだが……この程度か」

クロウの雷撃やダーク、フェザーブレッドを受けても顔色一つ変えない。

ヨコシマが一払いするだけで、それは衝撃波になり彼に迫る全ての事象はかき消された。

「なんて事……微々たるダメージすら、受けていないと言うのでしょうか？」

「いや、ダメージは通っているだろうね。ただ、低すぎるんだろう」

蚊に刺されても、刺されてすぐは人にはわからない。そんな感じか？

でも、蚊だって後から痒みを感じさせたりする。

微々たる物であっても、無駄じゃない！

「クロウ、行使。電磁砲！　ミリア、行使。無駄なしの銃（フェイルノート）！」

クロウはエネルギーを溜め、口唇から圧縮された電流を放つ。

ミリアはその姿を変え、一丁の短銃となる。刀を消し、僕の手に宿る。

「発動、装填、真・超電磁砲（ハイレールガン）」

風と稲妻の宿った弾丸。絶え間なくダークを降らせながら狙いを付ける。

「ほう……召喚獣を宝具とするか。なかなか面白いな。宝具級の威力を持つ召喚獣も大したものだが、この馬鹿の一つ覚えのような剣だけは無駄だな」

「そうでもないよ。ダークだって無駄じゃない……発動、壊れた破壊（ブロークンファンタズム）！」

降り注ぐ全てのダークが、質量を持って爆発を起こす。

そして、その隙を逃さず、僕は無駄なしの銃の引き金を引く。

「発動、無駄なしの銃（フェイルノート）」

超電磁砲に渦巻く風の力をブレンドして、数倍の威力を持つ真・超電磁砲。

確かに直撃を確認した。
「追随します。フェザーブレッド！」
ハルピュイアが先程とは違い、複数のフェザーブレッドを放つ。
様々な方向へ放たれたフェザーブレッドは、空中で方向を変えると全てがヨコシマに直撃する。
「ーーどうですか！？」
「……駄目か」
真・超電磁砲から巻き起こったエネルギーの余波が消えると、全くその場から動いていないヨコシマの姿がそこにあった。
「大したものだよ、全く。これだけの力があるならば、人界で力を抑えられたアシュタロスならば、倒せるかもしれないな」
「その遙か上に自らがいる……と」
「無論。俺は全ての存在の頂点に立つものだ」
ヨコシマが、その手をこちらに向ける。
「くっ！？　全員、全力で回避！」
皆に指示を出し、僕は全力で横っ飛び。
目視出来ない速度で、何かが今まで自分のいた場所を襲った。
「ハルピュイア、見えたか？」

「魔力弾なのはわかりましたが……早すぎます」
「どうした？　この程度も対処出来ないのか？」
次々放たれる魔力弾。
直感と、向けられた手の位置だけで回避する為、とても反撃にうつる暇がない。
「クロウ！　くっ！　駄目か……はっ！　避けきれない……発動、竜炉心（ドラゴンハート）、竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）！」
撃ち抜かれて消失したクロウに気にとられ、回避が遅れた僕は竜の因子である竜炉心から、風の守りを発動させる。
「ぐぁ！　貫通だって……そんな、僕の竜の羽ばたきが」
張られた風の守り等全くないかのように、ヨコシマの魔力弾はその守りを突き破り、僕の右腕を吹き飛ばした。
「マスター！？」
「大丈夫！　あの魔力弾を止めなきゃ……発動、約束された勝利の剣（吉備津天地刀）！！」
痛みに耐えながら、左手のみで吉備津刀の真名を解放する。
ヨコシマに光が降り注ぎ、一時的にその魔力弾の連射が止まる。
「傷の手当てを……」
「ハルピュイア、落ち着いて。そんな時間はないよ。それよりも、手を貸して。あれをやるよ」

それだけで、ハルピュイアにもわかっただろう。
「しかし、それではマスターが……」
何か言い掛けたみたいだが、言葉を収める。

「わかりました。マスター、次の指示を」
「召喚、クロウ、ミリア。二人共、少しの間時間を稼いでくれ」
召喚獣は死なない。やられても、エネルギー体なのでマスターの中に戻るだけだ。

そして、魔力さえあれば何度でも再召喚可能なのだ。
「ハルピュイアは、僕と一緒に宝具発動に力を貸してもらう」
「わかりました。我が儘なマスターを持つと、私達も大変です」
ハルピュイアの嫌みに、苦笑しながら再度ヨコシマと相対する。
「神の戦士よ、もういいのか？」
「ああ、今から僕に出来る限りの最奥を見せてあげるよ」
「今までも、充分上級神魔を滅せるだけの力はある。楽しみだ」
幾度やられても、何度となく召喚され猛攻をしかけるクロウとミリア。
それを見ながら、僕は世界に働きかける言葉を紡ぐ。

「我は創造せん、共に有る世界を」

ヨコシマは、やはり余裕があるようで、僕の言葉を楽しそうに聞いている。

「繋がらん、夢想せし心象の奇跡を」

今までが全く通用しなかったのだ。これでもやはり不安はある。

「失われし数ある絶望、力無き忘却の記憶よ」

しかし、最早僕には他に打つ手はない。

「我と我等全ての根源となる無限へ。
悲しみと慈しみの共存する慈愛の歌」

ヨコシマ……横島忠夫の最後。
それは最早変える事の出来ない終着点なんだろうか？

「今救おう、我等と汝等の有らぬ悲しみを」

何かが足りない……彼等を救うには、ただ蛍の魔族ルシオラを救ったり、アシュタロス等から世界を救うだけでは駄目なんだ。

僕は間違えてしまった。
彼の周囲の環境を変える。それじゃあ駄目なんだ。

それがわかったからこそ、僕は今簡単に引く事は出来ない。だから……。

「世界は、僕と、僕等全てが等しく有る為に……力無き弱者の歌！！」

瞬間、世界は姿を変える。

それは、僕の中にある失われた懐かしい風の吹く草原に。

「俺の世界を打ち消す……いや、塗り替えたのか。魔術だったか……人間……元人間にそんな事が出来るとはな」

「ハルピュイア、いいかい？」

敢えてヨコシマを見ない。

そのあり方を知ってしまえばきっと、彼に剣を向ける事は出来ないから。

「ーーはい、いつでも」

ハルピュイアが周囲の風を集め、僕の持つ吉備津刀とカリバーンに注ぎ込む。

片手なので、指の間に挟むように二本の刀を手にする。

その全ての力を混じり合わせ、解放された世界にすら力を干渉する。

「ふむ、凄まじい力だ。彼の槍にすら迫るランクの力だ」

「余裕……か。しかし、持てる力の全て、受け取ってもらうよ……発動、竜の殺息（ドラゴンブレス）！」

僕は、光の奔流に呑まれそうになりながらも、その溢れる力をヨコシマに撃ち込んだ。

消える僕の固有結界「力無き弱者の歌」。

流石に魔力不足で座り込む僕。

しかし、これだけでは足りない。

そう感じる。

ヨコシマの周囲で純白の羽が舞う。

「やはりレジストしてるか……ハルピュイア、僕をヨコシマの所へ」

「マスター！？　無茶です！！」

聞く耳持たずに、僕は気術と魔力を合わせ黒く輝く大剣を造りだす。

「マスター……はぁ、私は三国一のマスター孝行の守護者ですよ。騒ぎなさい、そよ風よ」

僕の体は風によって浮かび上がり、ヨコシマ目掛けて吹き飛ばされる。

「魔人皇ヨコシマ！　これが僕の１００％中の１００％だぁ！　発動、天術、柔剛相交！」（ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン）

更に干渉する純白の羽を掻き消すヨコシマに、神をも滅する討神の刀「早風」で斬りつけた。

「これ以上は無理だ！　クロウ、ミリア、お疲れ様。痛かっただろう」
「……どうでしょうか？　魔人皇は……」
「いやいや、本気で大したものだ。まさかここまでやるとは……」

声と共に光が僕を貫いた。

「がはっ！　ヨコシマ……」
「マスター！？」
「まさか、文殊を消費するとは思わなかったぞ。
経験と修行を積めば、最高指導者に迫るかもしれないな。
だからこそ残念だ。ここで、こんな手段をとらなければならない事が」

やはり駄目か。彼の考えも、世界にも選ばれる事はなかったようだ。

出来るだけの事はやった。それでも無理なら仕方ない。

彼はこうやって、世界に干渉を続ける全てと戦いながら、絶望を感じていくのだろう。

僕は、魔人皇ヨコシマを見ながら彼に憐れみを感じてならなかっ

た。

そして、僕はこの空間からもその姿を消した。

第四章、お帰りなさい。そして、いってらっしゃい（前書き）

これからまた忙しくなるのは確定的なのですが、不定期でも再開しようと思います。

待っていてくれた方がもしいたら感謝感激、恐悦至極に御座います。

一寸だけ女神転生系・ＦＦ１１系のネタ（技やモンスター）が入って行きますので、それでもいいよ。という心の広い方、どうぞごゆるりとお楽しみ下さい。

第四章、お帰りなさい。そして、いってらっしゃい

「おお、シズマ君。死んでしまうとは情けない」

顔に何かかけられている。

今の声からすると、我が主であり、有り得ないくらい我が儘な幼女である創造神ブラフマー様みたいだ。

きっと白い布だろうな。頭に三角の布もつけられてるかもな。

「む、誰があやしいおんなと書いて妖女だって？　そんな事いっちゃう悪い子にはこうだよ！　これはメラゾーマじゃない……」

妖女じゃないし！　ホワイトロリータ的な幼女だし！

しかも、その言葉から続くのは……！？

「ちょ！　一寸ま……！」

「メラだ！　って、動いちゃ駄目だよ！」

回避行動を取ろうとした僕が目にしたのは、一寸した隕石よりもデカい炎の塊が迫る所だった。

「ぐあああああああ！！」

「ああーーシズマ君ごめーん！」

こうして僕の冒険は終わった。

「うう……シズマくーん……足が痺れたよう」
「駄目です！　偶には反省して下さい！　いつもいつも漫画のネタばかりやってばかりで……僕がどれだけ苦労してるか」

いつもの事なんだけど、ブラフマーに反省を促しながら現状把握につとめる。

確か、妙神山で赤子の姿の横島忠夫に出会った事で、魔人皇ヨコシマと相対した。

そして、力及ばず世界から消えたんだ。

今回は失敗か……残念だな。

世界との取り決めで、失敗した世界に戻る事は出来ないし、得た技術を返す事も出来ない。

僕が不甲斐ないばかりに、ハルピュイアをＧＳ美神の世界から切り離してしまった。

はぁ、なんて言って謝ろう……。

「シズマくーん。もう勘弁してよぉ。悪気はなかったんだよー」
「……もういいですよ。ブラフマー様、ただいま帰りました。まず何をすれば？」

正座を崩して痺れた足を押さえていたブラフマー様が、僕の言葉にぐるん！　と顔を向けてくる。

「お土産！　土産話だよシズマ君！！　早く、さあ早く聞かせて、今すぐ、それすぐ、速攻で！」

「……ブラフマー様、テンション高すぎでしょう」

元気になったブラフマー様が、僕の経験を閲覧する。

さて、なんて言われるやら……。

「……シズマ君。契約したハーピーちゃんは喚べる？」

「え……はい、大丈夫だと思いますが……行使！　召喚、ハルピュイア！」

無の空間に風が収束して、今一番会いたくなかった存在、旋風の精霊ハルピュイアが召喚される。

「ここは……マスター！？　ご無事ですか！　お怪我は！　っと……ここ……は……確かマスターの記憶だと、マスターの主様のブラフマー様の世界ですね。ならば、やはりマスターは死んでしまったのですね……」

僕の姿を見つけて、掴みかからんばかりに迫ってきたハルピュイア。

そして僕が外傷ないのがわかると、周囲を見回して状況を把握したように落ち込みを見せる。

「ごめん、ハルピュイア。僕に力が足りなかったばかりに、君を神界だけでなく、世界からも隔てさせてしまった」

「……マスター」

「僕は間違えてしまった。世界の鍵である横島忠夫を守らんばかりに、彼本人に対する配慮を忘れていた。結果、僕がいる。という事象自体が世界を滅ぼす原因となってしまったんだ」

今更わかっても既に手遅れなんだけどね。

帰る場所も既にない。僕の召喚獣として存在が確定してしまった今、僕はハルピュイアに謝る事しか出来ない。

「マスター、何か勘違いしてませんか？」

「ハルピュイア？」

「始まりこそは違えど、私はマスター、シズマ＝ラインズという存在と、共に在りたいと感じたからこそ主従契約を結んだのです。マスターは一時的に動く駒として私を使うつもりだったのですか？」

なっ！？　そんな馬鹿な！！　僕はハーピーをハルピュイアに戻して神界に返してあげようとは思ったけど、決して半端な気持ちじゃない！

「まあ、そうじゃない事はわかってますが……だからこそ、そんな事で謝らないで下さい。私はいつまでもマスターと共にあるつもりです」

「ハルピュイア……有難う。これからも宜しく」

「はい！　勿論です！」

よかった。ハルピュイアは僕を受け入れてくれた。それだけが気がかりだった。

「良かったね、シズマ君。羨ましい位の仲の良さだね」
「はい。無念さはありますが、これで一応の心残りは有りません」
「マスター、この方が？」

僕の記憶があるから、あくまでも確認だろうけど。

そう言えば自己紹介してなかったな。

ブラフマー様も知ってるだろうけど、双方に相手を紹介する。

「ブラフマー様ですか。私のような若輩者、お目通し叶っただけでも光栄です」
「気にしなくていいよ。シズマ君の家族なら、私の家族だからね」

なんか二人とも仲良いな。

女性同士？　だから何か感じ合うものがあるのかな？

「さて、シズマ君。私は今とても機嫌が悪いの」
「いや、とてもそうには見えませんが……」
「ブラフマー様、お紅茶のおかわりは如何ですか？」
「あ、飲む飲むー。戸棚に入ってる栗どらも出してー」

唐突に不機嫌と言うブラフマー様。

しかし、給仕さんよろしく紅茶を振る舞うハルピュイアに、即座に上機嫌になる。

「もぐもぐ……ぷはぁ！　でね、私は今回あの世界の神々の打診を受けて、シズマ君を送り出したんだ。それなのにあの新米破壊神は……これじゃあ、私の沽券にかかわるんだよ！」

神様には神様のルールがあるんだなぁ。

「と、いう訳でシズマ君には、私の力の一部を継承してもらうよ」

……はい？

「なにを……」

「魔人皇ヨコシマに勝たないと、あの世界には行けないからね。今のシズマ君なら多分受けられると思うから、頑張ってね」

「一寸！　待っ――がぁぁぁぁぁぁあ！！」

言った瞬間、体中にブラフマー様の力が流れ込む。

「マスター！　ブラフマー様、流石にマスターにはまだ無茶なのでは！？」

「あれ？　シズマ君頑張って。消えちゃうよー」

二人の声も聞こえない位にのたうち回る僕は、そのまま意識を失った。

「うう……シズマくーん……足が痺れたよう」

「駄目です！　直前に言ったばかりじゃないですか！　全くもう……反省して下さい！　いつもいつもいつも無茶ばかりやって……僕がどれだけ苦労してるか」
無事ブラフマー様の力の一部を得たらしい僕は、消滅の危機を乗り越えてまたブラフマー様に正座の刑を与えている。

「いつも、が先程より一回増えましたね」
「それにしても、僕はどうなったんだろう？」

ブラフマー様の力って何なんだろう？

何であっても、僕なんかが扱いきれるとは思えないんだけど……。

「じゃあ試してみようよ！　それ！　いでよ、みどりさん！」
「わっ！　急に立たないで下さいブラフマー様」
「いや、ハルピュイア。突っ込む所はそこじゃない！　自分で与えた能力わかってなかったんかい！　そもそもみどりさんって……ドラゴンじゃないか！」

立ち上がったブラフマー様が指を鳴らすと、そこには巨大な深緑色の竜がそこにいた。

その威圧感は、以前別の世界で相対した竜の比ではない。

「イヤイヤ、チャントワカッテルヨ……多分。
さて、とりあえずこのドラゴンを私が与えた力だけで倒してもらおうかな」

一寸、ハルピュイアと密談。

「この竜は、以前の奴とどの位違うと思う？」
「私の感が確かなら、１０倍以上は離れてますね。分かり易く言うと、マスターレベル９９。敵ドラゴンレベル９９９と言った感じですね」

違いすぎない？　これが若さ……じゃない、人と幻想種の違いか。

「無茶じゃないかなぁ？」
「いえ……私の考えが正しければ、恐らくは……」

何か気付いたのか？　僕は体感で特に変わりないけど……。

「もういいかな？　じゃあ、説明するね。シズマ君にはエインヘリアルの力を与えたんだ。簡単に言うと、凄く強い召喚術……かな」

召喚術？　エインヘリアル……神の戦士が？

促されるままにクロウを召喚する。

「じゃあ、言葉でエインヘリアルを与えてみて」
「エインヘリアルを与える？　クロウに伝えればいいんですか？　クロウ……お前をエインヘリアルとする……」

突如、黄金色に輝くクロウ。
オーラに包まれると言うか……それだけで何十、何百……いや、何千倍とも思える位に力を増している。

「うん。上手く継承されたね。じゃあ、後はいつも通り指示を出しながら、その子を倒してみて」

「これはまたいまだかつてないチートだね」

とりあえずクロウに指示を出して、ドラゴンへと向かわせた。

「うんうん、期待通りだね」
「そんな……馬鹿な」
「いやいや、凄まじいですね」

今、僕の目には傷だらけで倒れ伏すドラゴンと、無傷で飛び回るクロウが映っている。

「ハルピュイア、クロウの力どの位になってるの？」
「ええと、平時がレベル４５ですね。エインヘリアル効果時はレベル４５００です」
「なんだ、そんなものなんだ。まあ、シズマ君も慣れてないから仕方ないよね」

＋１０００倍でも駄目なんだ。
まあ神様の力なんだから上限があるだけ、未熟なんだろうなぁ。

「この世界だから１０００倍位なんだろうね。外の世界じゃあ、シズマ君の熟練にもよるけど2倍～１０倍位が限度かな？」

「後、その影響なんでしょうが、私達召喚獣の基礎性能が上がっています。大体＋１０程度でしょうか？」

そんな神スキル……って、実際に神のスキルな訳だけど。
いいのかな？　レベル１のスライムを召喚獣にした場合でも即座にレベル１１。エインヘリアルを使用した場合は、レベル２２～１１０まで上がるって事か。

凄まじいな。

「有難う御座います、ブラフマー様。必ずや期待に応えて見せます」
「うん、頑張ってね。じゃあ、楽しい土産話を待ってるね。行ってらっしゃーい」

そして僕等はまた、あの世界に舞い戻った。

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのいち）

※スキルの威力は、魔力及び各種ステータスにより変動する為、基礎値のみ表示する事とする。

シズマ＝ラインズ
（静馬篠宮）

レベル９９

ＨＰ　７８４
ＭＰ　１２３０

力３５
魔４７
体３１
速５０
運２３

固有スキル

エインヘリアル
〔マスターが契約する全ての仲魔のレベルを熟練度×２～１０００アップさせる。及び、このスキルを持つマスターの召喚獣は常時レベルが＋１０される〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔竜族の証、竜珠。効率的に魔力及び気術を返還する。
返還効率１対１００〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔風属性。自身及び周囲の全属性ダメージを３００吸収する。
他者、範囲を拡大するとその吸収率はダウンする〕

竜の殺息
（ドラゴンブレス）
〔光属性。対象に威力３５０の後に追加１３０×１～５０の魔力ダメージを与える。
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔自身の竜の力を解放する
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ
※使用制限、対象は自身もしくは召喚獣クロウ（鴉）のみ〕

格闘術
（気孔弾、コンボ、タックル、短勁、バックハンドブロー、乱撃、スピンアタック、空鳴拳、双竜脚、夢想阿修羅拳、ファイナルヘヴン）

剣術

約束された勝利の剣
（吉備津天地刀）
〔光属性。対象に威力２００の魔力ダメージを与える〕

勝利すべき黄金の剣
（カリバーン）
〔光属性。対象に威力１５０の魔力ダメージを与える〕

魔術

召喚術

契約召喚獣
・クロウ（鴉）
・ミリア（ハウンドウルフ）
・ハルピュイア（旋風の精霊）

投影魔術

固有結界
「力無き弱者の歌」
〔現実を浸食する心象世界を具現化させる〕

空想具現化
（マーブルファンタズム）
〔自然界の物を自らの意思で変化をさせ、空想を具現化させる力〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔光属性。威力１～１２０の魔力ダメージを与える。魔力で創造した銃。スキルや魔術を込める事が可能。※使用制限、召喚獣ミリア媒体時のみ使用可能〕

王の財宝
（ゲートオブファンタズム）
〔異空間から自らの所有する（投影可能な）道具を出現させる〕

壊れた幻想
（ブロークンファンタズム）
〔投影した武具を爆発させる。威力（武具の神格×）５の魔力ダメージを与える〕

気術

天術
〔気術と魔術を融合させた無の力。　全ての天術は、シズマ＝ラインズが使用した場合に限り威力が＋３０される〕

柔剛相交
（　ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン　）
〔無属性。天術。威力４００の無属性ダメージを与える。このスキルは対象の如何なる防御スキルを無効化する。
※使用制限、早風、創造時のみ〕

早風

〔無属性。天術。天術により創り出した無の刀。　威力２の無属性ダメージを与える〕

超電磁砲
（レールガン）
〔電撃属性。威力８０の念動ダメージを与える〕

真・超電磁砲
（ハイレールガン）
〔電撃属性。威力１２０の念動ダメージを与える〕

影分身の術
〔疾風属性。自身及び自身の所有する武具を複数複製する。
※分身体の耐久度は１、威力は３０％となる〕

召喚獣

クロウ
（鴉）

レベル４５

ＨＰ１２２
ＭＰ３５

力１２
魔１１
体８

速３５
運３

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

電磁砲
〔電撃属性。威力１５の念動ダメージを与える〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔上記同様〕

ミリア
（ハウンドウルフ）

レベル１３

ＨＰ８３
ＭＰ４４

力７
魔１２
体９

速１３
運１０

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

体当たり
〔無属性。威力７の物理ダメージを込与える〕

ブフ
〔氷結属性。威力５の魔力ダメージ＋一定確率で氷結効果を与える〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔上記同様〕

ハルピュイア
（旋風の精霊）

レベル２７
ＨＰ１７１
ＭＰ１２０

力９
魔２１

体８
速２９
運１５

固有スキル

フェザーブレッド
〔疾風属性。威力３５のダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

ガル
〔疾風属性。威力５の魔力ダメージを与える〕

マハガル
〔疾風属性。　範囲に威力５のダメージを与える〕

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのいち）（前書き）

※変更・追加したステータスは、各章終了後に別個章を設けて記載します。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのいち）

ひらひらと落ちる細長くて赤い布。

それは僕の手から落ちたもの。

「はっ！　ここは……」

「マスター、この場所。それにそのバンダナは……」

声を受けて周囲を見回してみる。

見慣れた和風の建物。これは妙神山の玄関部分だな。

周りには僕の召喚獣のハルピュイアに鬼門の二人。

それに僕の師匠となっている妙神山管理人、小竜姫様。

「篠宮さんにハルピュイアさん。急にどうしたんですか？　それにこの赤い布は？」

「バンダナ……だけ？　横島忠夫は？」

「恐らく歴史が変わったのでしょうね」

話を聞くと、不意に僕等が玄関に走り出し、自分達が来たときには既にバンダナを持っていたらしい。

「全く変な篠宮さんですね」

「我らを呼び出して、そんな何でもない布を見せつけたかったのか。右の、仕事に戻るぞ」

「応！」

何も無かったかのように、持ち場に戻る鬼門。
「大丈夫ですか？　どこか調子悪いのでは……」
「いえ、大丈夫です……失礼しました。ハルピュイア、戻ろう」

そしてバンダナを手に部屋に戻った僕等は、その後何日も何事もなく過ごした。

ある日の夜更けの事……。
「やはり行かれるのですか？」
「……やはりわかってましたか」

ハルピュイアは僕の中に戻してある。

長い廊下を振り返ると、そこには小竜姫様がいた。
「雰囲気が違いましたから……あの、篠宮さんが赤い布を見つけた日から」

お見通しか。僕は横島忠夫の所に行かなければいけない。

「止めますか？　僕を」
「まさか。修行者が自らの意思で山を降りたいと言うのを止める資格はありません」

目には闘気が宿ってる。これはやはり……。

「……ただし、最後に私の修行を受けてもらいます」

「あの魔法陣を使った修行ですね？」

「ええ、篠宮さんには何か感じるものがあります。

非常に残念ですが、篠宮さんは人間界の私より強いです。しかし、この妙神山ならばまだまだ私に一日の長があります」

あの最難関の修行かぁ。

あれをやると僕が竜族なのがバレちゃうんだよなぁ。

「ダメ……でしょうか？」

そんな半泣きで上目使いで言われると……。

「いえ、いいですよ。やりましょう」

最後……でも無いだろうけど、受けた恩に報いる為その修行を受ける事にした。

「やっぱり見つかっちゃいましたか」

「わかってたんだ？」

「マスターは鈍感ですから……」

また変な事を。鈍感は関係ないんじゃないの？

場所は異空間の修行場。

専用の服に着替えた僕は、呼び出したハルピュイアと準備といって離れた小竜姫様を待っていた。

「やっぱり夜でも異空間は変わらないんだ」
「それはそうでしょうね。時間も空間も関係ないんですから」
「お待たせしました。じゃあ、篠宮さん。そこの陣を踏んで下さい」

さて、吉と出るか凶と出るか。

恐る恐る魔法陣の上に立つ。

これは影法師を作り出す魔法陣。
竜族の僕が踏むと……。

「……変わらない、か」
「そうですね……嬉しい誤算です」
「もっと凄いものがでると思ったのに……」

竜になると思ったのに、変わらなかったな。
円の中にあらわれたのは、僕と全く同じな正にコピーといえる存在だった。

考えてみればそうか。
元々の僕は霊体みたいなものだし。

「まあ、いいか。じゃあ始めますね。いでよ！　剛練武！」

小竜姫の呼び出しに応じて、同じく円の中に出現したのは岩で出来た一つ目のゴーレムだった。

「ハルピュイア。これにはエインヘリアルの効果があると思うか？」
「恐らく、マスターの所有する全ての存在に効果があると思われます」
最後に小竜姫様が相手になるんだ。
基本は必要ないだろうけど、保険はあるに越した事はない。
剛練武はその力故に、スピードが大幅に削られているがその破壊力は侮れない。
弱点は岩に保護されてない目。しかし、その胴体はどこまで硬いんだろうか？
「試してみるか」
僕の指示を受けて影法師が動く。
その拳を剛練武の胸元に叩きつける。
「痛ぅ……やはり硬いか。でも、対処出来ない程じゃないな」
僅かに拳力で後退した剛練武。
全く無駄ではないと感じた僕は、弱点狙いではなく武で挑む事にした。
「篠宮さん……やはり非常識です」
「まあ、こんな事をするのは我がマスター位でしょうね」

二人とも呆れてるなぁ。
僕は正面から剛練武と殴り合っている。
その岩の腕は恐ろしい威力を誇るから、受け流す事がメインになるけど。
「楽しいなぁ、剛練武！　その巨大な存在、力、鉄壁を誇る体。その全てがとても楽しいなぁ！」
「ウゴアアアアアア！」
剛練武の拳と影法師の拳が正面からぶつかり合った。
「剛練武が吠えた……」
「そんな、あの忠誠心が強い剛練武が話すなんて……」
剛練武も限界みたいだな。
だんだん動きが悪くなってきた。
「剛練武。最上の力を込めてこい！」
「ウゴアアアアアア！」
両手を握り締め、頭上から振り下ろしてくる剛練武。
僕は、左手に気を込めてそれに応える。
「発動！　拳技、短勁！」
ぶつかり合った力は光となり、眩しい位に広がっていった。

「勝負あり！　勝者、静馬篠宮！」

ボロボロになり座り込んだ剛練武に話し掛ける。

「剛練武、楽しかったよ。有難う」

「ウゴウゴ！」

握手を交わす影法師と剛練武。

友情、芽生えたかな？

「マスター、まずは一勝。おめでとうございます」

「ああ、有難うハルピュイア」

僕の前に立つ小竜姫様。

忘れてたけど、勝ったら能力を貰えるんだったっけ？

忘れてたよ。

「篠宮さんにしか出来なそうな戦法ですが、お見事でした。では一個目の力ですが……」

「ウゴウゴウゴウゴ！」

「はい？　何ですか、剛練武……ええ！？　本気ですか！？　しかし、それは……」

そのやり取りを正面から見ている僕ら。
剛練武の訴えに、小竜姫様が大分困っているみたいだ。

「どうしたんだろう？」
「さあ？　剛練武さんが、友情の証に特別ボーナスでも陳情しているんでしょうか？」

ハルピュイア、天界・魔界を行き来した精霊の筈なのに考えが俗っぽいなぁ。

「……マスターの知識が、私の人界に対する全知識なんですが？」
「おっと。こりゃまた一本とられたなぁ」

なんて事をしている内に……。

「はぁ、わかりました。でも、珍しいですね。貴方がそこまで武人に惚れ込むなんて……」
「ウゴ！」
「いいですよ。その代わり、分霊だけですよ」

歩いてきた剛練武は、小竜姫様の隣に立つ。
もう歩いて大丈夫なんだろうか？

「あの、小竜姫様。剛練武はもう歩いても大丈夫なんでしょうか？
結構力一杯殴っちゃったんですけど」
「大丈夫ですよ。彼はこの妙神山で生まれました。ある程度時間が

あれば、すぐに全快します。この位ならもう平気です。ね？」
「ウゴウゴ！」
「……強くて、優しくて、紳士的。確かに剛練武が惚れ込むでしょうね。
さて篠宮さん。貴方に与える力ですが、その身に今以上の防御を、と思いましたが……止めました」

ええ！？　どういう事？

確かに失念していたけど、ボーナスなしって事？

「代わりに……剛練武の強い希望で、貴方が望むなら彼と契約する事を許可します」
「へ？　そんな！　いいんですか？　僕はこの後、人界に帰る身ですよ！」
「わかっています。なので、剛練武の分霊との契約です。それならば、人界でも支障ないでしょう」

はぁ、と一つ息を吐いて剛練武を見やる。

「申し出はとても嬉しいんだけど……僕といると後悔するよ？　ひょっとしたら君は世界から切り捨てられるかもしれない？　その時、全てを捨てて僕と共にいる覚悟はあるかい？」

なんだか試すみたいな言い方になってしまったけど、これはブラフマー様の戦士である僕には避けては通れない事。

僕と契約するというのはそういう事なんだから。

「ウゴウゴ！」

「構わない……だそうですよ。まるで川縁の土手で殴り合った後のライバルみたいですね」

またそんな事言って……。

でもそれならば……。

「わかった。喜んで君と契約させてほしい。僕の相棒になってくれるかい？」

「ウゴ！」

こうして僕は、妙神山修行場の最難関の修行（小竜姫様的に）の難関を潜り抜けた。

そして掛け替えのない戦友を得た。

後、二連戦だ。

「全く……非常識です」

「まあまあ、それが我がマスターですから」

剛練武の分霊は一つ目で岩で出来た剛練武じゃなくて、通常のゴーレムだった。

なんでも、呼び出した時にある素材から出来るゴーレムが違うらしい。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのに）（前書き）

ちなみに旋風と書いてつむじかぜと読みます。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのに）

「では次の相手です。篠宮さん、準備はいいですか？」
「ええ、問題ないです……あの、僕は召喚術は使ってもいいんですか？」

小竜姫様は魔法陣から出て僕の隣であぐらをかいて座っている剛練武と、異空間を行き来してお茶やお菓子、テーブルや座椅子を準備しているハルピュイアを見る。

「……駄目です。契約した仲魔は篠宮さんの自力ではありませんから。
仲魔の熟練も、ここ（妙神山）では承っていますが、今は内容が違います。
それでは篠宮さんの修行にはならないので……まあ、篠宮さんなら次も大丈夫ですよ。その後の相談は、その時にお受けします。
では……禍刀羅守でませい！」

次に円にあらわれた僕の相手は……まあ原作を知ってる僕には予定通りなんだが、手足が刀の蟻みたいな幻獣であった。

「グケケケー！！」

前足？　を振るって異空間にあるストーンヘンジ状の岩を切り裂く。

「フフン！」

切れ味や俺つえーをアピールしたかったんだろうけど……。

僕の記憶を得ている天界の精霊ハルピュイア、この妙神山管理人の小竜姫様、同僚の剛練武、様々な世界で非常識な力を持った存在と相対して、更には創造神ブラフマー様を主に持つ僕。

正直あの位だったら、ここにいる皆がよりハイクォリティな事をやる事が出来る。

あ、小竜姫様、頭抱えてるし。

「えっと……小竜姫様？　今回の試練に関しては、僕の為のものなんでしょうか？」

「うう……すみません。一応篠宮さんの為なんですが……お察しの通り、禍刀羅守の為でもあります。

お願い出来ないでしょうか？　彼も力はありますから……」

なんか、叱れない親が変わりに活をいれてくれって言ってるみたいだ。

「その通りじゃないんですか？」

「ハルピュイア、考えを読むな……わかりました。一寸、教育します」

「ググ！　ケケケー！！」

まあ、怒るよなぁ。修行者の指南だと思って来て、格好までつけたのに実際には自分へのバッシングだったんだから。

不意打ちとばかりに腕の刀を振るってくる。

「なっ！　禍刀羅守！」
「まあ、これも想定内だよなぁ」
「ですね」

全くもって予定通りの反応に、僕の影法師も即座に反応する。

「グギャアアア！！」
「さて、次は……と」

振り下ろされた刀を掴むと、そのまま真上に放り投げる。

そして、先程禍刀羅守に切り落とされた石柱を掴む。

「禍刀羅守！　これが切り落とされた石柱の痛みだぁ！」
「グギギャアア……！！」

落ちてきた禍刀羅守を、石柱でホームラン打者を真似て更に上空に打ち上げる。

「次はこの空間の破損を直す誰かの分！　次は優しい小竜姫様の指導をしっかり受けないせいで、小竜姫様が感じているストレスの分！　次は僕の修行なのに、何故かこんな事になっている僕の感じているストレスの分！」
「……すみません、篠宮さん」
「気にしなくていいですよ、小竜姫さん。あれは好きでやってるんですから」

うるさいやい。

「そしてこれが僕の全員分の怒りを凝縮させたコスモだぁ！！！」
幾度となく打ち上げ続け、最後に力一杯地平線まで飛んでいくように、ジャストミートさせた。
彼は、結界を突き破って異空間の彼方に飛んでいった。
「あ、まだ開始の合図出してませんでした……」
「その反応、小竜姫さんも中々いい性格してますね」
全くだ。こんなだったっけ？　小竜姫様って。

自慢の刀でバランスを取れない位にボロボロの禍刀羅守を、僕の影法師が引きずって帰ってくる。
「篠宮さん。私、試合開始の合図をしてなかったんですが、どうしましょうか？　元々は、禍刀羅守が開始前に手を出したのが原因なんですが……」
「僕はやり直しても構いませんよ。
やはり禍刀羅守もこんな決着じゃあ納得出来ないでしょうし……回復させて、本人に聞いてみましょうか」
あれで、あの傲慢でナルシストの性格が改善するとかおもえないし。

「わかりました、有難う御座います、篠宮さん。禍刀羅守、篠宮さんはこう言ってますが、どうしますか？」
「グ、ググギギギ！」
凄い勢いで首を振り続ける禍刀羅守。
やりすぎたかなぁ。
禍刀羅守は僕の前に来ると、前足を倒して平伏の姿勢を取る。
ええっと、これは……。
「どう思う？」
「マスターもわかっているんでしょう？　絶対服従の姿勢ですね」
「やっぱり。やりすぎたかぁ」
「まあ、あの恐怖は空を飛べない者には恐怖でしかないでしょうからね」
そして、僕はもう一体召喚獣が増える事になった。
禍刀羅守の分霊は、リビングソード（動く刀）の形であった事を述べておく。

「一応、妙神山で最も危険な修行なんですが、篠宮さんにはあまり効果がないみたいですね」
「まあ、我がマスターですから」
「ハルピュイアさっきからそれしか言って無くない？」

なんだかんだでいよいよ最終ラウンド。

次は小竜姫様か……結界内で神界同様の力を振るう彼女に、どう対処したものか？

既に溢れんばかりの闘気が周囲に満ちているんだけど……。

「小竜姫様、目的と手段が入れ替わる時があるからなぁ」

「……マスターもそうですがね」

それはいいの。僕は主人公なんだから。

「ん？　じゃあ、最後の修行になるんですが、宜しいですか？」

「勿論宜しいです。はい」

「日本語変ですよ、マスター」

いいの！　僕は元々日本人じゃないんだから。

見た目は日本人そのものだけど。

「では！　最後の相手は私になります」

「ですよね。で、ご相談なんですが、小竜姫様と対するのにも召喚獣と一緒では駄目なんですか？　力を全開に発揮できるこの異空間じゃあ、あまりに不利すぎるんですが……」

自身と人間である（と小竜姫様が思っている）僕との戦力差を考える小竜姫様。

「まあ、戦ううちに余りに差があるようならば、対応しますよ。それでいいですか？」

「絶対忘れる。絶対耳を傾けない」
「何ですか？」
神剣に手をかけながら聞き返される。
交渉の余地なし……か。
「わかりました……それでいいです」
「はい！　じゃあ、始めましょうか？」
小竜姫様が円の中に入る。
すると姿がノイズがかったように変貌する。
「小竜姫様、せめて真鍮の手甲を貸してもらえませんか？　流石に素手は……」
「いいでしょう。ではこれを」
空に現れた手甲を装着する。
「じゃあいいですね。もう待ちませんよ。行きますよ！　開始！」
いや、興奮しすぎだろう。
そして、今回の訪問での妙神山最後の戦いの幕が切っておろされた。
「だあ！　脚技、双竜脚！」

迫る剣戟を局所的に凝縮させた気を使い、受け流しながら反撃に移る。

「流石ですね。本気ではないですが、今の状態の私の攻撃をここまで回避するとは……」

そりゃ、こっちも命がけだしなぁ。

「おわっ！　まさか真鍮の手甲にひびが入るとは……もう保たないな……発動、短勁！」

速度、威力は平時と桁違いなので、全てを回避なんてとても出来ない。

なんとか手甲のおかげで直撃はないが、それもいつまでもつかわからない。

「甘いですよ！　ではこれならどうです！」

「なっ！　剣を！？　しまっ！　フェイントか！？」

小竜姫様はその神剣を投げてきたのだ。

意表をつかれた為、不意にかけられた足払いを受けて転倒してしまう。

「私も篠宮さんと何度も手合わせしたのです。その鉄壁ともいえる防備を崩す為の手段位考えます」

「創意工夫結構だけと、少し大人気ないんじゃあ……ぐはぁ！」

即座にマウントポジションになった小竜姫様の、公開顔面殴打ショーが始まる。

「貴方に！　わかりますか！　修行に来た人間に負けて神界で小隆起等と言われるる私の気持ちが！」
「だ！　わか！　わかったっ！　わかったから落ち着いて！」

今の状態で全て受けると、流石にブラフマー様の所へ逆戻りなので、持ち前のフットワークで顔を右左に振って回避を試みる。
「わかっていません！！　それなら責任を取ってもらえばいいじゃないかと言ってくる同僚達に私もそれもいいかもしれない等と考えていた矢先に貴方は妙神山を降りると言うし……私は一体どうすればいいんですか！？」

はぁ、なんか大変だなぁ。神界も。

独白が続き、手が止まった小竜姫様を顔だけで見上げる。

「随分過激な告白ですね、小竜姫さん。まるで傷物にされたから責任を取って嫁にしなさい。と言ってるように聞こえますよ？」
「なっ！？　ち、違います！！　ハルピュイアさん、変な事言わないで下さい！　わ、私は、ただ……その、あのですね……私は、私を苦もなく一蹴出来るような強く、優しいお方がいればいいな。とは常々思っていましたが、別に、そ、そ、それが篠宮さんの事だとは……確かに篠宮さんは強いし、私に意地悪する事もありますが、ちゃんと案じてくれます。でも、それとこれとは別問題です！！」
「よいしょ。てい！」
「え？　きゃっ！？」

なんか、ハルピュイアと話をする為に僕から離れた小竜姫様。勝負中ですよ？

隙だらけだったので、投影した紐でぐるぐる巻きにして床に転がして見る。

「よし！　僕の勝ちぃ！」
「なっ！？　卑怯です！」
「流石我がマスター。中々の鬼畜っぷりです」

どこが？　勝負の最中に隙を見せるのが悪い。

「くっ！　こんな紐！　ええい！　たぁ！　って……いない？」

ただの紐だった為、即座に引きちぎって僕に斬りかかる。

しかし、斬ったと思ったらそのまま笑顔で姿を消す僕に、違和感を感じる小竜姫様。

「……残像だ」
「しまっ！　あっ！　駄目！！」

影分身で回避した影法師は、迷う事なく背中にある逆鱗に触れた。

「さて、小竜姫様を暴れまわるドラゴンに変貌させてみたけど、どうしようか？」
「一体どのようなおつもりで？」

影法師を消して、赤い毛並みの白い竜となった小竜姫様。
原作通り、まだ上手く制御出来ないみたいで暴れまわっている。

「うん。今回の事でのせめてもの恩返しに、抑圧された感情のはけ口になろうかな、と思って」
「確かに何も考えず暴れればすっきりしますしね。マスター、意外と話聞いていたんですね？」

あんまりは……疲れてるなぁ、と思っただけなんだけどもう言える雰囲気じゃないな。

「さて、じゃあ巨大なお世話でもしますか！　発動、召喚！　クロウ、ミリア、剛練武、禍刀羅守！　行くよ皆！　準備はいいかい？」

全員を召喚して妙神山最強のドラゴン遊戯をする事にした。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのさん）

「ミリア、お前をエインヘリアルに命ずる！　行け！」

召喚したハウンドウルフが黄金色に包まれる。

「ガウア！！」

一声あげて、自身の周囲に複数の氷結の塊を作り上げる。

全ての氷結は鋭い刃（ブラ）となり、白き竜に迫る。

白き竜は回避行動すら取らない。

敵意を向けたミリアを睨みつけているままだ。

「ギャオオオオオ！」

無数のブフはそのまま白き竜に突き刺さる。

「グルル！　ガオゥ！」

そして突撃したミリアは、体格が５０倍は違うその巨体を吹き飛ばす。

「これがエインヘリアルの効果か……凄いなぁ」「そうですね。平時の二倍……と言った所ですね。どうやらスキルダメージも二倍みたいです」

成る程。レベルだけじゃなく、スキルも等倍になるのか。

全く有り得ないな。この神スキルは。

「ウォオオン！」

「深追いするな！」

「ギャオオオオオン！」

追撃態勢のミリアを、倒れたままの白き竜の稲妻が貫いた。

「く、油断したか……」

「レベルは上がっても、経験は足りませんからね」

許容不能ダメージを受けてミリアは僕の中に戻る。

起き上がった白き竜は、改めて僕等を外敵と判断したのか広域の稲妻を辺り構わず放ち始める。

「無作為投射が一番厄介だな。発動、竜炉心、竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）！」

僕は風の守りで身を守り、召喚獣達は各々回避、防御を取る。

そこまで器用に回避が出来ない剛練武は、ブロックした腕毎崩れ落ち、回避特化型じゃない禍刀羅守も電撃の雨に呑み込まれた。

「この辺は力量差が有りすぎますね。当たったら、幾らエインヘリアルを使っても、私達では一撃を耐えるのは不可能です」

「剛練武達じゃあ、今の二の舞か……現状の相性は悪そうだな。残

ったのはクロウ、ハルピュイアか。ミリアもまだ行けるか？　発動、召喚、ミリア！　皆、行くよ？君達全てをエインヘリアルに命ずる」

全ての召喚獣が黄金色に輝く。

使用制限とか、ペナルティとかないんかな？　この神スキルは……。

まあ、便利でいいけど。

「僕が前に出る！　……皆は最大威力で攻撃を仕掛けるんだ！　吉備津刀！　そして……開け！　我が王の財宝よ（ゲートオブファンタズム）！」

吉備津刀を手にして、同時に王の財宝（ゲートオブファンタズム）を発動させる。

「ん？　どうした！？　開け！　王の財宝よ！」

僕の王の財宝はうんともすんとも言わない。

いつもより魔力を込めてみる。

……反応なし。

……反応なし。

いつもより丁寧に展開を試みる。

「どういう事だ？」

「マスター！！」

ハルピュイアの声に反応すると、回避不可な位にまで白き竜の電撃が迫っていた。

「ぐ……竜炉心！！　おおおお！　くっ！　駄目か！　がぁあああ」

継続して展開していた竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）に渾身の魔力を込める。

しかし、その威力の前に僕の竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）は、いとも簡単に霧散した。

そして、凄まじい電撃が僕を襲った。

「マスター！　ご無事ですか！？」

「はあ、はあ、はあ、な、なんとかね……竜の羽ばたきが辛うじてダメージを吸収してくれたから……」

ふう、危なかった。優秀なスキルのお陰でなんとか助かった。

「でも、どういう事だ？　何故王の財宝は発動しない？」

「……マスター。今は……」

「そうだね。そんな事に気を取られている場合じゃないか。済まない。心配かけたね。もう大丈夫！　行こう！」

理由はわからないけど、王の財宝は使用不可。

なら、他の手段で戦うまでだ。

言いながら逆の手にダークを投影し、白き竜への攻撃を開始した。

白き竜の電撃の狙いを僕に向ける為、ダークを槍投げの要領で投擲する。

一回一回は大したダメージにならないが、攻撃をインターセプトし続ければ、狙いになるには十分だろう。

事実、白き竜は何度もブレスを吐こうとしているが、口腔内に侵入するダークのせいでそれもままならない。

「おおおお！！　だあ！」

振り下ろされた大振りの爪を蹴って飛び上がる。

そして、吉備津刀の背で力一杯頭を打ちつける。

「ギャオオオオ！！」

態勢を崩しながらも、空にいる僕に巨大な尻尾を振るってくる。

しかし地を蹴ったミリアが、僕を回収してくれる。

そして、空振りに終わったテールスイングを正面から見据えて、クロウとハルピュイアが、最早竜巻としか見えないような羽ばたきで白き竜を背後にある岩壁に打ちつけた。

「有難うミリア。なんとかしてくれると信じてたよ」

「ウォフゥン」

白き竜は本能で動いている為、武神小竜姫より動きが捉えやすいし、読みやすい。　それに、基本回避を繰り返しながらのヒットアンドアウェイな為、特に目立った外傷もない。

しかし、問題はその巨大な体だが……そこは経験と慣れとしかいいようがない。

更に僕には、回避不可の時の際の竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）の発動もある為、未だ余裕がある。

「さて、次行きますよ！　風よ……マハガル！」

「クァア！」

白き竜の全身を包む衝撃に、口唇から放たれる電磁砲。

やはりかなりの電撃耐性があるみたいで、そのどれもがダメージは低い。

しかし、ゼロではない。徐々にそのダメージは体を蝕んでいくだろう。

「追随しろ！　発動、召喚、剛練武！　禍刀羅守！」

「ウゴ！」「ケケー！」

喚びだした剛練武は周囲に落ちている石柱を放り投げつける。

禍刀羅守はそのフォルムを四本の刀にして、まるでファンネルのように眼前の敵に襲いかかる。

僕もミリアを媒体に、無駄なしの銃（フェイルノート）を具現化させる。

「電撃は効果が薄い……なら込める力は……気孔弾！」

気の力を装填して撃ち放った。

「ギャオオオオオ！！！」

蓄積された痛みから逃れようとするかの如く、身悶えする白き竜。

次いで怒りに満ちた目で僕等を睨み付ける。

そのまま突撃してきたのを避けきれず、剛練武が消えた。

召喚→撃破される→再召喚。

を繰り返す。

どの位続けただろうか？

ダメージよりも、この終わらない戦いに対して疲労感を感じて来た様子の白き竜。

「もうそろそろいいかなぁ？　流石にしんどくなって来たね」
「この異空間が無くなりそうですし、いいんじゃないでしょうか？」

ダークの投擲を止めて様子を見る。

確かによく見ると、所々綻びが出て来ている。

「よし！　じゃあ、行くか！　ハルピュイア、道を作ってくれ。
クロウは羽ばたきで電撃を反らして。
剛練武は引き続き投石を。禍刀羅守は僕の近くであの爪を逸らして」

無駄なしの銃（フェイルノート）に装填した気孔弾を連射しながら、僕はこの戦い？に終止符をうつべく行動を開始した。

「ギャオオオオ！」
「クアァ！」
「させませんよ……フェザーブレッド！」

僕に放たれた電撃は、クロウの羽から巻き起こる疾風により当たる事はない。

口から吐き出された火球は、ハルピュイアの十八番、フェザーブレッドにより相殺される。

「ウゴ！」
「グケェ！」

振り下ろされる大爪を、禍刀羅守がその身を変質させた四本の剣で受け流す。

その隙に放たれた岩が直撃した白き竜が姿勢を崩す。

「グオオオアアア！」

しかし敵も理性がなくても伝説の剣聖。それだけでは終わらない。

先程同様その長い尻尾を横凪ぎに振るってきた。

「ミリア、変質！　跳躍」

「ウォウ！」

僕は咄嗟に無駄なしの銃を銃形態から召喚獣ミリアに戻して、跨り飛び上が事で回避する。

「発動、ヒヒイロカネ！　小竜姫様。僕がいた事で、随分貴女に面倒や苦労をかけたかと思いますが、この恩は必ず返させてもらいます……発動、拳技、ファイナルヘヴン！」

跳躍したミリアから更に跳躍して、より高みから白き竜を見下ろす。

そして気合いを込めると、拳を白き竜の額に叩きつけた。

異空間……辺りはボロボロ、荒野を連想させる荒れ地となっている。

僕等の前、その中心には馬鹿でかいクレーターが出来ていた。

僕の格闘術の奥義、ファイナルヘヴンの衝撃で出来たものだ。

「……眠ってるだけみたいですね」

「満足げな顔になったし、良かった良かった。皆もお疲れ様」

僕と苦楽を共にした召喚獣の皆にも礼を言う。

皆、口々に僕を労ってくれながら、僕の中に戻っていく。

「さて、よっこいしょっと……じゃあ通常空間に……どうやって戻ろうか？」

それはブルって門から動かなかった鬼門達が、意を決して様子を見にくるまで続いた。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのよん）

「結局、いつ起きるんだろう？」

異空間で暴走させた小竜姫様と死闘？　を繰り広げてから今日で丁度一カ月。

何をしているのかといえば……台所で料理を作ってるんだな、これが。

大局的に何をしているのかといえば……安らかな寝顔で「もうお腹いっぱい……むにゃむにゃ」等と言っている我が師匠、妙神山管理人、武神小竜姫様が起きるのを待っている訳だ。

「え？　何ですか？　あ、有難うございます。わざわざ食事如きで我がマスターのお手を煩わせてしまって……」

「食事は別に好きだから気にしてないよ。そうじゃなくて、小竜姫様はいつ目覚めるんだろうなぁ、と思ってさ」

平時から常時召喚状態のハルピュイアに、料理を配りながら聞いてみる。

「流石に私にもわかりませんね。マスター（王子様）がキスをすれば目が覚めるのではないですか？」

「ええ！！　何を言っちゃってるの！？　しかもルビがおかしいし！！」

「まあまあ。わりかし本気だったんですが……まあ、冗談はともかく。竜族の生態を聞かれてもわかりかねますね。マスターの『目』を使えばよいのでは？」

『目』かぁ……。

確かにわかるだろうけど、一寸気が引けるなぁ。

「でなければ、いつ目覚めるともしれない小竜姫さんを、一途に待ち続けるつもりですか！？　どれだけ愛情抜群なんですか！」

「いや、違うから。何さ、愛情抜群って？　そんな言葉ないから……」

「マスターにはやるべき事があるでしょう？　ここで時間を取っている暇はない筈ですよ？」

わかってるけど……。

「理解はされてるみたいですね。では今すぐ小竜姫さんの服を脱がせて確認を……」

「いや、待って！　いらない！　いらないから！　僕の『目』は、別に服を脱がす必要なんかないから！　ハルピュイアは知ってるよね？　そんな必要ない事！？」

さり気なく服を脱がし出したハルピュイアを慌てて止める。

「しかし、マスターが集中して『目』を使用されないと、失敗する可能性がありますから……さあ、手を離して下さいマスター。今すぐ全裸に致しますので……」

何これ？

なんでこんな事になってるの？

「わかった、わかったから……やる、やるよ」
「そうですか。わかりました。差し出がましい事をしました」
仕方ないなぁ。
実際いやいやなんだけどハルピュイアはかなり鋭いからすぐばれるし……。
「すいません、小竜姫様。発動、神の見えざる目（神眼）」
一応真剣に、僕は小竜姫様に向かって『目』を発動させた。

僕が創造神ブラフマー様から譲り受けたのは、エインヘリアルだけではない。
もっと昔に頂いた物がある。
それがこの『目』。
神の見えざる……目。神眼である。
これは全ての物を見極める事が出来る。
それは生き物も例外ではない。
今回に限って言えば、小竜姫様がどんな原因で眠り続けてるのかがわかる。と言う事だ。
……なるほど、神通力不足か。

他は問題ないみたいだな。
それなら打つ手はシンプルですむな。
「ハルピュイア、小竜姫様に神通力を補充してあげて」
「なんだ、只のガス欠でしたか。わかりました、少々お待ち下さい」
流石にハルピュイアだけでは神通力が足りない為、僕が時々ハルピュイアに魔力を送る→神通力に変換させる→小竜姫様に送る。を繰り返した。

「すみません！　私が休眠状態になっていたせいで、篠宮さん達にご迷惑を……本当に申し訳ありませんでした！」
起き上がった小竜姫様は、地面に頭がつきそうと思う位に頭を下げ始めた。
そんな姿を見ながら、僕は神通力不足で眠りに入る事を竜族では休眠状態って言うんだなぁ。等と考えていた。

「篠宮さん、こんな形になってしまいましたが、貴方は私の弟子です。いつでも、この妙神山に来て下さい。あ、勿論ハルピュイアさんもですよ」

それは、翌日、妙神山修行場の出口まで見送りに来てくれた小竜姫様の言葉だった。

「有難うございます」

「でも、小竜姫さん、一度もマスターに勝ってない……竜化した時も」

「それは……うう――いいんです！　篠宮さんなら！」

「ぞっこんですね」

全く、二人とも仲がいいなぁ。

「あ、じゃあ……一つお願いが」

「何ですか？　私に出来る事なら何でも言って下さい！　いくつでもどんな事でも篠宮さんの希望に応えられるように粉骨砕身の勢いで努力しますから！」

「必死ですね……例え、お願いを聞いてもすぐに小竜姫さんになびく程、うちのマスターは安くないですよ？」

「わかってます！　その程度の殿方だったら、私だってこんな……って、そんな事はどうでもいいんです！　私は弟子にしてあげられる事があるのが嬉しいだけです！　それだけです！　本当ですよ？　ね？　篠宮さんならわかってくれますよね？　ね？　」

何か、凄くレアな物を見ているような気がして、ただ相づちをうつだけになってしまった。

原作の小竜姫様って、こんな人……神だったっけ？

「ええっと……話を進めますよ。僕は時期はわかりませんがゴーストスイーパーになろうと思っています」

「ごおすとすいぱあ？　何処かで聞いたような……」

「陰陽師のような職業の事ですよ、小竜姫さん」

横文字がダメな様子の小竜姫様に、ハルピュイアが和風に変換してくれる。

唐巣神父も若い頃来ていた筈なんだけど……神族・魔族の人間への興味ってその位なのかな？

「ああ！　そうでした！　そうでした！　確かに篠宮さんには向いていますね」

「はい。で、これには師の推薦が必要なのです。しかし、僕には小竜姫様以外の師は（この世界には）いません」

なるほどわかった、と言う顔をする。

「推薦ですね！　そんなのいつでもしますよ！　力量も性格も、妙神山修行場として……じゃないんでしたね。私個人としても胸をはって推薦出来ます！」

「まあ、そうですよね。本人より強いんですから」

「もう！　だから篠宮さんはいいんです！」

とりあえずＯＫでいいのかな？

「では、何か必要な事があったら剛練武に伝えて下さい。出来るだけ一時間以内に対応しますから。後、はい、これ……お弁当を作りました。よければ食べてもらえると嬉しいです」

胸を張って僕のお願いに確約をくれた後、なんだかもじもじと懐から布包みを出して僕に渡してくれた。

「有難うございます。貴女のような師を持って僕は幸せですね。お弁当も喜んで頂きます」
「小竜姫さん……マスターを相手にするなら、その程度の連撃じゃあ生温いですよ。むしろ全く効果がないと言えるでしょう」
「……そのようですね。頑張ります！」

ハルピュイアはいつも思うけど、さり気なく僕の悪口を言ってない？

本当に召喚獣なのかな？

「篠宮さん、最後にこれを……」
「これは……手甲？　しかもよくお借りしていた真鍮の手甲じゃないですか。でも壊れたんじゃ……」
「はい、竜鱗の顎と言います。師として弟子に与えられるせめてもの事です。そんな簡単に壊れる武器じゃないですよ。一応人界では持ち歩きに不便でしょうから、今から神通力を通して小型化出来るようにしますね」
「何から何まで有難うございます。今からですか？　一体どんな儀式を行うんですか？」

僕には神通力はないから、神通力を込めろ！　とか言われたら困るなぁ。

「そんな……いや、あの……あ、それ、は……凄く簡単です！　あの、一寸だけで構いませんので、目を瞑っていてもらえませんか？」
「はい？　ええ、いいですよ」
見られたら困るものなのかな？

見られたら困るけど、目の前でやらなくてはいけない事……サー

ヴァントのマスター登録みたいなものかな？

あーあ。と言った、ハルピュイアの溜め息的なものが聞こえてきたが、僕には意味がよくわからなかった。

そして、気配が近づいてきたかと思う、と額に暖かい感触が一瞬だけ感じられた。

驚いて目を見開くと、そこには頬を紅色に染めた小竜姫様がいた。

「あ！　あの！　私の竜気を与えました！　これでここ（妙神山）にある全ての武具を召喚……って！　篠宮さん！！　どうしたんですか！？」

小竜姫様が早口に何かをまくし立てているが、僕はそれを聞く余裕ははなかった。　突如として、体を引き裂かれるような痛みが襲っていたからだ。

「篠宮さん！　どうしたんです！？　篠宮さん！」

「小竜姫さん、どいていて下さい！　マスター！　クロウ様を喚んで下さい！」

「ハ……ルピュイ、ア？」

「早く！　急いで下さい！」

急にまくし立ててくるハルピュイア。

訳がわからない。

内容が頭に入らない。

痛みで意識が飛びそうな状況でだったので、脊髄反射でクロウを召喚する。

「クロウ様。宜しいですね？」

「クアア！」

「では……旋風の精霊にして、召喚士、シズマ＝ラインズが従者、ハルピュイアが命ずる。行き場無き力の渦よ、優しき風と共に竜種足る従者、クロウへ移行せよ！」

まるで熱暴走のようにヒートした力は、ハルピュイアの文言と共に徐々に減少していった。

同時にクロウの姿も無かった。

どうやら僕の中に戻ったみたいだ。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「なんとか間に合いましたね。大事ないですか、マスター？」

「はぁ、はぁ、あ、ああ……なんとか……」

肩で息をしながら無事を伝える。

「あの……篠宮さん……私……そんなつもりじゃ……」

「いや、小竜姫様が気にされる事は、ありません……よ。これは僕の問題ですから」

暫く体を落ち着かせようと、深呼吸を繰り返す。

すー、はー、すー、はー。

よし、落ち着いた。

今回の原因について振り返る。
まあ、今回の原因ははっきりしているんだけどね。
僕の竜の因子が、小竜姫様の竜の因子に拒絶反応が出た為だ。
そもそも僕が自分の力を秘密にしていたせいだし、小竜姫様は１００％善意から申し出てくれたんだ。
何で責める事が出来ようか？
「篠宮さん……私は……ぐすっ……うう……」
「ええっ！？　何で泣くんですか！？　し、小竜姫様？」
見ると、小竜姫様はその場で座り込んで号泣していた。
訳が分からない。なんで小竜姫様が泣き出すの？
「マスター。マスターはいつも非常に優しいです。
しかし、時には優しさが苦痛になる時があるんですよ。
この状況で説明はなし、明らかに原因となっているのに責める事もない。
責められるより遥かに辛いでしょう。ねぇ、小竜姫さん？」
「……えぐ、えぐ……わ、私、私が悪いんですよね……じゃあ、はっきり……ぐすっ……教えて、下さい。私に、篠宮さんの……」
そうかぁ。小竜姫様が責任を感じないように、と思ったんだけど……逆に罪の意識を感じさせるとは思わなかった。
「わかったよ。有難うハルピュイア。すみません小竜姫様。僕の不徳故に、余計な気を使わせてしまって……僕の推測、聞いてくれま

すか？」
「……いいんですか？　私が聞いても？」
「勿論です。僕が聞いて欲しいんです」
「篠宮さん……有難うございます」
「喧嘩後の夫婦のようですね」

ちゃかすな。全く、すぐ僕をネタにするんだから。

そして、小竜姫様には僕が竜の因子を持っている事、小竜姫様のそれとは合わなかった為に起きた現象である事を説明した。

「本当にすみません！　私、篠宮さんの助けになれば、と思って竜気を送ったのに……」
「いえ、黙っていた僕も悪かったんです。僕は何ともありません。どうか、あまりお気になりませんよう……」

その後の事は僕にはわからない。
痛みでそれ所じゃあなかったから。

故にハルピュイアに後の事を確認する。

「分かり易く言いますと、マスターの体の中に複数の混じり合えない力が渦巻いていた訳です。
そのままでは、幾らマスターが規格外な存在であっても、致命的な負傷をしたでしょう。なので、元々竜の適性を持っていたクロウ様に、小竜姫さんの竜気を肩代わりさせてもらいました」

小竜姫様は事の大きさに、僕はクロウのあまりの汎用性に驚いていた。

「発動、召喚、クロウ！　早速だけど……有難う。君のおかげで助かったよ」
「クロウさん。本当に有難う御座いました。なんてお礼を言っていいのか……」
当然の事をしたまでだぜ！　とばかりに、ご機嫌に空を滑空するクロウ。
本体のない影みたいなものだから、意志はない筈なんだけど……。
電磁砲や羽ばたきから発せられる衝撃波を放ちまくるクロウ。
意志はない……筈。　クロウの空中一人大戦争は、放った電磁砲が妙神山の結界に反応して、自らを貫くまで続けられた。
……。

怪我等ではなかった為、一日だけ出発をずらして鋭気を養ってから、僕等は妙神山を後にした。
昨日とは別の意味で涙を流しながら、小竜姫様は僕等を送り出してくれた。
勿論鬼門達もだ。
あれで中々洒落のわかる二人だった。

小竜姫様の、私の計画が一段階前進しました。の発言の意味はわからなかったが、いい友人や師を持って僕は幸せだなぁ。と、この世界のあり方に感謝していた。

「マスター、そろそろ宜しいでしょうか？　お知らせしたい事が……」

奇遇だな。僕も確認したい事があるんだ。

クロウを召喚して、全てを防御するよう伝える。

不満そうに鳴くがそんなのは知った事じゃない。

「発動、投影、ダーク。じゃあ……行くよ！」

投影魔術でダークを創造する。

やはり魔力が減るか……僕の想像通りかな、これは。

槍投げの要領で、勢いをつけてダークを投擲した。

ハルピュイアはその間一言も口を挟まなかった。

「くぁあ！！」

「……やはり……か」

ダークが直撃する瞬間、クロウの前方に風が収束しダークを霧散させた。

「有難う、クロウ。じゃあ、次は……クロウ、発動、竜炉心！」

「……クァア！」

クロウの一声で、僕の減少した魔力が即座に全快する。
「うん、僕の仮説通りだね。ご苦労様クロウ……送還！」
クロウが僕の中に入るのを待ってから、ハルピュイアに確認していく。
「ハルピュイア、今でも僕は竜種なのか？」
「恐らく全てがご高察の通りかと。今のマスターは竜種ではなく、神の因子を持った人間です。原因は……」
「僕の竜の因子である竜珠。竜炉心がクロウに移譲したから……そして、その原因は……」
「私の行った儀式スペルのせいですね」
なんて言うか……１００％予想通りだなぁ。
「先程確認されていましたが、マスターのスキルは消えた訳ではなく、クロウ様に移動しただけですので、クロウ様が現界していれば行使可能です」
「神眼で自分を見れないのが惜しいね。ま、問題無さそうだし、いいか」
ブラフマー様から譲り受けた神眼、神の見えざる目。は、自らとそれに類するものは見えない。
つまり、自身の召喚獣もそれに該当する訳だ。

「ハルピュイアも言ったように、竜炉心は無くなった訳じゃないし、僕がやる事が変わる訳じゃない。皆忘れてるかもしれないけど、僕は超前衛職じゃなくて後衛職の召喚士だからね」
「ああ……失念していました。私達より遥かに強くて、私達より遥かに攻撃的で、明らかに前衛よりの行動を取っていた為……」

なんだかなぁ。

少しだけ苦労するかもしれないけど……ま、いいか。

そんなこんなで、僕の妙神山修行、そしてこの世界の第一歩は終わった。

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのに）（前書き）

変更点は直接追加・変更してあります。
重複する分もありますので、よろしくご了承下さい。

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのに）

※スキルの威力は、魔力及び各種ステータスにより変動する為、基礎値のみ表示する事とする。

主人公及び仲魔ステータス一覧

シズマ＝ラインズ
（静馬篠宮）

レベル９９

ＨＰ　７８４
ＭＰ　１２３０

力３５
魔４７
体３１
速５０
運２３

固有スキル

エインヘリアル
〔マスターが契約する全ての仲魔のレベルを熟練度、スキルダメージを×２アップさせる。及び、このスキルを持つマスターの召喚獣は常時レベルが＋１０される〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔竜属性、竜族の証、竜珠。効率的に魔力及び気術を返還する。返還効率１対１００。
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔風・竜属性。自身及び周囲の全属性ダメージを３００吸収する。他者、範囲を拡大するとその吸収率はダウンする
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ〕

竜の殺息
（ドラゴンブレス）
〔光・竜属性。対象に威力３５０の後に追加１３０×１〜５０の魔力ダメージを与える。※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時、召喚獣クロウ現界時のみ〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔竜属性。竜炉心に込められた竜の力を解放する。
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ、対象は召喚獣クロウ（鴉）のみ〕

格闘術
（気孔弾、コンボ、タックル、短勁、バックハンドブロー、乱撃、スピンアタック、空鳴拳、双竜脚、夢想阿修羅拳、ファイナルヘヴン）

剣術

託された友愛の剣
（吉備津天地刀）
〔光属性。対象に威力２００の魔力ダメージを与える〕

光射す竜の咆哮
（竜鱗の顎）
〔光・竜属性、対象に威力６０の気力ダメージを与える。
※使用制限、竜炉心発動時のみ〕

魔術

召喚術

契約召喚獣
・クロウ（鴉）
・ミリア（ハウンドウルフ）
・ハルピュイア（旋風の精霊）
・剛練武（幻獣）

・禍刀羅守（幻獣）

投影魔術

固有結界
「力無き弱者の歌」〔現実を浸食する心象世界を具現化させる〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔光属性。威力１～１２０の魔力ダメージを与える。魔力で創造した銃。スキルや魔術を込める事が可能。※使用制限、召喚獣ミリア媒体時のみ使用可能〕

気術

天術
〔気術と魔術を融合させた無の力。　全ての天術は、シズマ＝ラインズが使用した場合に限り威力が＋３０される〕

柔剛相交
（ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン）
〔無属性。天術。威力４００の無属性ダメージを与える。このスキルは対象の如何なる防御スキルを無効化する。
※使用制限、早風、創造時のみ〕

早風
〔無属性。天術。天術により創り出した無の刀。　威力２の無属性ダメージを与える〕

ヒヒイロカネ
〔無属性。天術。格闘状態の際に、基礎ダメージが１、５倍される（このダメージは如何なる軽減・無効も無効化させる）〕

神の見えざる目
（神眼）
〔光属性、鑑定・未鑑定状態に問わず、全ての対象の情報を得る事が可能。生物・無機物すら問わない。しかし、自身、もしくはそれ

に類するものは該当しない〕

真・超電磁砲
（ハイレールガン）
〔電撃属性。威力１２０の念動ダメージを与える〕

影分身の術
〔疾風属性。自身及び自身の所有する武具を複数複製する。※分身体の耐久度は１、威力は３０％となる〕

使用不可スキル
カリバーン
王の財宝
超電磁砲
空想具現化
壊れた幻想
一部投影魔術

召喚獣

クロウ
（鴉）

レベル４５→４６
ＨＰ１２２→３３１
ＭＰ３５→１０８

力１２→２２
魔１１→２１
体８→１８
速３５→４５
運３→１３

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

電磁砲
〔電撃属性。威力１５の念動ダメージを与える〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔上記同様〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔上記同様〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔上記同様〕

ミリア
（ハウンドウルフ）

レベル１３→１８
ＨＰ８３→１１０
ＭＰ４４→５１

力７→９
魔１２
体９→１１
速１３→１４
運１０

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

体当たり
〔無属性。威力７の物理ダメージを込与える〕

ブフ
〔氷結属性。威力５の魔力ダメージ＋一定確率で氷結効果を与える〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔上記同様〕

ハルピュイア
（旋風の精霊）

レベル２７→２９

ＨＰ１７１→１８１
ＭＰ１２０→１３２

力９
魔２１
体８
速２９→３０
運１５→１６

固有スキル

フェザーブレッド
〔疾風属性。威力３５のダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

ガル
〔疾風属性。威力５の魔力ダメージを与える〕

マハガル
〔疾風属性。範囲に威力５のダメージを与える〕

ザン
〔衝撃属性。威力５の魔力ダメージを与える〕
剛練武
（幻獣）

レベル１１

ＨＰ３５０
ＭＰ１５

力１７
魔４
体２０
速３
運８

固有スキル

媒体選択
〔召喚時に媒体（近くにある元素）により素体・スキルに変化がある〕

再生能力（弱）
〔神界・人界で一定時間経過毎に少量のＨＰが回復する〕

再生能力（中）
〔妙神山で一定時間経過毎に中量のＨＰが回復する〕

禍刀羅守
（幻獣）

レベル１１

ＨＰ２１４
ＭＰ１８

力１３
魔６
体１５
速１８
運４

固有スキル

形態変化
〔動く刀（リビングソード）・通常形態に変化可能〕

串刺し
〔無属性。威力６の物理ダメージを与える〕

第六章、神の遣いは世界の中心に出会う（そのいち）（前書き）

言葉使いがわからないので、おかしな事になっています。

よろしくご了承ください

第六章、神の遣いは世界の中心に出会う（そのいち）

こんばんわ。静馬篠宮です。

今時刻は２３時１５分。僕は月明かりの照らす廃ビルの二階で何をしているかと言うと……悪霊退治を行っています。

僕の肩に乗って羽を休めているクロウ。

特に細かな指示を出さず、悪霊を仕留めろ。とだけ言っているので、反応がある度にサーチアンドデストロイとなっている。

「やはり凄いね。流石は小竜姫様の愛弟子なだけはある。私などが推し量れるようなレベルではないね」

「いえ。神父の方が早い段階から小竜姫様に指導を受けていたじゃないですか？　それに、僕はゴーストスイーパーの世界の常識は一切わかりません。知らずに禁忌を犯していたり、その知識に偏りがあると思います。神父にはいつもご迷惑をおかけします」

「……私は修行をつけていただいただけさ。君のように見込まれて弟子入りした訳じゃないよ」

僕も見込まれてではないんだけどなぁ……。

まあ、変な誤解を生むかもしれないから何も言わないけど。

状況は、現状クロウが全てやってくれているので、僕は正直やる事がない。

一緒について来てくれた神父と、軽口を叩き合う。

飛び去ったクロウが僕の肩に戻ってくる。

「終わったみたいですね。じゃあ、上に行きましょうか……ええと、次で最終階ですね」

「ああ。しかし、召喚獣……か。

初めて会った時にも言ったが、私の知識では悪魔を喚びだして契約の楔で縛りつける事と、守護獣として式神にする事しか知らなかった。

静馬君の召喚術は、かの役行者と同列のものじゃないかと常々思っているよ」

そういえば、初めて神父に会った時は、戦闘になったっけ。

それもいい思い出だ。

「……まさか。僕は確かに小竜姫様に目をかけてもらっていましたが、ただの一寸特殊な人間ですよ」

当然、軽口を叩きながらも二人とも油断はしない。

まあ、クロウがいるから警戒しても端から消滅していくんだけど……。

「さて……ボスの登場ですね」

「ああ、気を引き締めていこうか」

暗闇の中、濃厚な邪念の渦が集まる場所に、一回り大きな悪霊が鎮座していた。

「さあ、何でも好きな物を食べて下さい！」
「いや、しかしいつも思うが、こういった席では年上で先輩の私が……それにこのお金も……」
「まあまあ、そんな事いいっこ無しです。今回は僕の受けた依頼に同行してもらったんです。お礼と食事に招待する位当然です！　謝礼については、受け取って貰わなくては僕の立つ瀬がありません。僕はゴーストスイーパーじゃないんですから」

ボス霊も苦もなく（クロウが）一蹴してから馴染みのファミレスに来ていた。

顔見知りのウェイトレスにメニューを片っ端から注文しながら、付き合ってくれた神父……ゴーストスイーパー協会の重鎮、唐巣和宏。

原作キャラ唐巣神父である。

なんで彼とこんな関係になっているかと言うと……話は一ヶ月前迄遡る。

「ハルピュイア、原作の地、東京に来たけど、まずはどうしようか？　横島忠夫の家、わからないしね」

あれ？　まだ大阪にいたんだっけ？

「マスター。今横島忠夫の住まいがわかっても、訪問するのは得策

ではありません。万全の準備をすべきです。彼処には稀代の女傑とその愛弟子がいるのですから」

紅百合とその後継者か。

確かにファーストインプレッションで失敗したら、挽回は難しそうだな。

でも……。

「いや、一番初めに横島忠夫に接触する。横島百合子・大樹にもね。聡明だからこそ、僕等の言葉に耳を傾けてくれると思う」

「……そうですか。わかりました。では彼等の自宅の捜索は私にお任せを……皆、おいで」

ハルピュイアの声を受けて、付近に生息すると思われる大量の鳥達が集まってくる。

「おおー。凄いなぁ。鳥寄せも出来るんだ？」

「少年、及びその住居を捜してきて下さいね。宜しくお願いします」

飛び去る鳥達を見ながら、ここが人気のない公園で良かった、と心底考えていた。

何もする前から目立つ訳にはいかないからね。

ハルピュイアの呼んだ鳥達が横島忠夫を探している間、僕等は街の状況を知ろうと探索活動に赴いていた。

「凄い数の霊達だな……」
「全くですね。随分混沌としていますね」
そこかしこに霊の姿がある。
勿論人に害をなす者だけではないが、それにしても多すぎるだろう。
「未練のせいでしょうか？」
「それもあるだろうけど……まだ日本にＧＳが浸透していないのかもしれない」
おおっぴらに活動出来ていないのかも。
第三者にはいかがわしい呪いだしなぁ。

「ん？　あれは……」
「子供達……ですね。廃墟探索ですか。夢がありますね」
いやいや、廃墟はわかるけどあそこ霊道になってないか？
「横島忠夫とは関係ないけど、危険があるだろうし放ってはおけないよ」
「言うと思いました。流石は我が親愛なるマスター。ロウ属性に特化していらっしゃる」
全く馬鹿ばっかり言って……。
「じゃあ、行くよ？　何もなければそれに越したことはないし」

気配を消して僕もその廃墟に忍び込む事にした。

廃墟に侵入したのは、五人の同年代に見える子供達。
小学校にも上がったかどうかもわからないような児童だ。

中は霊道の為、霊自体は掃いて捨てる程いる。

そう言えば実際に掃除で部屋を綺麗にする事で、浄霊としていた魔女もいたな。

僕にはとても真似できないな。

で、その溜まった霊の殆どは、子供達に一切の感心を持たない。

まあ自ら生者に興味を持つ霊なんてほんの一部だしね。

逆に僕等の……と言うかハルピュイアに対して、入る前から敵意むき出しだった。

元神族だし仕方ないか。

故に雰囲気や気配を完全に消せる僕だけが中にいる。

「その為にやったんだけど、霊達全てが全くの素通りってのもなぁ……」

なんとなく解せないものを感じながら、子供達の後を追跡した。

正直、霊達に「よっ！　お仲間さん。元気？」とか言われて肩でも叩かれたら……廃墟と化している屋敷は、即座に塵と化しただろう。

「すげぇよ！　本当にお化けとかでるんじゃねぇの！」
「馬鹿いってんなよ！　んなもんいるか！」

大声で虚勢を張りながら歩き回る子供達。

「でも、なんか、誰かが見てるような……そんな気せん？」
「な、そんな、んな訳ないだろ！　脅かしてんじゃねぇ！」

鋭い子もいるんだな。
僕の視線だろうな。

突如、周囲に響く物音。

ビクリッ！　と慌てて周囲を見回す子供。

「お、おい、今の……」
「み、皆……あ、あれ……」

子供Ａが指差した先は、自分達がこれから入ろうとしていた部屋の中で、揺れるカーテンの先に映った黒い影だった。

「で、でたぁ！」
「やだあああああ！」

「オカアサーン！」
「ウエエエエン！」
皆、恐慌状態で足早に屋敷外へと逃げていった。
その場には一人だけ子供が残っていた。
「お、おい、皆何処行くねん！　ち、ちょい待ちいな！」
足は震えて、顔色も最悪。
どうやら逃げ遅れたか。
やれやれ……仕方ないな。
これって、トラウマにならないんだろうか？
時間が夕方で本当に良かったね、子供B。
僕は出て行ってその置いて行かれた子供Bを救出しようとする。
「い、いや……お、お化けなんておらんねん！　もしいたって、おかんの方が百万倍位恐いに決まっとる！　今、恐ないねん！　やあああああ！」
子供Bは影に近づくとカーテンをめくり上げたのだ。
へぇ、光るものがありそうな子だな。
恐怖のせいもあるだろうけど、その行動は大したものだ。
「な、なんや、只のカーテンの影やないか！　へ、へん！　こない

な事で俺は驚いてへんぞ！　歌も歌っちゃうもんな！　さっちゃんはねーさちよっていうんだー」

思わず苦笑してしまう。
歌・言葉には力がある。
でもその歌歌うか？

まあ、いいけど。

ビビりながらも出口に向かって歩き出す子供Ｂ。

僕も安心してそれを見ていた時、それは起きた。

急にあらわれた浮遊霊が、子供Ｂの足元の板をずらした。
で、結果どうなるかと言えば……。

「おわあああ！　落ちるうううう！」

と、なる訳だ。

「一人になるのを狙ったのか？　ありがちだな！　発動、召喚、クロウ！　行け！」

子供Ｂの落下に間に合うようにクロウを召喚し、飛び出させる。

「わあああああ……って、なん？　カラスなん？　なんでカラスが俺をくわえてるん？　もしかして食べる気か！　うわあああ、離せ、離せええええ！」

ふう、やれやれ……離したら落ちるが良いんだろうか？

僕も追随するように、外れた床板から下に降りていく。
一番下部まで降りると、そこは動物や何かわからないものの骨が散乱していた。
「か、カラス！　来るな！　うわっ！？　ほ、骨？　わあああああ！」
クロウによって床に座らせられた子供Bは、凄まじく錯乱状態にあった。
骨にか、クロウにか、状況そのものかは流石にわからないが。
「俺なんか食ってもうまないねん！　晩飯わけたるから……堪忍やぁ……」
「……子供B。少しは落ち着け」
「落ち着けるかドアホ！　周りみてみぃ？　骨は仰山あるし、お化けはおるし、どないせぇっちゅーねん！？　って、自分、誰？」
この子は大阪？
ノリツッコミまで見せてくれるなんて……なんか新鮮。
「僕は君達がこの屋敷に入ったのを見たから……ね」
「な、なんや……怒るんかい！？　俺達は一寸探検に……」
「いや、それはどうでもいい。むしろ問題なのは……」
僕等が話してる間を隙と見たのか、背後から顔だけの悪霊が突撃してくる。

勿論隙なんてない訳で……。

「クアア！」

「うわっ！？　なんだ？」

クロウにより発動されたガルが、それを存在諸共亡き者とした。

「なんや、今の？」

「心配だったのさ」

敵は目標を僕とクロウに見定めたのか、次々と実体化してくる。

「……な、なんや、これ……おばけやんか……」

「こいつらが見えてしまう事を……」

僕は拳で、クロウは突撃とガルで、部屋中に集約していった悪霊の束を、次々に無に返していった。

「大丈夫かい？　子供B？　さあ、もう大丈夫だよ。そろそろ出ようか？」

「……はぁ」

結局色んな場所から引っ張られた為、屋敷中の霊を叩きのめす羽目になった。

単体戦力は（僕にとっては）大した事なかった為、時間こそかか

らなかったが、正直面倒くさかった事を述べておく。

「よっ！　これで……最後だ！」

ラスト一匹にワンツーからローキックのコンボを当てて消滅させる。

見回しても、もう、僕とクロウの周りには何もいない。

あ、少年Ｂがいたか。

クロウを相手にしても一歩も引かず、むしろ全戦力を投入してきた為、屋敷所か霊道が破壊されてしまったみたいだ。

「……やりすぎたな」

「クアアアア……」

二人で仲良く反省する。

まあ、過ぎた事を悔やんでも仕方ないか。

さて、少年Ｂは……と。

「は……ぁ……」

「大丈夫か？　少年Ｂ？」

反応はない。ただのしかばねみたいだ。

じゃない！

よく少年Ｂを観察する。

血色……よし！
顔色……よし！
意識……よし！
状態……んん？

なんか放心状態だな……。

特に悪影響は受けてないみたいなんだけど……。

「……す」
「す？」
「スッゴい！　にいちゃん、凄い！！　格好良い！」

急にこちらに向かって、興奮気味に抱きついてくる子供Ｂ。

「ええと、どういう事？」
「にいちゃん、あんなお化けをバッタバッタとやっつけて凄いなぁ！　そうだ！　にいちゃん、俺を弟子にしてくれへんか？」

ああ、なる程。

つまり、初めての霊との戦闘を見て、恐怖を感じるんじゃなくて憧れを感じちゃったんだ。

困ったなぁ。

僕は横島忠夫の所に行かなきゃいけないから、そんな余裕ないんだけど……。

それに、見える子なら逆に封をしなきゃいけないよな。

ふう……トラウマにならなきゃいいけど。

「あのね、子供B……「にいちゃん！　いや、師匠！　俺、子供なんて名前ちゃうねん！　俺は忠夫。横島忠夫だよ、師匠！」……そうか、忠夫君か。君には悪いけど……「マスター……」……おわぁ！？　ハルピュイア？　なんで急に！？」

子供B……忠夫君と話をしていたら、急に自らの意思で現界して来たハルピュイアが話しかけてきた。

びっくりしたぁ。

「マスター、本気ですか？」

「何が？　脅かさないでくれる？　それより、今は忠夫君を納得させるのが先だから。それに、もうこの屋敷に害をなす存在はいませんから」

大分やったからなぁ。

「なんやお姉ちゃんまで……カラスだけじゃなくて、綺麗なお姉ちゃんまで……師匠凄い」

なんかその言い方は語弊があるだろう。

「その子の名前、聞いてました？」
「勿論だよ。忠夫君だろ？」
「……はぁ。では、名字……フルネームでは？」
「そんなの当然聞いてたさ。横島忠夫君だろ？　……ん？　横島忠夫君？」
僕等が探していた子も横島忠夫だった気が……。

同姓同名……じゃないよね？

「忠夫君、今幾つだい？」
「俺？　今五歳や！」

年も同じか……じゃあまさか！

「じゃ、じゃあお父さんとお母さんの名前は言えるかい？」
「なんやの？　あ、わかった！　弟子入りのテストかなんかなん？　おかんは百合子！　おとんは大樹！　そして俺が忠夫や」

なんて偶然……いや、これも世界が定めた必定なんだろうか？

「なんで、そんなに察しが悪いんですか？　失礼ですか、マスターは無能でいらっしゃいますか？」
「くっ！　言い返せないのが、悔しい……」
「なあ兄ちゃん……じゃないや師匠！　いいだろ！　俺を弟子にしてぇな！」

むしろ僕にとってはこれ以上ない好機。
逃す手はない。

「わかった。いいよ」
「ホンマ！　いいの！」
「ああ、武士に二言はない。ただ、僕の事を師匠とは呼ばなくていいよ。なんかむずかゆくて……」
「そうなん？　なんや難しいなぁ……先生、兄貴、ドクター、ペッパー、あんちゃん、親方……じゃあ、兄ちゃんでいい？」

なんか途中で違うものが混ざったような……。

まあ、そんなこんなで僕は世界のキーパーソン、横島忠夫と出会った。

やっとスタート地点にたったんだ。
今までの失敗した別時空の僕と同じ轍を踏まないように、細心の注意を払う事を心に誓った。

第六章、神の遣いは世界の中心に出会う（そのに）（前書き）

きっと彼は、美神が来るまではふさふさだったに違いない

第六章、神の遣いは世界の中心に出会う（そのに）

やあ、皆、神の因子を持つ男、静馬篠宮だ。

一番始めに結論から言おう。

横島一家との話し合いは円満に終わった。

勿論いきなり霊力がどうの、未来がどうのなんて言わない。

結局決め手は魔人皇ヨコシマの見せた、あったかもしれない未来の映像だったんだけど。

ともあれ、百合子さんにも大樹さんにも、忠夫君を然るべき場所で修行なりの必要性を説明した。

僕がやったらって？　まさかまさか……ＧＳ資格も持っていない僕が、自分から言い出す事は出来まいよ。

ＧＳ協会からどんな事を言われるか……もし何か言ってきても、正直相手としては不足も不足なんだけどさ。

でも、今そんな事をしたら世界との軋轢が生まれる事は必至。故に最も信頼出来る場所を推薦しておいた。

つまり、唐巣教会だ。

で、僕はというと、世界から忠夫君を救う為、僕……今まで失敗して来た僕等が、取らなかった方法を取っていかないといけない。

つまり、最も自分がやらない事。

それは……。

「なぁ兄ちゃん。もう今日はええよ」

「そうはいかないよ。まだまだやらなきゃいけない事は沢山あるんだから」

彼に積極的に干渉する事だった。

横島家の居間で彼に勉強を教えていた。

どうやら、我が目で見て聞いた事は百合子さんと大樹さんの信に値するようで、僕がＧＳ資格を取ってから改めて専任で彼を守って欲しいと最後に言われたのだ。

言ってきてくれるのなら断る理由なんてなく、それまでは忠夫君も僕に懐いてくれてる事から、近所のお兄さんよろしく勉強を教える事になった。

つまりは、週一回忠夫君は力に触れる機会を得た事になる。

正直かなり難航すると思っていた横島家への接触が上手く行き過ぎ、驚いてしまった。

知らないものを進める訳には行かない。
そこで、現状コネと協力関係を作る為に、唐巣神父の協会、唐巣(そのま)協会(まだな)に行く事にした。

場所ははっきりしており、横島家から小一時間程度でたどり着いた。

「しかし、流石ですね。原作十年前と言えば、まだゴーストスイーパー等社会に浸透はしていなかった筈。
それなのに、彼は付近の住民からその存在が好意的に受け入れられているなんて」
「それこそが唐巣神父の神父たる所以だよね」

現地で下手に警戒させたら拙いと思い、ハルピュイアを僕の中に戻す。

「さて、こちらもファーストインプレッションは気をつけないとな。まずはなんて声をかけようかな？」

等と考えながらその門を開いた。

「汝、悪魔ウコバク！！　その者を解放せよ！！　ーー！！　この力は！？　くっ、しまった！！」

ドアを開けてすぐ、その場に漂う神聖力とぶつかり合う魔力を感じて、取り込み中かな、と一寸だけ覗いてみた。

「ファッニャァ―！」

「おわっ！　なんだ、お前！？」

「いかん！　君！　ドアを閉めるんだ！」

目に飛び込んで来たのは、何やらフォークのような物を手にした魔族が迫ってくる姿だった。

「邪魔だよ！　僕は唐巣神父に会いに来たんだから！」

「フギャン！」

フォークの突きより早く、なにやら突っかかってきた何か張り倒す。

そして、地面に倒れたそれを踏みつけて、持っていたフォークのような物を奪うとそれを串刺しにした。

「ジ、ジブンノ……ホニャァ―――！！！」

「あれ？　消えた？　今のは……ウコバク？　魔族……堕天使か？」

レベルも低い悪魔だし、それよりも中にいる筈の唐巣神父は……と？

奪ったフォークを持ったまま、何だか呆気にとられている一人の神父に向かって声をかける。

「あの、いります？」

なんだか、見えない所でハルピュイアの溜め息が聞こえた気がした。

「君は……何者だ？」

バリバリ警戒されてる。

なんか、失敗したっぽい？

「あの、僕はですね」

「待て！　それ以上こちらに近付かないもらおうか」

神父はウコバクに憑かれていたと思しき横になっている女性の前に立つ。

うーん。なんとか警戒を解く方法は……そうだ！　僕がクロウを召喚してみせれば、その竜気から小竜姫様の関係者ってわかるかな？

「わかりました。では、これを見て下さい……発動、召喚、クロウ！」

「なっ！？　召喚術だって――！！」

喚び出されたクロウを見て、表情を固くする唐巣神父。

「その鴉の持つ力……どれだけのものかわからないし、私には荷が重いとは思うが、私は決して魔族に組する事はない！　草よ木よ花よ虫よ――我が友なる精霊達よ――」

「ええ！？　なんでこうなるの！？」

クロウが唐巣神父の敵意を受けて、勝手に戦闘体制に入る。

「邪を砕く力をわけ与えたまえ……！！」
「クアア！」
「おい、クロウ！　神父も、落ち着いて……」
訳がわからない。
なんでこんな所で唐巣対クロウのカラス対決なんか見なきゃいけないんだ？
「汝の呪われた魂に救いあれ！！　アーメン！！」
「クアア！！」
唐巣神父の霊気弾とクロウの羽ばたきから発せられる真空刃がぶつかり合う。
いやいやクロウ。そんなの当たったら、唐巣神父死んじゃうから……。
「少し見ていたらいいんじゃないですか？」
「ハルピュイア？　勝手に出て来たのか？　好き勝手だな、もう……。で？　どういう事？」
「勝手に始めた二人が悪いんですから。
それに人界最強の一角である、唐巣和宏の実力を把握するいい機会です」
なんか、考え方が邪悪だなぁ。
勝手に出て来たハルピュイアは、エコバクに憑かれていた女性を介抱しながら、我関せずを貫くよう進言してくる。

「……僕も止めたし、ま、いいか」
「クアア！」
「命ずる（フィアト）」
クロウのガルを抑止の言葉で無効化しながら、均衡した戦闘を繰り広げる両者。
それを見ながら、勝手にだけどお茶の準備を始めた。

「君は……強いですね」
「クアア」
破壊し尽くされた自らの協会で仰向けに倒れ込む唐巣神父。
隣で同じような姿勢で倒れ（撃墜され）ているクアア……じゃないクロウ。
「なんか……友情でも目覚めたのか？」
「好きそうですしね。青春漫画とか」
あー。そうだなぁ。唐巣神父、古いアニメとか漫画好きそうだしなぁ。

「じゃあ、もういいかな？」
「ええ、唐巣和宏にも、もう余力はないでしょうし……マスターの好きなようにすれば宜しいかと」
本当にこの召喚獣は……属性カオスなんじゃないか？
まあ僕と契約を交わせる存在は、ロウ属性に限定されるんだけどさ。
「あのーー色々と育んでいる所申し訳ありませんが、そろそろ僕も会話に参加してもいいでしょうか？　唐巣和宏神父」
「ーー！？　君は……」
何その反応？
まさか、余りに均衡した実力関係だったから僕とハルピュイアの存在を……。
「……忘れてた？」
「い、いや！　そんな事はない！　彼の召喚主なら、邪悪な存在ではないだろうし……ゴホンッ！　ようこそ、我が唐巣協会に。と、貴女様は！？　神族の方、ですね？」
疲労もピークなんだろう。ゆっくりと立ち上がると、慌てたように僕を見た。
そして、同時に隣で女性を抱き抱えて、部屋に連れ込もうとするハルピュイアに気がついたみたいだ。
「かなり巧妙に存在を隠していたんですが……流石ですね、神父。人界最強の呼び声も間違いじゃないみたいだ。

後、ハルピュイア。連れ込み旅館的な行為は、止めはしないが後にしろ。
今、事に及ぶと、例え両者同意であっても、唐巣協会に迷惑が……っ痛！」
「誰がいかがわしい行為ですか！　私はノーマルです！　……唐巣和宏ですね。私は旋風の精霊ハルピュイア。
マスター、静馬篠宮の召喚獣をしています。
貴方の事は武神小竜姫から伺っています」
「小竜姫様まで関係しているのかい！？　それに彼（クロウ）だけじゃなく、貴女のような存在までが彼と契約を？
貴方は一体……ああ、申し訳ない。私は、既に知っていると思うが唐巣。唐巣和宏だ。この協会でしがない神父をしている。
あの、ハルピュイア様。その女性は先程まで、魔族ウコバクに憑かれており精神的にかなりの疲労をしております。
確かに同意の上でなら私も何も言えませんが、現在の状況を見させていただいた結果、体調面の事を考え、今回はご勘弁いただけないでしょうか？」
「だから違うって！　私はこの娘を介抱していただけです！　マスターも何か言ってください！」

何かって言われてもなあ。
唐巣神父に返礼しないと。

「ご丁寧にどうも。僕は、彼女から紹介のあった、クロウ達のマスター、静馬篠宮です。　僕は小竜姫様の弟子をさせてもらってまして、その関係で兄弟子である貴方の所に来させてもらいました」
「マスター、私の誤解を！」
「そうだったのか。小竜姫様の……それは失礼した。
済まないが確認させてもらいたいのだが、小竜姫様の所で学んでいた証明のような物はあるかい？」

証明か……剛練武達を喚べんだり、クロウを竜化させれば証明になるだろうけど、今そこまでの戦力を開示するのは危険だな。

この人の後ろには、六道の一族がいるんだから。

なら……。

「発動、出現、竜鱗の顎……これは証明になりますか？」

「真鍮の手甲かい？　見せてもらってもいいかい？　……

これは見事な……有難う。確かにこれで十分だ。

私が妙神山で見た物と酷似しているし、この純度だ。それに彼の召喚主だ。信じるよ」

クロウお友達効果は凄まじいな。

改めて唐巣神父を見ると、若いな。原作１０年前だとこんなに（主に一部が）違うのか……まさか、美神令子一人が彼のＨＵＳＡＨＵＳＡを奪い去ったのか！？

思わず今は元気な頭の一部分を凝視してしまう。

「ん？　どうしたんだい？」

「いえ……神父。負けないで下さいね」

首を傾げる唐巣神父。

訳わからないよねそりゃ。

「……それで、僕がここに来た理由なんですが、僕、ゴーストスイーパーになりに来たんです！」

これ以上にないシンプルな説明をした筈なのに、唐巣神父は暫く考え込んでしまった。

「……君……馬君」

「ああ、済みません神父。一寸昔を思い出していて……」

呼び声に対して、過去の回想を止めて前に座る唐巣神父を見ると、唐巣神父も僕と初めて会った時の事を思い返したみたいだ。

「あの時は済まなかったね。私の勘違いが誤解を招いてしまった故に……」

「いえ、神父の誠実さと誘惑に組しない姿勢、僕は感動しました。それに僕がこうやって資格なしでも、公式に除霊が出来るように取り計らっていただきました。

逆にどれだけ感謝してもし足りません」

結局、僕は自らの秘密を殆ど明かせない・この世界に戸籍はない、と言ったあやふやな状態だった。

それにも関わらず、自らが先頭にたって僕がこうやってある程度自由に動けるように、ゴーストスイーパー協会にも進言してくれた。

勿論それだけではゴーストスイーパー協会が納得はしないだろうから、その後に小竜姫様からもらった御免状を提示したんだけど。

唐巣神父とは良好な関係を築く事が出来た。

僕は唐巣神父の計らいで、ＧＳのような仕事も出来るようになった。

来年のＧＳ試験で資格を取るのが条件だけど。

公然と忠夫君に関われるし。

後は六道と美神が問題だな。

前途多難だと思い、思わずため息をついた。

第七章、我が儘な淑女と才能と自覚（そのいち）

忠夫君が唐巣教会に通うようになって二週間。

僕は行っている修行を毎日見学している。

まあ僕がＧＳ関連の依頼を受けるのには唐巣神父の付き添いが必要だから、忠夫君の家に行く時以外は常に唐巣教会にいるんだけどね。

二人は初めは全く修行になっていなかった。

流石に五歳児の指導はした事ないだろうしね。

「そのまま集中して……」

「集中って言われてもわからへんよ！」

「じゃあ実際に見せてあげればいいんじゃないですか？」

この一言で、忠夫君はどんどん技術を吸収していった。

元々は美神令子の技術を、殆ど見ただけで覚えていったのだ。

天性の才能を持っている。　それは修行を始めてすぐ、霊力を発現させた事からもわかる。

なんと実際に、初日に霊力を発現させたのだ。

まともに基礎を学んで、きちんとした師事が出来ればここまでの才覚をあらわすんだ……。

今日も唐巣神父の下で修行を受ける忠夫君を見ながら、鳥肌が立つ思いだった。

「兄ちゃん、見てくれたか？　俺、頑張ってるで！」
「ああ、見えてるよ。流石、僕の弟子だ」
「やったぁ！　兄ちゃんに褒められた！　おっちゃん！　次や次！　もっと頑張って兄ちゃんに褒めてもらうんや！」
「おっちゃん……まあ、そうなんだが……いや、忠夫君。今日はもう終わりだ。ほら、この後、静馬君とも遊ぶんだろう？」

未だ頭部にダメージ少ない唐巣神父は、おっちゃん扱いにややダメージを受けたみたいだ。

意欲満々だった忠夫君も、僕と遊ぶ。と言う事で意識が切り替わったのか、僕に飛び込んできた。

「そうや！　忘れてた！　兄ちゃん遊んで遊んで！　遊んでぇな！」
「よしよし、わかったよ。じゃあ、今日は何をしようか？　水遊びは昨日したから、今日は皆で鬼ごっこでもしようか？」
「おお！　ええよ！　俺、足めっちゃ速いねん！　幼稚園じゃ新幹線のタダちゃん言われてるんやで」

今日の遊びは決まった。

「じゃあ、神父。僕は今日はこれで失礼しますね」
「ああ、ご苦労様。それにしても、静馬君はゴーストスイーパーの依頼は殆ど受けないんだね？」
「僕にとっては、忠夫君といる事の方が何万倍も大切ですから。それに、真に苦急に立たされてる方々の依頼があるなら受けるんです

が……そう言った方が来るにはゴーストスイーパーと言う存在は、まだまだ知名度が低いと思います」
「ふむ……確かにその通りだね。
私もなんとかしたいとは思うのだが……なかなかね。
静馬君のような若い人間にも期待しているよ。
言っては悪いが、先人達は古いものが多くてね。
……じゃあ、また明日だね。忠夫君もゆっくりと休むといい」

いいのか？　そんな事言って？

まあ、唐巣神父にしたら意外だったんだろうな。

小竜姫様のいる妙神山から降りてきた特異点。
しかも、その特異点は、一人の子供にご執心でゴーストスイーパーになりたいのに、その為の適性を計る為の依頼は殆ど受けない。

客観的に考えて、怪しいな、僕。
まあ、でも、唐巣神父はクロウとの友達補正が効いてるから大丈夫だろう。
有り得ないくらい人もいいし。

僕は忠夫君を肩車すると、自分の家に向かった。

自宅についた僕は、妙神山行きのゲートを起動させる。

これは僕が人界に降りて、ゴーストスイーパー協会への証明をお願いする為に、剛練武を通じて小竜姫様に連絡した時に話である。

「し、篠宮さん！　あ、あのですね、こうやって、また、私にお手伝い出来る事があった時に、剛練武を介しての連絡だけでは、不測の事態に対処出来ない可能性があります」

「……はぁ」

「なので、よければ妙神山とゲートを繋げさせてもらえませんか？」

「いや、そこまでお世話になる訳には……」

「構いません！　篠宮さんは私の……えっと……そう！　愛弟子なんですから！」

こんなにいい師匠の好意によって、

自宅→妙神山

のゲートが作られたのだ。

で、基本的に何の為に使っているかと言うと……。

「じゃあ、時間無制限一本勝負……始め！　皆、逃げろ！」

「よっしゃ！　まてまてまてー！」

「タダオ。私を捕まえられたら、小竜姫さん秘蔵の豆饅頭を差し上げましょう」

「まじで！　よぉし！　目標ハルちゃん！　全速力！」

「一寸……ハルピュイアさん！　なんで私の……って、もう！」

「ほら、小竜姫さんも逃げないと捕まっちゃいますよ。五歳の子供には捕まれないでしょう？」

と、言うように忠夫君の遊び場（妙神山）への移動手段と化していた。

召喚獣を出して遊ぶとなると、なかなか場所がない訳で。

一番のネックだった百合子さん達も、初めは驚いていたがすぐに順応して、自分達付き添いならＯＫと有り難い返事をもらっている。

むしろここ（妙神山）で遊ぶ（修行をする）ようになってから、より加速度的に成長する忠夫君に、末恐ろしいものを感じていた。

折角妙神山でやってるんだから、色々と制限をつけた。

一つ、霊力（マイト）を発動させないと、相手に触れない。

一つ、忠夫君は必ず鬼から始まる。

一つ、当然だけど僕達は手を出さない。（忠夫君は好きに攻勢に出ていい）

一つ、妙神山（遊ぶ範囲内を、霊圧で包んで体に負担をかける。並の小竜姫様の修行より全然キツい条件なんだけど、忠夫君は全く問題なく、初回から僕、小竜姫様、ハルピュイア、クロウ以外の三人（ミリア、剛練武、禍刀羅守）を捕まえてみせた。

「くそぉ、ハルちゃん空飛んだらあかんやん！　俺飛べへんし！

しゃーない、まんじゅう食べたいけど後回しや！」

最近霊力を体にまとわせる事を覚えた忠夫君は、足に力を集中させて通常の三倍近い加速を行う。

「見える！　私にも敵が見えるぞ！　岩ちゃんーー捕まえたぁ！」

周囲の岩場に紛れて同化していた剛練武をなんなく見つけると、タッチして道を折り返す。

やはり敏捷性に難がある剛練武はすぐに捕獲されるか。

「クケェ！？」

「剣ちゃん！　もらったでぇ！」

四つ脚で岩場をぴょんぴょんと飛び回る禍刀羅守。

同じ道をより早いペースで駆け上がる。

「クケェ！！」

「逃がさん！　剣ちゃん捕まえたぁ！」

岩場の頂点から、地に向かって跳躍する。

昔ならこんな高い場所からの移動はヒヤヒヤしたのだが、今ではどんな高い場所でも低い場所でも何でもござれだ。

追随して飛んだ忠夫君は、やはりより早い速度で禍刀羅守に追いつくと、その顔面を踏みつけた。

バランスを崩して墜落する禍刀羅守。
逆に忠夫君は、四回転半でもしそうな位の姿勢制御で着地する。
そして休む事なく、次の相手に向かっていった。

「あれはむしろ新幹線より速いのでは？」
「そうだねぇ。ミリア、大変そうだな。あ、捕まった。なんだか、早い段階で人外認定されてきたね」
「横島くん……本当に凄いですね。篠宮さんがここに連れてこなかったら、大変な事になったかもしれないですね」
純然とした自力の差で負けたんだから　、狼の沽券に関わるよね。
まあ、意思のないコピーみたいな存在だからまだ良かったけど……。
初めの頃の剛練武達のアフターケアは大変だったしね。

「ここまではいつも行けるんだよな。後は……よし！　いくで！！」
毎回毎回負けている為、気合いを一新して僕に向かってくる忠夫君。
「さあ、今回はどうでる？　忠夫君……見せてもらおうか？　君の

力を」
「よっしゃ、兄ちゃん！　見ててやぁ！」
急にしゃがみ込むと、膝をバネのようにして飛び込んできた。
「必殺、ウルトラの術や！！　食らえええええ！」
「ああ、なる程。変身シーンね……でも、それじゃあ……」
真っ直ぐ飛んできた為、普通に横に避ける。
「あーー！！　兄ちゃん、避けたらいかん！！」
そして、そのまま地面にダイブする。
「痛たた……そっか、ジャンプしたら向きが変われへんのか……じゃあ」
「ん？　今度はどうする？」
「簡単やん、こうやぁ！！」
また向かってきた忠夫君は、僕の近くに来ると両手を横に伸ばして、回転を始めた。
「必殺その2、忠夫竜巻やぁあああ！」
「おーー考えたなぁ」
今度はガンダムシュピーゲルのシュトゥルム・ウント・ドランングの態勢で来た忠夫君。
僕は大きく離れての回避はしないので、なかなか効果的だろう……。

「うえぇ……目が回る……」

それが無ければね。

「もう駄目やぁ……バタン」

「駄目みたいですね……篠宮さん？」

「そうだね、じゃあ、皆、今日はここまでにしよう」

忠夫君のグロッキーを最後に、今日の訓練（鬼ごっこ）は終わった。

「また来てくれますよね？　私、何時までも待ってますから……」

「小竜姫様、大袈裟ですよ。また明日も来ますから、ね？」

「マスター、ここまで言われてまだわからないんですか？」

自分の弟子が将来有望な人物を連れてきたんだ。

毎日加速度的に成長する忠夫君を見るのが楽しみなんだろう。

「小竜姫さん……頑張って下さいね」

「はい、有難うございます。ハルピュイアさん」

何だろうな。二人とも毎日同じ事してるし。

寸劇？

「忠夫、お父さんみたいなのも駄目だけど、静馬さんみたいにもなっちゃ駄目よ」
「なんでや？　兄ちゃん格好いいやん？」
「あれは女の敵よ。むしろお父さんよりも質が悪いわ」
お茶を飲んで、比較的元気になった忠夫君。
その手を引いている百合子さんにも駄目な人扱いされながら、最早それが日常になりつつあるのが悲しかった。

「毎日有難うね」
「兄ちゃんまた明日な！」

自宅まで二人を無事送り届けてから、我が家に向かっての帰り道。

「基礎ってやはり大事なんだなぁ」
「既にＧＳ試験の時より自力があると思いますよ」
「凄いよね。時期や基礎を基本通り学んだ横島忠夫は、原作最強のキャラになり得るね」

まだ、出会ってから二週間一寸しか立ってないのにこんなに成長してる。

やはり僕がキーになっていると思う。

でも僕がついてる事で、忠夫君の能力体系に変化が起こらないだろうか？

文殊が使えないと、いくら自力を高めても恐怖公には通用しない。

方向性を誤らないようにしないとな。

そんな事を考えていた時だった。

僕等を包囲する複数の気配を感じたのは……。

第七章、我が儘な淑女と才能と自覚（そのに）

忠夫君の家の帰り道。
ショートカットの為に公園に入った。
そこまではよかった。

それ自体はいつもの事で、イレギュラーだったのは、公園全体を包むように何者かが包囲していた事だろうか。

「殺気はありませんね。マスター、如何なさいますか？」
「うーん。襲ってくる様子もないしね。一寸待ってみようか」

誰だかは知らないけど、わざわざ法治国家の日本でなんの用事なんだか？

暫く近くにあったベンチに座って待つと、一つの気配が近付いてきた。

「なんでバレてるんだろう？　あの時は、ちゃんと英霊エミヤの格好になって仮面までしたのに……」
「マスターはアホでいらっしゃいますか？　あんな奇行でごまかせるのは中世ファンタジーの世界までですよ」

本気か……ショック。

まあ、それはそれとして……。

「……どうやら多少は僕の言葉が効果があったかな？」
「どうでしょうね？　失礼ですが、マスターの言葉を聞き入れるよ

うな、度量のある人間には見えませんが……」
「久しぶり……と言えばいいのかしら？　いつぞやはありがとね」
「貴女も元気そうで何より……ですね」
姿をあらわしたのは栗色の髪の女性。
カンニング（時間移動）の天才、美神美智恵だった。

「さて、僕は今、六道財閥の本宅に連行された訳だが……」
「マスター、誰に言ってるんですか？」
権力者はなんで人を使ってばかりなんだろうな？
唐巣や美神と言った実力派を抱える一大勢力、六道グループ。
十二神将を式とした陰陽師の家系。
現存する力ある旧家……などなど言葉にすればきりがないが、何はともあれゴーストスイーパーを目指すなら、一度は聞くであろうビッグネーム。
その六道家の当主、六道冥那のいる部屋に僕等はいた。
部屋の中には六道冥那と美神美智恵。
壁の向こうには四人、廊下に三人……マイトを感じない事からも、霊能力者じゃない。

私設の武装集団か……。

ただの二人に随分警戒してるんだな。

「あの～急なお誘いごめんなさいね～静馬篠宮君～」

「僕等だけの所を狙ってくれた事を感謝すべきですかね？　六道当主」

ごめんもくそもない話なんだが、よくも悪くも権力者だなぁ。

ハルピュイアは会話は僕に任せるようで、なんだかぼーっとしている。

「あらあら～美智恵ちゃんそんな乱暴したの～駄目よおいたは～彼は私のお客様なんだから～」

「はい、申し訳ありません」

指示しておいてよく言う。

美神美智恵が、わざわざそんな非効率な事をする訳ないだろう。

「それで～今回来てもらったのは～」

「僕が誰だかわからないから……ですよね？」

「あらら～わかってたの～？　おばさん意外～」

そもそも存在していた人間じゃないんだから、戸籍や妙神山前の記録や情報なんて出て来る訳ないし……小竜姫様のお墨付きがあっても、充分不審だろう。

事前に小竜姫様と打ち合わせしておいた、僕の出生に関しても話しておく。

「僕は捨て子でして……物心ついた時から、妙神山で暮らしていました。確かゴーストスイーパー協会に提出した書類にも記入させてもらいましたが？」
「おかしいわね～。私の所に書類が来てないのよねぇ～唐巣君からは聞いたんだけど～じゃあおばさんが手続きしておくわぁ」

そんな訳ないだろう。
妙神山出身扱いだから、人界の常識に疎いと思ってるのか？

「まあ、人界については色々勉強したから、生活に不自由はしませんが……」
「そうなの～何かあったらおばさんにも言ってね～力になれるかもしれないから～」
変わりにどんな貸しを作られるかわかったものじゃないな。

「さて……含んだ言い回しは止めにしましょうよ。単刀直入に聞きます。僕に何を求めてるんですか？」
「そうね～おばさんは腹のさぐり合い大好きなんだけど～貴方がそう言うなら～やめましょうか～」

いやに素直だな。

美神美智恵も逆に意外そうにしている。
話を聞いてなかったのか？

「実は静馬篠宮君～六道に力を貸してくれないかしら～」
「六道さん！？」
「……それはどういう意味ですか？」

なんだか予想外の展開……。

「実はね～今私達六道グループは一寸困った事になっているの～美智恵ちゃん～」

「は、はい……現在問題になっているのは、ゴーストスイーパーと言う存在の、認知度・信頼度の不足。それに伴う被害者の救援率の低下、被害の拡大・重傷化が大きな懸念事項となっているわ」

「それは六道に所属しろ……と、そう言う訳ですか？」

「そうしてくれると有り難いわね～」

小竜姫様の秘蔵っ子の僕を所有する事により、六道……いや、ゴーストスイーパー協会は世間に干渉しやすくなるだろう。

しかも、先程言った問題。それは唐巣神父も懸念していた事。

でも、原作では自分達でなんとかしていたのだ。

今は、僕という存在を知って我先にと飛びついてきたに過ぎない。

「お話はわかりました……基本的には貴女は信頼出来る。しかし、申し訳ないですが、そのお誘いはお断りさせてもらいます」

「……理由を聞いても～いいかしら～？」

「貴女は特異点たる僕の存在を利用するつもりなんでしょうが、あまりその存在をおおっぴらに確立されると魔族をこの人界に呼び込む事になりかねません。

唐巣神父にも、ゴーストスイーパー協会の皆さんにも、キツく口止めした筈なんですが……」

まあ、かなりキツい口止めをしたからここまでは彼女も把握している筈。

と、言うことは……これは彼女の本題じゃない。

「静馬君は～私が貴方を利用すると～思うの～？」
「思いますよ」

「失礼な！　……幾ら貴方が小竜姫様の関係者であっても、言っていい事と「いいのよ～」……六道さん」
「なんでそう思うか～聞いても～いいかしら～」
「貴女が実力者だからです」

原作キャラでもあるしね。

「能力があって、権力もある。しかも権謀術数に長けている。更にはあの十二神将を行使可能……そんな力ある存在ならば、僕に対して取る手は二つ。徹底的に傍観を貫くか、徹底的に干渉して我が手にするかだ」
「そうなの～ありがとう～褒めてくれて～どうしてもダメかしら～？」

結局彼女達も原作キャラなんだよな。
極端にテコ入れしなければ問題ないかな？

「……条件が三つあります」
「うん～何かしら～」
「協力はするけど六道には所属しない。
神族、及びその関連種族は、これに一切関与しない。
僕、及び僕の周辺の身内や仲間に対して、害意ある行動を取らない事
この三つを了承、了解する事です」

これならば、六道は僕個人のみを協力の対象にしなければならない。

「まあ、マスターにしては妥当な条件ですね」
「……」
「そんなの全然いいわよ～。でも、変わりに私からも～条件を出していいかしら～」
「僕に出来る事ならば……」
「それはね～静馬君が～余所の組織の依頼を個人では受けない事よ～」

それだけ？

もっと大変な事だと思った。

六道関連は可なら、ゴーストスイーパー関係はＯＫの筈。
神族関係も、六道に制止出来る範囲のものではない。
では……やはり陰陽寮の事がネックか。

「いいですよ。ただし、勘違いはしないで下さいね。僕は六道ではありません。人命や緊急性を優先して動かせてもらいますから」
「静馬篠宮！　いい加減に！！」

栗色の人が何か言ってるけど、そっちこそいい加減にしてほしい。

僕は六道じゃないって、何度も言ってるのに……。

外部の傭兵が依頼を選ぶのは当然だろうに。

「……美智恵ちゃん～！　わかったわ～。それで～早速お願いが～あるんだけど～」

早速かい！？

まあ大体予想はつくんだけど……。

納得がいかない！　とばかりにこちらに厳しい視線を向ける美神美智恵を見ながら、心の中で溜め息をついた。

ここは六道家の広々とした庭。

そこには僕とハルピュイア、六道冥那に美神美智恵がいる。

先程となんら変わりない。

六道冥那とハルピュイアが脇にいて、僕と美神美智恵が共に神通棍を構えていなければ。

「マスター、頑張って下さいね」

「美智恵ちゃん～しっかりね～」

完全に観客モードだな。

「私は貴方を認めない……」

「こっちは敵意満々だし」

元々僕はサマナー（召喚士）なのになぁ……。

まあ、美神美智恵……ひいては六道に組する全ての存在に、僕の力を示すいい機会かな？

彼女も唐巣神父同様、人界最強の一角だから。

「じゃあ～行くわよ～。神通棍を使用した～時間無制限一本勝負～始め！」

そして六道冥那からの最後の条件、僕の力を示す。が始まった。

「先手必勝！　行くわよ！」

流派等はないだろうが、可憐な太刀筋で流れるように神通棍を振るってくる美神美智恵。

受け止めると足を飛ばし、回避すると隙なく連撃を繰り出してくる。

超攻撃型姿勢で、更に完成されている。

「流石は人界最強の一角」

「私の神通棍を全て封殺しながら何を……自慢なの！？」

皮肉っぽいなぁ。

誉めてるのに……。

「防御ばかりで精一杯なのかしら？　その程度では、やはり私は認

められないわよ！」
「……そうか。じゃあ、行くよ。発動、脚技、双竜脚！」
振るわれる神通棍にぶつかり合うように蹴り上げを行う。
そして、神通棍を弾き二撃目で美神美智恵を襲う。
「なっ！？　まだ！」
反射的にブロックするが、そこは隙だらけだ。
「発動、剣技、レッドロータス」
「炎！？　くっ！　この！」
直撃はした。しかし、苦痛に顔を歪めながらもダメージは高くなかったみたいだ。
魔防が高いのかな？
恐らく体を霊力で包んで、ダメージを軽減したんだろうが……。
仕留められなかった事に驚きながら、苦し紛れに叩きつけてきた神通棍から距離をとる。
「今の一撃で、ここまでなんて……」
「いや、僕は決まると思ってたし……大したものだね」
獲物が神通棍だったって言うのもあるけど、その間も対処出来るなんて流石は美神美智恵だな。
「美智恵ちゃんが子供扱いなんて～しかも発火能力者なの？」

「マスターを貴女の常識では捉えない事です。うちのマスターは最強です」

何を言ってるんだ、あの鳥は……。

「長期戦は無理……実力も才能も負けている。でも、美神家の女はこんな最後まで諦めないわ」

「なんか、僕悪者じゃない？」

神通棍での打ち合いを続けながら、僅かに美神美智恵の剣筋がブレる。

来るか？

ほんの少しだけガードを下げる。

普段なら引っかかる事のないフェイクだが、一撃を狙う彼女には充分だったみたいだ。

「好機！　受けなさい、はあああ！！」

多分残る全霊力を神通棍に込めて、打ち付けてくる。

しかしニヤリと笑った僕は、そのまま幻影を残して姿を消す。

「――なっ！？」

「……残像だ」

瞬間を見計らって背後に回り込んだ僕は、無防備な美神美智恵に必殺の一撃を与える。

「発動、剣技、シャインブレード！」
「きゃっ！　くぅうう……」
光の粒子をまとったような属性剣撃を受けて、流石にここまでの耐久性はなかったのか、吹き飛ばされて倒れ込む美神美智恵。
「きまりね～勝者～静馬君～」
「まさか、ここまで手を抜かれて負けるなんて……修行がたりないのかしらね？」
「マスターは別格どすから。むしろ比べる事自体がおこがましいですよ、美神美智恵」
「あの……皆？」
勝負が終わった途端に、何事もなかったかのように起き上がる美神美智恵。
三人で僕がいないかのように話始める。
「しかし、流石は人界最強の一角。マスターの剣技を受けてもダメージを最小に抑え、なおかつ立ち向かえるなんて」
「人界最強？　私が？　まさか！？　私なんかより腕の立つ人間は山ほどいるでしょう？」
「そんな事ないわよ～美智恵ちゃんは～充分～最強よ～」
「貴女もですよ……六道冥那」
「もしもーし」
僕……立場ないよね。
「所で、貴女は誰なの？」
「私ですか？」

「確か私が会った時は貴女はいなかったわよね？」
「いえ、美神美智恵。私は貴女と出会ってますよ。わかりませんか？」
「え？　ええと……」
「神族の～ハルピュイア様～ですよね」
「ハルピュイアって……そんな！？　じゃあ、あの時のハーピー！？　まさか本当に転化してたなんて……」
「流石、マイマスター。です。ね？」

いや、ね？　とか言われても……。

「静馬篠宮さん。すみません、貴方を試すような真似をさせてもらいました」

あの、無駄に高い敵愾心の事を言ってるのかな？

「はあ……」
「しかし、流石は小竜姫様の愛弟子。ハーピーやウコバクを一蹴した実力、私等では並ぶべくもなかったようです」
「さらりと痛い所を突いてきます」

じゃあ、屋敷内での会話は大体が想定されたシナリオ通りだったんだ……。

すっかりやられたな。流石は女帝二人だ。

確かに予定の通りだろうしね。僕が協力関係になったんだから。

「ハルピュイアは……」
「当然気づいてましたが？　マスターは人の機微に疎いですからね」

なんかショック。

「それにしても静馬さん。本当に召喚士ですか？　自力が高すぎると思いますが……」

「僕は後付けの術者ですから……マイトも殆どなかったし……」

元々二人とも礼儀はしっかりしてるんだけど、なんか二人に敬語で接せられると違和感があるな。

「なんかむずかゆいんだよなぁ。美神美智恵さんも六道冥那さんも、敬語とか止めてくれないかな？」

「ふふ……わかったわ。じゃあよろしくね、静馬君」

「私も～よろしくね～静馬君～」

まあ、一応これでめでたしめでたしなのかな？

「でも～美智恵ちゃん～随分熱くなってたわね～本気も本気だったじゃない～」

「なっ！　六道さん、それは……」

……めでたしめでたしなの？

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのさん）

※登場キャラクター、マイト表示

静馬篠宮
２５００マイト

（召喚獣はエインヘリヤル時数値が２倍）

クロウ
３２０マイト

ミリア
８０マイト

ハルピュイア
７８０マイト
ハーピー時
１２２マイト

剛練武
６５マイト

禍刀羅守
５８マイト

横島忠夫（幼年期）
１５マイト

唐巣和宏
７１マイト

美神美智恵
８７マイト

六道冥那
１５３マイト

小竜姫
１５００マイト

竜化時
３０００マイト

魔人皇ヨコシマ
４５００００００マイト

横島百合子
７マイト

横島大樹
１３マイト

犬塚
８５マイト

天狗
１００マイト

ウコバク
４８マイト

※スキルの威力は、魔力及び各種ステータスにより変動する為、基礎値のみ表示する事とする。主人公及び仲魔ステータス一覧

シズマ＝ラインズ
（静馬篠宮）

レベル９９

ＨＰ　７８４
ＭＰ　１２３０

力３５
魔４７
体３１
速５０
運２３

固有スキル

エインヘリアル
〔マスターが契約する全ての仲魔のレベルを熟練度、スキルダメージを×２アップさせる。及び、このスキルを持つマスターの召喚獣は常時レベルが＋１０される〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔竜属性、竜族の証、竜珠。効率的に魔力及び気術を返還する。返還効率１対１００。※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔風・竜属性。自身及び周囲の全属性ダメージを３００吸収する。他者、範囲を拡大するとその吸収率はダウンする
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ〕

竜の殺息
（ドラゴンブレス）
〔光・竜属性。対象に威力３５０の後に追加１３０×１～５０の魔力ダメージを与える。※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時、召喚獣クロウ現界時のみ〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔竜属性。竜炉心に込められた竜の力を解放する。
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ、対象は召喚獣クロウ（鴉）のみ〕

格闘術
（気孔弾、コンボ、タックル、短勁、バックハンドブロー、乱撃、スピンアタック、空鳴拳、双竜脚、夢想阿修羅拳、ファイナルヘヴン）

剣術
（ファストブレード、レッドロータス、シャインブレード、フラットブレード）

託された友愛の剣
（吉備津天地刀）
〔光属性。対象に威力２００の魔力ダメージを与える〕

光射す竜の咆哮
（竜鱗の顎）
〔光・竜属性、対象に威力６０の気力ダメージを与える。※使用制限、竜炉心発動時のみ〕

魔術

召喚術

契約召喚獣
・クロウ（鴉）
・ミリア（ハウンドウルフ）
・ハルピュイア（旋風の精霊）
・剛練武（幻獣）

・禍刀羅守（幻獣）

投影魔術

固有結界
「力無き弱者の歌」〔現実を浸食する心象世界を具現化させる〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔光属性。威力１～１２０の魔力ダメージを与える。魔力で創造した銃。スキルや魔術を込める事が可能。※使用制限、召喚獣ミリア媒体時のみ使用可能〕

気術

天術
〔気術と魔術を融合させた無の力。　全ての天術は、シズマ＝ラインズが使用した場合に限り威力が＋３０される〕

柔剛相交
（　ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン　）
〔無属性。天術。威力４００の無属性ダメージを与える。このスキルは対象の如何なる防御スキルを無効化する。
※使用制限、早風、創造時のみ〕

早風
〔無属性。天術。天術により創り出した無の刀。　威力２の無属性ダメージを与える〕

ヒヒイロカネ
〔無属性。天術。格闘状態の際に、基礎ダメージが１、５倍される（このダメージは如何なる軽減・無効も無効化させる）〕

神の見えざる目
（神眼）
〔光属性、鑑定・未鑑定状態に問わず、全ての対象の情報を得る事

が可能。生物・無機物すら問わない。しかし、自身、もしくはそれに類するものは該当しない〕

真・超電磁砲
（ハイレールガン）
〔電撃属性。威力１２０の念動ダメージを与える〕

影分身の術
〔疾風属性。自身及び自身の所有する武具を複数複製する。※分身体の耐久度は１、威力は３０％となる〕

使用不可スキル
カリバーン
王の財宝
超電磁砲
空想具現化
壊れた幻想
一部投影魔術

召喚獣

クロウ
（鴉）

レベル４６
ＨＰ３３１

ＭＰ１０８
力２２
魔２１
体１８
速４５
運１３

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

電磁砲
〔電撃属性。威力１５の念動ダメージを与える〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔上記同様〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔上記同様〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔上記同様〕

ミリア
（ハウンドウルフ）

レベル１８

ＨＰ１１０
ＭＰ５１

力９
魔１２
体１１
速１４
運１０

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

体当たり
〔無属性。威力７の物理ダメージを込与える〕

ブフ
〔氷結属性。威力５の魔力ダメージ＋一定確率で氷結効果を与える〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）

〔上記同様〕

ハルピュイア
（旋風の精霊）

レベル２９

ＨＰ１８１
ＭＰ１３２

力９
魔２１
体８
速３０
運１６

固有スキル

フェザーブレッド
〔疾風属性。威力３５のダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

ガル
〔疾風属性。威力５の魔力ダメージを与える〕

マハガル

〔疾風属性。範囲に威力５のダメージを与える〕

ザン

〔衝撃属性。威力５の魔力ダメージを与える〕

剛練武

（幻獣）

レベル１１

ＨＰ３５０

ＭＰ１５

力１７

魔４

体２０

速３

運８

固有スキル

媒体選択

〔召喚時に媒体（近くにある元素）により素体・スキルに変化がある〕

再生能力（弱）

〔神界・人界で一定時間経過毎に少量のＨＰが回復する〕

再生能力（中）

〔妙神山で一定時間経過毎に中量のＨＰが回復する〕

禍刀羅守
（幻獣）

レベル１１

ＨＰ２１４
ＭＰ１８

力１３
魔６
体１５
速１８
運４

固有スキル

形態変化
〔動く刀（リビングソード）・通常形態に変化可能〕

串刺し
〔無属性。威力６の物理ダメージを与える〕

第八章、壮大な出来レースの始まり（前書き）

短いながらも、連続投稿。

次回からは原作沿いでいきたいと思います。

今までは、完全オリ小説だったしなぁ

第八章、壮大な出来レースの始まり

僕が人界に降りてきて、横島忠夫と接触を取り、六道と美神とも接点を得た。

忠夫君との関係も良好で、彼も別世界では学べなかった基礎を習得していってる事からも、五歳にして既にかなりの力を得ている。

正に順調……なのに、何故……。

「何故こんな事に……」

「まあ、座りたまえよ……お茶かね？　それともビールでも飲むかね？」

ここは異空間、何故かある見た事もない屋敷で、スーツを着た大男が僕に飲み物を進めてくる。

とりあえず即座に害はないと判断して、コーヒーをお願いする。

「それで、貴方を僕はなんて呼べばいいんですか？　恐怖公よ」

「やはり私を知っているか……そうだな、私は人界では芦優太郎と名乗っている。それで頼むよ、イレギュラー君」

どうやら彼も僕の存在を知っているらしい。

ならば彼は原作にある、魂の牢獄に捕らわれたアシュタロスじゃないと言う事だ。

「そうですか、では芦さん。貴方は何時の存在ですか？」

「はい、コーヒーだ。ブラック派とは中々に渋いな。恐らく、君達の言う原作後のアシュタロスだ」

そこからはアシュタロス……芦優太郎の現在までの在り方を聞いた。

横島によって敗北し、最高指導者達に許しをもらっても、それで迅速に魂の牢獄から解放された訳じゃないらしい。

それ程までに彼は強大な存在なのだ。

分かり易く言うと、市役所に申請はしたけど、受理されるまではまだ月単位でかかります。みたいな感じらしい。

つまり、まだ暫くは世界を繰り返す筈だったとの事。

「恩人、横島に救ってもらったのに忌々しい事にな……」

「では、今はそうではない？」

「ああ、皮肉な事に、これも横島のお陰でな……」

そこで起こったのが横島忠夫の魔族化……魔人皇ヨコシマの誕生である。

「偶然なのか、私に幾ばくかの憐れみを感じてくれたのかはわからないが、彼が全ての役割を無きものにしてくれた」

それで彼は魂の牢獄から解放された。

ならば何故彼はここにいる？

「そして私はここにいる……何故だと思う？」

「僕もそこを考えたんですが……わからない。日常を堪能する為に、ただの人間の暮らしをしているならわかる。芦さんの願いは日常の謳歌もあったんだから……しかし、この異空間で隠れるようにしている理由がわからない」

不思議そうにしている僕に、笑って見せる芦優太郎。

この憑き物の落ちたような笑い方、確かに彼は既に魂の牢獄にはいない。

それを見て聞いた上での認識ではなく、実感として悟った。

「恩人、横島忠夫を救う為だ」

「それだけの為に、あれだけ嫌っていた世界の繰り返しを行ったと言うのですか？」

「それだけ、とは……君は私達魔族をただの外道の集まりだとでも思っているのかい？」

心外だ、とばかりに首を振る芦優太郎。

様になってるなぁ。

「私達は確かに魔族だが、受けた恩を無かった事にするような、なんでもかんでも無法を通すような存在ではない」

「そうですね、失礼しました」

「いや、構わないよ。私達の価値観は中々他の種族には理解されないからな。それにそれが人界……いや、君の知る世界での魔族の基礎知識なんだろう」

そこが問題なんだ。そう、魔族随一の科学者でもある芦優太郎が言う。

「私は大恩を受けたが、横島忠夫本人や彼の周囲の存在に取っては本意所か最悪の未来だろう。
私はそれを回避しようと何回か歴史を繰り返してみた。
しかし結果は……横島忠夫は志半ばでの死か、魔人皇への未来しかない。しかも、そこには君はいなかった」

観測された未来・過去。

その何処にもいなかった僕が現れた。
そこに彼が一抹の未来を願った。そう言う事だろう。

しかし魔人皇ヨコシマの見た未来と、彼の見た未来が全く違う。

どういう事だ？

「芦さん。僕はもっと前に、魔人皇ヨコシマにも会った。でもそこで聞いて、見た未来と、貴方の語る未来は全く違う……」
「そうか。だが、それがどうした？　私はそんな未来は知らない。つまり、私にとっては君という存在は、ゼロから始まる希望だ」
「芦さん……」

魔人皇の言葉でなく、自分を信じろ。
芦……いや、アシュタロスは、言外にそう意味を込めて言っていた。

それは、僕に希望を与えてくれる言葉だった。

「わかってくれたみたいだね……私と協力しよう」
「ああ、わかった。僕はそもそもその為に僕はここに来たんだから」

ここに新しい契約は交わされた。
僕は今回最大の力と協力する事になった。

「僕は横島忠夫と共に歴史を歩む」
「私は一応この世界の人間だ。世界の流れに沿って恐怖公アシュタロスを演じなくてはならない。　それにパラドックスを起こりうる歴史を変える事は出来ないが、他の魔族等の牽制程度は可能だ。
何せ私が筆頭で人界に攻めいろうとしているのだから……」

二人とも考える事は一つだ。

「「全ては横島忠夫の為に」」

「あ、そうそう、君をここに呼んだ関係で、実空間では１０年程時間が流れていると思うが気にしないでくれ」

いやいや、気にするよ！　原作開始じゃん！！

第九章、美神除霊事務所出動せよ（そのぜろ）（前書き）

やっと、本編突入です。
お待たせしました。

第九章、美神除霊事務所出動せよ（そのぜろ）

ｓｉｄｅ　横島

「君はそこの所有者に多大な迷惑をかけている！　抵抗を止めて成仏したまえ！」

俺は廃工場に向かって、車のドアから身を隠すように中にいるあれに声をかける。

その声を受けるように、二階の全ての窓が割れて白い影が浮かぶ。

「ここはオレの工場だー！　再開発等許さん！　失せろ！」

外の人間に集中していた白い影は、背後からの彼女の取ったであろうアクションに反応したようで振り返る。

その後は建物の中は静寂に包まれた。

そして今回の除霊は終わった。

彼女は美神令子……美神除霊事務所所長。

この仕事……ゴーストスイーパー業界ではトップクラスの実力の持ち主である。

今の世界、地価高騰で地縛霊の掃除は超ボロい商売となった。
もはやこの日本に、幽霊を住まわせる土地などないのだ。
私の名は横島忠夫。この事務所でアシスタントのバイトをしている。

理由は勿論、何時か会えるであろう、１０年前に急に消えてしまった師匠（兄ちゃん）に会えるかもしれないからだ。

その為、俺とは別に師匠と接点のあった唐巣神父、お母さんが付き合いのあったらしい美神さんといつも一緒にいた。
自慢ではないが、力量的には美神さんとも差はないと思う。
しかし、師匠を探す為のみで、この独立した美神さんに付いて来た為、無理を言ってアルバイトと言う形にしてもらっている。

美神さんはどっちでもいいって言ってくれたんだけど……。

「ふーっ。あーさっぱりした。横島君、ビール持ってきてくれる？」
「またですか？　お昼からのアンコールは止めた方がいいですよ……はぁ」

まあ、言っても聞く人じゃないしな。

俺は冷蔵庫から一本５００円以上はするであろう高級地ビールを取り出して渡す。

「ぷはぁ！　やっぱりボロ儲けの後は気分いいわね」
「相変わらずお金大好きですね……」

「だって、半日で一億よ。やっぱり大企業は払いが違うわね」
変わらぬ守銭奴っぷりに、無駄だろうけど一応注意はする。
「そんなに儲けがあるなら、脱税は止めましょうよ」
「嫌よ！　私が貰えるお金が減っちゃうじゃない！」
まあ、知ってるのに何もしない俺も問題なんだろうけど。
独立事務所創立からのメンバーなのに、なんかそこまで美神さんの身を案じる気にならないんだよな。
何でも出来るから、心配までいかないのか？　それとも何か別に理由があるのか……今の俺にはわからないな。

「まあ、その辺は上手くやるわよ。で、次はここなんていいんじゃない？」
渡された依頼書に目を通す。
「人骨温泉ホテル？」
「そ、露天風呂に霊がでて、客が激減……ギャラは安いけど、温泉でのんびり出来そうね」
全く、売れっ子だから……私心で仕事を選べるんだから。
「横島君も、偶にはゆっくり休みましょうよ。事務所と家では自己鍛錬。仕事では、霊圧を抑えてるし……いつの間にか私より強くなって……そこまで強くなってどうするのよ？　この世界、程々で充

分なのに……」
「はは……こればかりは譲れません。俺、またあの人に会えた時に、自分を誇れるようになりたいんです。だから……」
「はいはい、何度も聞いたわよ。お兄さん代わりの人でしょ。横島君のやる気はわかるけど、体壊しちゃうわよ。だから、依頼で温泉行って楽しみましょうって言ってるの！　決めた！　もう決めたからね！」

美神さんはこうして、俺の体を案じて時々依頼に強制的に休養を入れたり、食事を奢ってくれたりする。

「いつもスミマセン美神さん」
「い、いや、別に私が温泉に行きたいだけだし、その、ね……今日は解散！　明日は七時までに集合よ！　時間厳守だからね！」
「わかりました。じゃあ、お先です！」

美神除霊事務所を出た俺は、いつもの日課に出る。

竜の神様のいた山への入り口は、師匠が居なくなるのと殆ど同時に無くなってしまった。

故に今の俺に出来る事は、この１０年間欠かさず続けている、霊力を使った師匠の捜索だけであった。

師匠、いや兄ちゃん……早く会いたいよ。
会ってまた、強くなったなっていってくれよな……。

そして俺は今日もこの町をあてもなくさすらうのだ。

第九章、美神除霊事務所出動せよ（そのいち）

芦優太郎の邸宅という名の異空間を離れて幾星霜。

僕は今、一人の古風な幽霊と向かい合っている。

どうしようかな？

彼女と相対した僕の正直な感想だった。

「あの……貴方、なんで私の名前を知ってるんですか？　もしかしてお知り合いの方だったんでしょうか？　ごめんなさい、私、貴方の事覚えてなくて……」

「いや、大丈夫。初対面だから……」

悪意の無い目で僕を見てくる彼女。

問題は、気絶していたらしい僕を介抱……あの時の怯えようを見ると、一概にも信用しきれないが……してくれた彼女の前で、その名をつい呼んでしまった事だ。

……おキヌちゃん……と。

そう、僕はおキヌちゃんに出会ったのだ。

真摯な目で僕の答えを待つおキヌちゃん。

この頃のおキヌちゃんは純真無垢だから、僕が答えると思って疑わないんだろうな。

さて、どうしたものか……真面目だけどうっかりさんな彼女の事

だ。

僕が話した事をうっかり他人の前で口を滑らせる可能性がかなり高いと思う。

かといって嘘をつくのも忍びない。

「よし……誤魔化そう」

「何を誤魔化すんですか？」

「何でもないよ。おキヌちゃんは気にしないでいいよ」

「はい、わかりました！」

元気にいい返事をしてくれる。

良い子だなぁ。

「実はね、君に似た知り合いがいてね。その子の名前が……」

「ああー、そうなんですかぁ。奇遇ですね。私もキヌって言うんですよ！」

すっかり納得顔のおキヌちゃん。

なんかやはり素直すぎて罪悪感が……。

「全くマスターは……言い訳が下手にも程がありますね」

「ハルピュイア！　今頃……」

「はるぴあさん？　言い訳って？」

「貴女は気にしないでいいですよ。おキヌさん」

やはり簡単に話題を逸らされる。

「マスター今まで大変でしたね。私達はあの空間では姿を保てなかった為に失礼しました」
「いや、それはいいんだけど……結局、最上の協力者になったし」
「ますたぁ？　なんですか？」

不意に話に入ってきたおキヌちゃん。
確かに英語はわからないよな。

「マスターとは主、と言う意味ですよ、おキヌさん」
「主様だったんですか！？　そんな高貴な方とは知らず、失礼致しました。度重なる無礼をお許し「待った待った待った！　違うから！　どっちも言葉の意味合いは間違ってないけど、根本的な捉え方が間違ってるから！」……違うんですか？」

彼女にたった数ヶ月で一般常識を教えた美神令子は凄い！　そう思わざるを得なかった。お金の力は凄まじい。

「なる程、退魔師の事だったんですか全く知りませんでした……う、でも私退魔師の方になんて事を……」
「いや、気にしなくても何もしないから……」
「マスター、誰か来ます」
「む、時期はわからないけど、まだ時期尚早だよね。御免ね、おキヌちゃん。僕等はもう行かなくちゃ」
「そうですか……寂しくなりますね」
「うん。じゃあ、また何時の日か……」
「はい、あっ……あの！　貴方の名前は！！」

ああ、忘れてた……相手の名前を知ってたのに、自分はだんまりじゃあ感じ悪いよね。

「僕は静馬、静馬篠宮！　また会おうね！」

「それにしても、今は何時なんだろうね？」

「マスターうるさい！　ほら、人が来ましたよ」

この召喚獣……マスターをなんだと……。

「私への罵詈雑言等を考えてる暇があるなら、あれをみればよいではないですか。マスターの疑問は全て氷解しますよ」

全くいつもいつも大事な事を後出しにして……って遠すぎてよく見えないから。

スナイパーと常人の視力を一緒にしないでよ。

まず聞こえてきたのは、その声だった。

どれだけ大声で話してるのさ。

「それにしても山の中っすねぇ」
「だから、幽霊騒ぎ一つで致命的な支障がでたんでしょうね……それにしても横島君。荷物全部持ってもらっちゃって大丈夫？　やっぱり私も持つわよ？」
「いいえ、大丈夫っすよ。こんなのいつもの修練に比べたら屁みたいなものですから」

物凄く荷物を背負った、バンダナの少年と栗色のロングヘアの女性だった。

僕は二人を知っている。認識が……ではなく「知って」いるのだ。

「第一話って事か？　なんていうタイミング」
「マスター運が良かったですね。この山で、おキヌさんとの出会いの場から参戦出来るんですから」

確かに異空間で時間が流れたにしては、不幸中の幸いだけど……。

「行かれますか？」
「いや、少し様子を見よう。今の二人の関係を見たい。もし、原作と同じ主従関係なら止めさせないと」

雪山で寒いからか、大きな声で会話をしながら僕等を通り過ぎていく。

「あっ……」
「どうしたの？　横島君？」
「いや、靴紐が……地図だともうすぐですから、先に行っといて下

さい。一寸直してから行きます」

しゃがみ込む横島忠夫に、その身を案じながらも先に進む美神令子。

正にここからが、横島忠夫とおキヌちゃんの始まりか。

「……美神さんはいったか。ねぇ、いるんでしょ？　おいでよ？」

「ええと……私の事でしょうか？」

ふらりと姿をあらわすおキヌちゃん。

「依頼書と違うな……結構な力を感じたからてっきり……ま、いいか。名前は？　俺は横島忠夫」

「はい、私キヌと言います……」

「これはどう見る？」

「私達が居なくなった後も唐巣和宏の下で鍛錬を続け、本来の力を十二分に発揮できる状態……ではないですか？　しかも、美神令子よりも高レベルの」

「だね。煩悩に特化してる訳じゃないようだし、美神令子との付き合い方も一方的じゃないみたいだ」

一緒にいる理由は違う（スケベ目的じゃない）だろうけど。

宇宙意思ってやつかな？

「じゃあ、おキヌちゃん。まだ誰も殺めたりしてないだろ？　今ならまだ間に合う。成仏しよう。のままじゃ悪霊になっちゃうし」

「気付いたか、流石は横島忠夫だ」
「マスターも危なかったですしね」
おキヌちゃんは原作一話で、通行人Ａであった横島忠夫を殺害しようとしてる。

いくら地縛の変更を望んでも、その為に人を殺めてしまえば、彼女が救われる事はない。それは悪霊の所行だから。

あの時救われてなければ、横島忠夫の言う通り悪霊に身を堕としていただろう。

「私、救われるんですか？」
「ああ、一寸待ってろよ……」

しばしの時が流れる。

「何も起こりませんね」
「霊力の発現がないな。僕等の予想外れてたのかな？」

いつの間にか標準語だし。

「あの……横島さん？」
「いや、違うんだよ！　俺、こういうの苦手で……おキヌちゃん、地脈の縛りを受けてるみたいなんだけど……何か心当たりは……ってそっか、人柱だったんだっけ」
「はい、私……才能なくて」
「一寸俺じゃ荷が重そうだな。よし！　じゃあ、美神さんに見てもらおう」

「また、難易度の高い事を……」

「ひょっとしたら現在の流れでは、美神令子は守銭奴ではないかも……それ所か、今の横島忠夫に恋心を覚えているかもしれませんよ」
「早すぎない？　まだバイト始めて期間ないよね？」
「煩悩の権化ではない横島忠夫は、人を惹きつけます。
元々宿星の線の繋がった彼女ならば有り得るかと」
ふーん、そんなものかねぇ。

「ああ、俺の雇い主の美神令子さん。守銭奴でがめつくて性格悪い、半外道だけど一応優しい人だから」

「……ハルピュイア」
「言わないでください。今更前言撤回はしません」

こうして、僕等の尾行に気づかぬまま横島忠夫とおキヌちゃんは、苦楽を共にするチームの最後の一人、美神令子の所へ向かう事になった。

第九章、美神除霊事務所出動せよ（そのに）（前書き）

新しい力を出してみました

第九章、美神除霊事務所出動せよ（そのに）

一面白で包まれたような雪山。

吹き荒れる吹雪。

周囲には生物の姿はない。

「……いないな」

そんな中、僕はとあるものを探していた。

捜索にだしたクロウからの連絡もまだない。

近くにいると思ったのに……なかなかないな。

この地域に封じられている大妖、死津喪比女。

出来る事なら、先になんとかしたいんだが……。

やはり、感知だけで探すのは難しいかなぁ。

「むっすめさん！　よっくきーけよっ！　やっまおっとこにゃほーれーんなっよ！」

「やっぱり霊だと寒さとか関係ないから、いいよな」

「横島さんも仲間になりますか？」

「冗談！　俺はまだやらなきゃならない事があるから。その辺はゆっくりやっていくよ」

先に来てしまったか。

仕方ない。今回の捜索は諦めるか。

召喚獣全員に通達して終了する。

横島忠夫一行はかなりのハイペースで進んでいる。

さて、僕はどうしようかな。

同時進行じゃ見つかるかもしれないから、やる事ないんだよな。

「ん？　横島さん、一寸待ってください」

「どうしたの、おキヌちゃん」

「おキヌさん、どうしたっすか！　自分の死体はまだまだ先っすよ！」

不意におキヌちゃんが近づいてくる。

まさか気付かれた？

慌てて場所を移動する。

「あれ？　可笑しいな？」

「急にどうしたの、おキヌちゃん？」

「いえ、誰かいたような気がしたんですけど……」

「この吹雪の中で？」

「それってもしかして、自分達のお仲間じゃあ……」

違うぞ。

でも、やはりおキヌちゃんにはバレてたんだ……なんで？

気配はちゃんと消してるのに……。

遠ざかる三人？　を見ながら、謎は深まるばかりだった。

「あった！　あったっす！　自分、これで悔いはないっす！」

「待て待て、そうじゃないだろ！　お前、山の神になるんだろ！　まだ逝くなよ」

「はっ！　そうだったっす！　申し訳ないっす、おキヌさん」

「いいえ、嬉しくて成仏したくなる気持ちはわかります。無理には……」「いえ、自分は山が好きっす！　成仏しても、俺たちゃ街には住めないっす！」

ワンダーホーゲル部って正直暑苦しいな。

慎重に慎重を重ねながら後方より、様子を窺う。

無事ワンダーホーゲル部の死体も見つけたみたいだし、おキヌちゃんも仲間に引き入れそうだ。

今回の彼等の遠征は終了かな？

「ヒホホホホーン」

声と共に、一層激しくなった吹雪が周囲に吹き荒れた。

「なんだ、急に……」
「横島さん、おかしいです。こんな吹雪、この山じゃ一度も!?」
「これじゃビバークも出来ないっす！」

三者三様の反応を見せる。

僕は声と吹雪の中心を確認する。

あそこにいるのは……雪だるま？

敵なのか？　一応様子を見るか。

「あの……どうしたんですか？」
「おキヌさん、お仲間っすか？」
「いや、妖怪の類みたいだな。おキヌちゃん、離れて。危険かもしれない……」

真っ先にコミュニケーションを取りにいったおキヌちゃん。それを心配して声をかける二人。

横島忠夫は破魔札を取り出している。

使えるのか？　横島が！？

「ホホー、ホ？　お姉さん、誰ヒホ？」
「私はおキヌって言います。そんなに泣いて、何があったんですか？」

泣き止んで顔を上げた雪だるまの妖怪は、改めて見てもやはり雪だるまだった。

「オイラ、トモダチからもらった大切なものを落としちゃったヒホ」
「落とし物ですか？」
「そうヒホ。大切にするって約束したのに、無くしちゃったヒホ……ヒホホホーン」

そして再度吹雪が巻き起こる。

「落ちつけ！　俺達が探してやるから！」
「ホ？　本当ヒホ？」
「はい！　勿論です！」
「自分も一緒に探すっす！　山の神になるなら、これも修行のうちっす！」
「ア、アリガトウヒホ！　落としたのはこの位の青い石ヒホ。宜しくヒホ」
そして、捜索が始まった。

が、すぐに終わった。

横島忠夫の特異な霊力のお陰で。

「栄光の手（ハンズオブグローリー）！」

「わあ！　剣ですか？　凄いですね、横島さん」

この時期に、あれまで使えるのか……。

「って、使い方はダウジングの振り子代わりか……まあ出来るだろうが。なんか才能の無駄遣いな気がする」

「あった、これヒホ！」

「横島さん凄いっす！　まるで魔法使いみたいっす！」

「一応、ゴーストスイーパー志望だしな。この位は出来ないと」

いやいや、充分過ぎるから……。

「ヒホ……オイラ、皆にアリガトウしたいけど、出来る事がないヒホ」

「気にするなよ、困った時はお互い様さ。お礼が欲しい訳じゃないしな」

「見つかって本当に良かったですね」

「アリガトウヒホ！！　あ、そうヒホ！　じゃあ、これを持ってみて欲しいヒホ！」

懐から何かを取り出して渡している。カード？

「なんすか！？　消えちゃったんすけど！」
「俺もだ。なんだ今の……」
「え？　消えませんよ？　あの、雪だるまさん……これは？」
雪だるまは嬉しそうに、おキヌちゃんの周りをぐるぐる回りだす。
「お姉さん、適合者ヒホ！　ペルソナ使いになれるヒホよ」
「ペルソナ？　なんだそれ？」
僕も聞いた事ないな。
仮面？　なんだ？
「オイラもよくわかんないけど、オイラ達がお姉さんの力になれるって事ヒホ」
「そうなんですか。有難うございます。大切にしますね」
「うん！　ヒホ。では、改めて……オイラは妖精、ジャックフロスト……今後とも宜しくヒホ」
去っていく雪だるま……ジャックフロスト。
残された三人＋僕は、やはりよく意味がわからなかった。
「いっちゃいました」
「結局何だったんだ？　ペルソナってなんだ？」「さあ？　自分にはわからないっす！」
わざわざ妖精が、渡したカードがなんの力もない訳はない。
横島忠夫の力量、よくわからなかったし……ちょっかいだすか。

「発動、召喚、剛練武！」

「何、何ですか？」

「これは……」

「なんで次から次へと……大変っす！！」

彼等の前でその姿を現界させる剛練武。

今回は、雪で出来たスノータイプみたいだ。

「軽めにね？」

頷いた剛練武が、軽めに彼等に襲いかかった。

「二人とも下がって！　ハンズオブグローリー！　行けぇ」

横島の作り出した霊波刀が伸びて、剛練武に直撃する。

「当たったっす！」

「でも……」

その位の衝撃じゃ、剛練武は歩みを止めない。

「き、来たっすよ……」

「よ、横島さん……」

「大丈夫。おぉおおお！」

幽霊の二人がいる為、退路がない（と思い込んでいる）横島は、栄光の手を剣サイズにして剛練武に斬りかかる。

「でや！　だあ！　おりゃ！　って、硬過ぎる！」
我関せずと拳を叩きつける剛練武。
「グオオ！」
「くっ！　サイキックソーサー！　がっ！」
発動した自信の前方全てを保護するような巨大な霊波の盾。
剛練武の拳はそれを貫通さ、横島忠夫を遥か後方まで吹き飛ばした。
あれは……でかいな。
横島忠夫のサイキックソーサーは、ゴシックシールドのように体全体を包んでいた。
しかも、瞬間、剛練武の拳に耐えた。
あれ程の広域を保護して尚だ……中々の強度があると言えるな。
「横島さん！」
「あ、あ、お、おキヌさん……こっち来るっすよ！」
剛練武は横島忠夫を無視して、おキヌちゃん達の方に向かう。
「く、うう……」
「おキヌ、さん、自分達も、まずいっすよね」
「こっちに来てるし、幽霊もぶてるんでしょうか……？」
二人の幽霊は恐怖で動けくなる。

そして、振り上げられる拳。

「よ、横島さん。じ、自分は！」

「……ん！」

「二人共！　ぐ……間に合えよ……行けぇ！　サイキックソーサー！」

投射された巨大なサイキックソーサー。

硬く目を閉じるおキヌちゃんと、あわあわしてるワンダーホーゲル部。

サイキックソーサーが間に合うように、（わざと）ゆっくりと拳を振り下ろす。

しかし、その結果は僕の予想の遥か上だった。　巨大なサイキックソーサーは、確かに爆発を起こした。

しかし、当たったのは剛練武にではなく、その前に出現した青い帽子を被った白い雪だるまにだった。

あれは……さっきの雪だるま？

でも、おキヌちゃんの前で透明になって浮いてる……ドユコト？

「痛いホ！　まだ何も言ってないのに、酷いホ！」

「ウゴ？」

でも爆発の衝撃か、あの雪だるまの何かなのか、何故か吹き飛んだ剛練武。

「まあ、気を取り直して……ホ。我は汝、汝は我。我は汝の心の海よりいでしもの……氷結の妖精、ジャックフロストだホ」
「……私の、力？　あ、さっきのカードが……」

おキヌちゃんは、先程ジャックフロストから渡されたスペルカードを取り出す。

突如巻き起こる氷結の乱舞。
全てが剛練武に降り注いだ

流石にたまらず後退する剛練武。

「今だ！　行くぞ、デカブツ！　ハンズオブグローリー！　最！大！　出！　力！　……斬！！」

カードを握り締めたまま呆然としているおキヌちゃんを飛び越えて、一気など接近する横島忠夫。

なんと……霊波刀を両手持ちにして、先程の遠距離攻撃以上の長さと太さにすると、そのまま一閃したのだ。

片手剣と大剣を使い分けられるのか。

流石に耐えられず、姿を消す剛練武。

「あの……貴方は先程の雪だるまさんじゃないんですか？」
「我は汝ヒホ……これが汝の力……ペルソナヒホ……」

そしてゆらりと姿を消したペルソナ、ジャックフロスト。

「す、凄いっす！　お二人共！」
「私の……力？」
「おキヌちゃん、凄いよ！」

僕から見たら、二人共凄いけどね。

さて、行くか。

「仲良き事は美しき……実に結構。でも、こっちも見てくれると嬉しいな。……強くなったね、忠夫君」
「あ、あの！　わ、私、なんか……」
「え？　まさか……」
「ん？　ん？　誰っすか？　お二人の知り合いっすか？」

姿を表した僕が一番始めに見たのは、飛びついて号泣する横島忠夫ではない、懐かしい忠夫君の姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9387w/

神は哀れな子羊に慈悲を与える

2011年12月5日21時52分発行